



インストールガイド

Sun Java™ Studio Enterprise 7 2004Q4

Sun Microsystems, Inc.
www.sun.com

Part No. 819-1300-10
2004 年 12 月, Revision A

Copyright 2004 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

U.S. Government Rights - Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements. Use is subject to license terms.

この製品には第三者によって開発された成果物が含まれている場合があります。フォントテクノロジーを含むサードパーティ製のソフトウェアの著作権およびライセンスは、Sun Microsystems, Inc. のサプライヤーが保有しています。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴ、Java、JavaHelp、docs.sun.com、および Solaris は、米国および他の各国における Sun Microsystems, Inc. の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンス規定に従って使用されており、米国および他の各国における SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。SPARC の商標を持つ製品は、Sun Microsystems, Inc. によって開発されたアーキテクチャに基づいています。

UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

本製品はライセンス規定に従って配布され、本製品の使用、コピー、配布、逆コンパイルには制限があります。本製品のいかなる部分も、その形態および方法を問わず、Sun Microsystems, Inc. およびそのライセンサーの事前の書面による許可なく複製することを禁じます。

本製品は、米国輸出管理法の対象となっています。また、他国においても輸出入管理法規の対象となっている場合があります。お客様は、それらのすべての法令および規制を厳守することに同意し、納品後に輸出、再輸出、または輸入の許可が必要となった場合には、お客様にそれらを取得する責任があるものとします。本製品を米国輸出規制法に指定されている各国または団体に提供することを禁じます。お客様は、本ソフトウェアが、核施設の設計、建設、運転または保守で使用するように設計、ライセンス、および意図されていないことを認識するものとします。Sun Microsystems, Inc. は、そのような目的の適合性に関して、明示的、黙示的を問わずいかなる保証も致しません。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含み、明示的であるか黙示的であるかを問わず、あらゆる説明および保証は、法的に無効である限り、拒否されるものとします。

原典:	<i>Sun Java Studio Enterprise 7 2004Q4 Installation Guide</i>
	Part No: 817-7971-10
	Revision A



Please
Recycle



Adobe PostScript

目次

はじめに	ix
お読みになる前に	x
書体と記号について	xi
関連マニュアル	xii
1. Sun Java Studio Enterprise 7 ソフトウェアの概要	1
2. インストールの準備	3
インストールの概要	4
導入計画の作成	4
サポートされているプラットフォーム	5
インストールする製品の選択	5
インストール前のシステムの確認	7
システム要件	8
ソフトウェア製品の依存および競合関係	10
インストールされているコンポーネント製品の検出	11
インストールされている既存コンポーネント製品の取り扱い	11
コンポーネント製品の依存関係	13
共有コンポーネントに対する依存関係 (Solaris OS のみ)	15
コンポーネント製品サーバーのアップグレードパス (Solaris OS のみ)	15

J2SE の取り扱い	15
その他の前提条件の確認	16
3. Java Studio Enterprise の インストール (Microsoft Windows)	17
GUI インストーラの利用	17
インストーラに関する追加情報	20
初期システム検査レポート	20
製品のシリアル番号	21
製品の選択	22
コンテナの選択	22
リモートサーバーの場所	23
インストールディレクトリ	23
構成	24
静的 IP アドレスを持たないマシンへのインストール	25
サイレントモードでのインストール	26
4. Java Studio Enterprise のアンインストール (Microsoft Windows)	27
GUI アンインストールの利用	27
サイレントモードでのソフトウェアのアンインストール	29
5. Java Studio Enterprise の インストール (Solaris OS)	31
Solaris OS パッチ要件の確認	31
GUI インストーラの利用	32
インストーラに関する追加情報	35
「共通コンポーネントのアップグレード」	35
インストールディレクトリ	36
システム要件の確認	36
リモートサーバーの場所	36
構成	37

root 以外のユーザーによる製品の使用	37
サイレントモードでのインストール	40
インストール中の障害の追跡	40
6. Java Studio Enterprise の アンインストール (Solaris OS)	43
GUI アンインストーラの利用	43
サイレントモードでのソフトウェアのアンインストール	45
7. サイレントモードでのインストールとアンインストール	47
サイレントモードでのインストール	47
サイレントモードでのインストールの概要	48
サイレントモードでのインストールの準備	48
サイレントモードの使用に関する注意事項	48
状態ファイルの作成	49
状態ファイルの編集	51
サイレントモードでのインストーラの実行	54
サイレントモードでのソフトウェアのアンインストール	56
8. Java Studio EnterpriseIDE の設定	61
IDE の起動	61
IDE の設定	63
設定インポートウィザード	63
設定ウィザード	63
登録ウィザード	64
コラボレーション実行環境の利用	64
起動オプションの利用	67
Java Studio Enterprise IDE のユーザーディレクトリ	69
IDE 設定中の障害追跡	70
9. IDE における Sun Java System Application Server インスタンスの利用	73

Application Server の統合とインスタンスについて	74
Application Server のインスタンス (Microsoft Windows)	74
Application Server のインスタンス (Solaris OS)	75
Application Server と IDE の統合	77
デフォルトの管理ドメインの使用	77
管理ドメインについて	79
ユーザーごとの管理ドメインの作成	80
その他の一般的な Application Server 作業	85
10. IDE における Sun Java System Web Server インスタンスの利用	87
適切な Web Server インスタンスの使用 (Microsoft Windows)	87
適切な Web Server インスタンスの使用 (Solaris OS)	91
その他の一般的な Web Server 作業	94
11. データベースの利用	97
PointBase 接続の設定	97
他の JDBC 対応データベースの利用	101
12. インストールしたソフトウェアのアップグレード	103
アップデートセンターを利用したモジュールの更新	103
ライセンスマネージャツールの使用法	104
13. Java Studio Enterprise サーバーの利用 (Microsoft Windows)	107
検証の概要	107
構成情報の確認	108
インストールされたサーバーの検証	108
その他のマニュアルの入手方法	118
サーバー検証中の障害追跡	118
よくあるエラーの診断	123

14.	Java Studio Enterprise サーバーの使用方法 (Solaris OS)	125
	検証の概要	125
	構成情報の確認	126
	インストールされたサーバーの検証	126
	サーバーの管理コンソールへのアクセス	129
	サーバーの停止	134
	その他のマニュアルの入手方法	137
	サーバー検証中の障害追跡	137
	よくあるエラーの診断	142
15.	障害の追跡	145
	インストール時の障害の標準的な追跡方法	145
	インストールログファイルの調査	145
	リソースと設定の確認	147
	検証手順の実施	148
	提供媒体の確認	148
	Directory Server の接続確認	148
	パスワードの確認	148
	DNS サフィックスの確認	149
	Java Studio Enterprise の問題と対策	150
	Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストール時の問題	151
	サーバーの起動時の問題	151
	不完全なアンインストールの発見と解決	152
A.	Solaris OS 用パッチのパッチ番号と説明	173
B.	インストールした Java Studio Enterprise のディレクトリ構造	177
C.	Java Studio Enterprise サーバーのリファレンス (Microsoft Windows)	181
	ポート番号の割り当て	181

コマンド行の使用法	181
サーバーの詳細リファレンス	182
Web コンテナが Application Server の場合	186
Web コンテナが Web Server の場合	187
D. Java Studio Enterprise サーバーのリファレンス (Solaris OS)	189
ポート番号の割り当て	189
Web コンテナが Application Server の場合	190
Web コンテナが Web Server の場合	190
E. Java Studio Enterprise におけるポートの使用	195
F. Java Studio Enterprise 共有コンポーネント (Solaris OS のみ)	199
索引	201

はじめに

このマニュアルでは、Sun™ Java™ Studio Enterprise 7 2004Q4 (以降「Java Studio Enterprise」) ソフトウェアのインストールと設定、起動方法を説明しています。このマニュアルは、このソフトウェアをインストールするシステム管理者および開発者の両方を対象読者にしてあります。ただし、オペレーティング環境の基本的なインストール手順の経験があることが前提になります。

画面イメージはプラットフォームによってやや異なります。ほぼすべての手順で Java Studio Enterprise ソフトウェアのインタフェースを使用しますが、コマンド行からコマンドを入力することもあります。このコマンドも、プラットフォームによってやや異なります。たとえば Microsoft Windows コマンドは以下のようになります。

```
c:\>cd MyWorkDir\MyPackage
```

UNIX® コマンドの場合は、以下のようになります。

```
% cd MyWorkDir/MyPackage
```

お読みになる前に

Java Studio Enterprise ソフトウェアで使用するプラットフォームへのソフトウェア製品のインストールおよびアンインストール方法をよく理解しておいてください。たとえば次のようなシステム管理コマンドの知識が必要です。

- Solaris™ オペレーティングシステム (以降「Solaris OS」) の場合 - su、xhost、pkginfo、patchadd、grep
- Microsoft Windows システムの場合 - サービス、レジストリキー、regedit ユーティリティ

オペレーティングシステムのシステム管理コマンドについて不明な点がある場合、あるいは管理者またはスーパーユーザー権限を持つユーザーアカウントを持っていない場合は、システム管理者にソフトウェアのインストールをサポートしてもらってください。

Java Studio Enterprise 統合開発環境 (IDE) を使用するにあたっては、以下のような分野の知識も必要になります。

- Java™ プログラミング言語
- Enterprise JavaBeans™ (EJB™) テクノロジーの概念
- Java™ サブレットの API 構文
- JDBC™ API をサポートするドライバの構文
- JavaServer Pages™ テクノロジーの構文
- HTML 構文
- JDBC データベースの使用法
- Java™ 2 Enterprise Edition (J2EE™) アプリケーションのアセンブルおよび配備の概念
- Web サービス
- J2EE アプリケーションサーバーの使用法

Java Studio Enterprise IDE を正しく使用するには、次のリソースで説明されているような J2EE の概念に関する知識が必要です。

- Java 2 Platform, Enterprise Edition Blueprints
<http://java.sun.com/j2ee/bluePrints>
- Java 2 Platform, Enterprise Edition Specification
<http://java.sun.com/j2ee/download.html#platformspec>
- J2EE Tutorial
<http://java.sun.com/j2ee/tutorial>
- Java Servlet Specification バージョン 2.3
<http://java.sun.com/products/servlet/download.html#specs>

■ JavaServer Pages Specification バージョン 1.2

<http://java.sun.com/products/jsp/download.html#specs>

XML ベースの RPC (JAX-RPC) の Java API の知識があると役立ちます。詳細については、以下の Web ページを参照してください。

<http://java.sun.com/xml/jaxrpc>

注 – Sun では、本マニュアルに掲載されている第三者の Web サイトのご利用に関しましては責任はなく、保証するものでもありません。また、これらのサイトあるいはリソースに関する、あるいはこれらのサイト、リソースから利用可能であるコンテンツ、広告、製品、あるいは資料に関しても一切の責任を負いません。Sun は、これらのサイトあるいはリソースに関する、あるいはこれらのサイトから利用可能であるコンテンツ、製品、サービスの利用あるいはそれらのものを信頼することによって、あるいはそれに関連して発生するいかなる損害、損失、申し立てに対する一切の責任を負いません。

書体と記号について

書体または記号*	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例。	.login ファイルを編集します。 ls -a を実行します。 % You have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して表します。	% su Password:
<i>AaBbCc123</i> またはゴシック	コマンド行の可変部分。実際の名前や値と置き換えてください。	rm <i>filename</i> と入力します。 rm ファイル名 と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『Solaris ユーザーマニュアル』
「 」	参照する章、節、または、強調する語を示します。	第 6 章「データの管理」を参照。 この操作ができるのは「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅をこえる場合に、継続を示します。	% grep <code>``#define \</code> <code>XV_VERSION_STRING</code> '

* 使用しているブラウザにより、これら設定と異なって表示される場合があります。

関連マニュアル

Java Studio Enterprise のマニュアルとしては、Acrobat Reader (PDF) 形式のマニュアル、チュートリアルと、HTML 形式のリリースノート、オンラインヘルプ、チュートリアルが提供されています。

オンラインで入手可能なマニュアル

ここで紹介しているマニュアルは、docs.sun.comSM Web サイトおよび Sun Java Studio Enterprise Developers Source ポータルサイト (<http://developers.sun.com/jsenterprise>) のドキュメントリンクから入手できます。

docs.sun.com Web サイト (<http://docs.sun.com>) では、インターネットで Sun のマニュアルを参照、印刷、購入することができます。

- 『Sun Java Studio Enterprise 7 2004Q4 リリースノート』
- Part No. 819-1302-10

最新のリリースの変更点や技術的な注意事項を説明しています。

- 『Sun Java Studio Enterprise 7 インストールガイド』 (PDF 形式)
- Part No. 819-1300-10

サポートしている各プラットフォームへの Sun Java Studio Enterprise 7 統合開発環境 (IDE) のインストール方法を説明しています。システム要件やアップグレード方法、サーバー情報、コマンド行スイッチ、インストールされるサブディレクトリ、データベースの統合、アップデートセンターの使用方法などの関連情報も記載されています。

- 『J2EE アプリケーションのプログラミング』 - Part No. 819-1298-10

EJB モジュールや Web モジュールを J2EE にアセンブルする方法を説明しています。また、J2EE アプリケーションの配備や実行についても説明しています。

- Web アプリケーションフレームワークマニュアル (PDF 形式)

- 『Web アプリケーションフレームワーク コンポーネント作成ガイド』
- Part No. 819-1284-10

Web アプリケーションフレームワークのコンポーネントアーキテクチャと新しいコンポーネントの設計、作成、配布工程を説明しています。

- 『Web アプリケーションフレームワーク コンポーネントリファレンスガイド』
- Part No. 819-1286-10

Web アプリケーションフレームワークライブラリに提供されているコンポーネントを説明しています。

- 『Web アプリケーションフレームワーク 概要』 - Part No. 819-1288-10
Web アプリケーションフレームワークとその位置づけ、仕組み、他のアプリケーションフレームワークと異なる点を説明しています。
- 『Web アプリケーションフレームワーク チュートリアル』
- Part No. 819-1290-10
Web アプリケーションフレームワークを使用して Web アプリケーションを構築する際の仕組みとその手法を紹介しています。
- 『Web アプリケーションフレームワーク 開発ガイド』 - Part No. 819-1292-10
Web アプリケーションフレームワークを使用し、開発するアプリケーションの構成要素として使用可能なアプリケーションコンポーネントの作成および使用の手順と、そのアプリケーションを大部分の J2EE コンテナに配備する方法を説明しています。
- 『Web アプリケーションフレームワーク IDE ガイド』 - Part No. 819-1294-10
Sun Java Studio Enterprise 7 2004Q4 IDE の各部の概要、および Web アプリケーションフレームワークアプリケーションを開発するためのビジュアルツールの使用方法を重点的に説明しています。
- 『Web アプリケーションフレームワーク タグライブラリリファレンス』
- Part No. 819-1296-10
Web アプリケーションフレームワークのタグライブラリを簡単に紹介し、タグライブラリに提供されているタグに対する包括的な参照を示しています。

チュートリアル

Sun Java Studio Enterprise 7 には、IDE の機能を理解する手助けとなるチュートリアルがいくつか用意されています。これらのチュートリアルにある技術、およびコード例は、そのまま、または編集を加えて、実際のアプリケーションの開発に利用することができます。すべてのチュートリアルで、Sun Java System Application Server への配備例が紹介されています。

チュートリアルは、すべて Developers Source ポータルのリンク「Tutorials & Code Camps」から利用可能です。IDE で「ヘルプ」>「コードサンプルとチュートリアル」>「概要」を選択すると、このサイトにアクセスできます。

- 「クイックスタートガイド」は、Sun Java Studio IDE の紹介をしています。チュートリアルは、Sun Java Studio を初めてご使用になる方や、特定の機能について早く知りたい場合は、このガイドから始めてください。これらのチュートリアルは、単純な Web アプリケーションや J2EE アプリケーションの開発方法、Web サービスの生成方法を説明しています。また、UML モデリング、リファクタリングの導入方法についても説明しています。ガイドを終えるための所要時間は数分です。

- 「チュートリアル」は、Sun Java Studio IDE の特定の 1 つの機能に焦点を当てています。ある機能の詳細に関心がある場合は、これらを実行してみてください。例で説明している機能によって、初めからアプリケーションを構築する場合と、提供されたソースファイルを使用して構築する場合があります。チュートリアルは 1 時間以内で完成できます。
- 「概要ビデオ」は、技術の説明がビデオで提供されています。IDE の視覚的な概要や、特定の機能の詳細説明を見ることができます。概要ビデオにかかる時間は数分です。概要ビデオは、任意の個所で開始、終了することもできます。

オンラインヘルプ

Sun Java Studio Enterprise 7 IDE には、オンラインヘルプが用意されています。ヘルプキー (Microsoft Windows 環境では F1 キー、Solaris オペレーティング環境では Help キー) を押すか、「ヘルプ」>「ヘルプ (すべて)」を選択して開くことができます。ヘルプの項目と検索機能が表示されます。

アクセシブルな製品マニュアル

マニュアルは、技術的な補足をすることで、ご不自由なユーザーの方々にとって読みやすい形式のマニュアルを提供しております。アクセシブルなマニュアルは以下の表に示す場所から参照することができます。

マニュアルの種類	アクセシブルな形式と格納場所
マニュアルとチュートリアル	形式: HTML 場所: http://docs.sun.com
チュートリアル	形式: HTML 場所: Developers Source ポータル (http://developers.sun.com/jsenterprise) のリンク 「Examples & Code Camps」
リリースノート	形式: HTML 場所: http://docs.sun.com

第1章

Sun Java Studio Enterprise 7 ソフトウェアの概要

この章では、Sun™ Java™ Studio Enterprise 7 2004Q4 (Java Studio Enterprise) 製品の内容を簡単に説明します。Java Studio Enterprise ソフトウェアのツールおよびサーバー一式は、CD-ROM 2 枚か DVD 1 枚、またはダウンロードファイル 2 つの構成で提供されます。この媒体構成によって、ツールコンポーネントを含むディスク 1 (またはファイル 1) を使用して最初に必要なツールをすばやくインストールできます。また、オプションサーバーを含むディスク 2 (またはファイル 2) を使用し、ツールのインストール直後、または後日にオプションのサーバーをインストールすることもできます。インストールおよびダウンロード内容は、実際のニーズに合わせてカスタマイズできます。Java Studio Enterprise の完全版の物理媒体キットには、サポートされているすべてのプラットフォームにインストールするための全ファイルからなる DVD 1 枚が含まれています。

Sun Java Studio Enterprise 7 ソフトウェアは、以下が含まれています。

- Sun Java Studio Enterprise 7 IDE
- Java Studio Enterprise 7 用プラグインおよび追加モジュール
 - Sun Java System Application Server Standard Edition 7 2004Q2 プラグイン
 - Sun Java System Web Server 6 2004Q1 Update 1, Service Pack 2 プラグイン
 - Web アプリケーションフレームワーク
- Sun Java Studio Enterprise 7 コラボレーション実行環境

- 表 1-1 に示す Sun Java Enterprise System サーバー。プラットフォームによってバージョンが異なることに注意してください。

表 1-1 プラットフォーム別のコンポーネント製品バージョン

Microsoft Windows 用実行環境のバージョン	Solaris OS 用実行環境のバージョン
Sun Java System Application Server Standard Edition 7 2004Q2	Sun Java System Application Server Standard Edition 7 2004Q2
Sun Java System Message Queue 3.5 SP 1	Sun Java System Message Queue 3.5 SP 1
Sun Java System Web Server 6 2004Q1 Update 1, Service Pack 2	Sun Java System Web Server 6 2004Q1 Update 1, Service Pack 2
Sun Java System Directory Server 5.2	Sun Java System Directory Server 5 2004Q2
Sun Java System Access Manager 6.1 (formerly Identity Server)	Sun Java System Access Manager 2004Q2
Sun Java System Portal Server 6.2	Sun Java System Portal Server 2004Q2
Sun Java System Application Server 用 Sun Java System Identity Server Policy Agent 2.1	Sun Java System Application Server 用 Sun Java System Identity Server Policy Agent 2.1

このリリースの **Java Studio Enterprise** は、ダウンロードおよびインストールが容易に行えるようにするために、2 つに分かれています。次の表は、その 2 つの部分の内容をまとめています。コンポーネント製品がある媒体上の場所については、表 2-3 および表 2-4 を参照してください。

表 1-2 Java Studio Enterprise のコンポーネント製品*

ツールコンポーネント	オプションサーバー
Java Studio Enterprise IDE	Sun Java System Web Server
Sun Java System Application Server	Sun Java System Directory Server
Sun Java System Message Queue	Sun Java System Access Manager および Sun Java System Identity Server Policy Agent
コラボレーション実行環境	Sun Java System Portal Server

* コンポーネント製品のバージョンは、プラットフォームによって異なります。詳細は、表 1-1 を参照してください。

ソフトウェアおよびインストール後の手順に関する情報は、**Java Studio Enterprise** の「次のステップ」ページにも記載されています。ディスク 2 (またはダウンロードファイル 2) のインストールを終えると、このページを開くかどうかの選択画面が表示されます。この HTML ページは、インストールディレクトリの次の場所にあります。`java-studio-install-dir\Docs\locale\ja\WhatsNext.html`

第2章

インストールの準備

この章には、Java Studio Enterprise 開発環境をインストールする前に確認しておくべき情報が含まれています。Java Studio Enterprise は、J2EE の概念を利用し、Java™ プログラミング言語で作成されたアプリケーションを開発、配備するための開発者向けツールおよびサーバー一式を提供します。この製品を構成するコンポーネント製品ソフトウェアの個々のバージョンについては、第 1 章の表 1-1 を参照してください。

この章で取り上げる内容は以下のとおりです。

- 4 ページの「インストールの概要」
- 4 ページの「導入計画の作成」
- 7 ページの「インストール前のシステムの確認」
- 16 ページの「その他の前提条件の確認」

インストールの概要

この節では、ソフトウェアをシステムにインストールして問題点がないかを確認する手順の概要を説明します。インストーラは、このソフトウェアのどの言語版でも共通です。インストール中、必要な言語サポートを選択するよう求められます。英語サポートは必ずインストールされます。

表 2-1 ソフトウェアのインストールおよび構成の概要

作業	参照ページ
導入計画の作成	4 ページの「導入計画の作成」
インストール前のシステムの検査	7 ページの「インストール前のシステムの確認」
(Solaris のみ) 必要な Solaris パッチのインストール	付録 A の必要なパッチの一覧および 31 ページの「Solaris OS パッチ要件の確認」を参照。
Java Studio Enterprise のインストール	17 ページの「Java Studio Enterprise のインストール (Microsoft Windows)」 31 ページの「Java Studio Enterprise のインストール (Solaris OS)」
IDE 環境の初期設定	61 ページの「Java Studio EnterpriseIDE の設定」
Sun Java System Application Server の構成の確認	73 ページの「IDE における Sun Java System Application Server インスタンスの利用」
(省略可能) 選択したサーバーが正しくインストールされていることの確認	Microsoft Windows の場合は、第 13 章を参照してください。 Solaris OS の場合は、第 14 章を参照してください。
(省略可能) PointBase の設定	97 ページの「データベースの利用」

導入計画の作成

正しく導入計画を立てるには、次のことを行ってください。

- マシンがサポートされているプラットフォームであることを確認する (5 ページの「サポートされているプラットフォーム」を参照)。

- インストールする製品を選択する (5 ページの「インストールする製品の選択」を参照)
- 以前にインストールしたソフトウェアバージョンをアンインストールする必要があるかどうかを確認する (11 ページの「インストールされている既存コンポーネント製品の取り扱い」を参照)。

サポートされているプラットフォーム

Java Studio Enterprise は次のプラットフォームで使用できます。

- Microsoft Windows XP Professional Edition SP2
- Microsoft Windows XP Professional SP1a
- Microsoft Windows 2000 Professional SP4
- Solaris™ 9 OS Update 7 (x86)
- Solaris™ 8 OS Update 7 (UltraSPARC® III)
- Solaris™ 9 OS Update 7 (UltraSPARC® III)

インストールする製品の選択

Java Studio Enterprise ソフトウェアは、ツールコンポーネントとオプションサーバーの 2 つに分かれています。基本 IDE 開発環境を構成するには、ツールコンポーネントインストーラを使用して、Java Studio IDE と Application Server、コラボレーション実行環境をインストールします。Web Server、Directory Server、Access Manager および Portal Server をインストールする場合は、オプションサーバーインストーラを使用します。

表 2-1 は、ツールコンポーネントおよびオプションサーバーそれぞれの内容をまとめています。

表 2-2 コンポーネント製品の説明*

ツールコンポーネント	オプションサーバー
Java Studio Enterprise IDE	Sun Java System Web Server
Sun Java System Application Server	Sun Java System Directory Server
Sun Java System Message Queue	Sun Java System Access Manager および Sun Java System Identity Server Policy Agent
コラボレーション実行環境	Sun Java System Portal Server

* コンポーネント製品のバージョンは、プラットフォームによって異なります。詳細は、表 1-1 を参照してください。

Sun Java Studio Enterprise 7 ソフトウェアは、DVD/CD からインストールすることも、Web サイトから zip ファイルをダウンロードしてインストールすることもできます。表 2-3 は、ツールコンポーネントおよびオプションサーバーがある場所を示します。

表 2-3 ソフトウェアコンポーネント製品がある場所

プラットフォーム	内容	場所
Microsoft Windows	ツール コンポーネント	DVD: <i>media-drive</i> : \ToolsComponents_Windows\ installer.bat CD: JSE_04Q4_WIN_1(<i>media-drive</i>): installer.bat
	オプション サーバー	DVD: <i>media-drive</i> : \OptionalServers_Windows\ installer.bat CD: JSE_04Q4_WIN_2(<i>media-drive</i>): installer.bat
x86 版 Solaris	ツール コンポーネント	DVD: / <i>media-drive</i> /ToolsComponents_Solaris_x86/installer CD: /cdrom/ <i>volume-label</i> /installer where <i>volume-label</i> = jse_04q4_x86_1
	オプション サーバー	DVD: / <i>media-drive</i> /OptionalServers_Solaris_x86/installer CD: /cdrom/ <i>volume-label</i> /installer ここで、 <i>volume-label</i> =jse_04q4_x86_2 です。
SPARC 版 Solaris	ツール コンポーネント	DVD: / <i>media-</i> <i>drive</i> /ToolsComponents_Solaris_sparc/installer CD: /cdrom/ <i>volume-label</i> /installer where <i>volume-label</i> = jse_04q4_sparc_1
	オプション サーバー	DVD: / <i>media-</i> <i>drive</i> /OptionalServers_Solaris_sparc/installer CD: /cdrom/ <i>volume-label</i> /installer ここで、 <i>volume-label</i> =jse_04q4_x86_2 です。

表 2-4 は、各プラットフォーム用ダウンロードファイルの名前と内容をまとめています。

表 2-4 プラットフォーム別ダウンロードファイルの内容とファイル名

プラットフォーム	内容	ファイル名
Microsoft Windows	ツールコンポーネント	jstudio_ent_04Q4-ga-win-1.zip
	オプションサーバー	jstudio_ent_04Q4-ga-win-2.zip
x86 版 Solaris	ツールコンポーネント	jstudio_ent_04Q4-ga-solaris-x86-1.zip
	オプションサーバー	jstudio_ent_04Q4-ga-solaris-x86-2.zip
SPARC 版 Solaris	ツールコンポーネント	jstudio_ent_04Q4-ga-solaris-sparc-1.zip
	オプションサーバー	jstudio_ent_04Q4-ga-solaris-sparc-2.zip

インストール前のシステムの確認

インストール中、インストーラは次のシステム検査を行います。

- **システム要件**：インストールに必要なハードウェア、オペレーティングシステムパッチ、メモリーの有無。8 ページの「システム要件」を参照。
- **不完全なアンインストール**：インストールされている Java Studio Enterprise が完全でないことを示す兆候の有無。この検査は、Microsoft Windows システムで行われます。インストールされている製品やレジストリキーエントリ、製品レジストリエントリ、Windows サービスに矛盾点がないかどうかをチェックします。問題が検出された場合、矛盾点とその対処方法をまとめたレポートが表示されます。図 2-1 は、このレポート例です。
- **ソフトウェア製品の依存および競合関係**：Java Studio Enterprise ソフトウェアと互換性のないソフトウェアの有無。また、その他のソフトウェアの競合の有無。10 ページの「ソフトウェア製品の依存および競合関係」を参照してください。



図 2-1 初期システム検査レポート例 (Microsoft Windows)

システム要件

システム要件では、以下が検査されます。

- ソフトウェアをインストールするための適切なアクセス権の有無
- 必要または推奨メモリー容量の有無
- 選択された製品用の十分なディスク容量の有無
- 必要なオペレーティングシステムパッケージおよび必要なレベルのパッチの有無 (Solaris のみ)

適切なユーザー権限の有無

- (Solaris OS の場合) インストールには、スーパーユーザー (root) 権限が必要です。
- (Microsoft Windows の場合) インストールには、管理者権限 (administrator) が必要です。

適切なユーザー権限がない場合、あるいはこれらの権限を必要とするソフトウェアのインストールについて不明な点がある場合は、システム管理者にお尋ねください。

メモリーおよびディスク容量要件

検出されたメモリーが推奨容量に満たない場合、インストーラは警告を表示しますが、インストールの続行は可能です。ただし、少ないメモリーでソフトウェアをインストールすると、ソフトウェアの実行時の使用中にパフォーマンスの低下が起きることがあります。

インストールを続行するには、オペレーティングシステムおよびディスク容量検査に合格する必要があります。

表 2-5 は、サポートされているプラットフォームに完全な構成の ツールコンポーネントおよびオプションサーバーをインストールするために必要なシステム要件をまとめています。

表 2-5 1 台のシステムにツールおよびサーバーをインストールする場合の Java Studio Enterprise システム要件

サポートされているプラットフォーム	最小構成	推奨構成
Windows 2000 Pro、Windows XP Pro	CPU: Pentium III 500 MHz 512M バイト RAM	CPU: Pentium IV、1.4 GHz 以上 1G バイト RAM
Solaris 9 OS x86 プラットフォーム版	CPU: Pentium III 500 MHz 512M バイト RAM	CPU: Pentium IV、1.4 GHz 以上 1G バイト RAM
Solaris 8 OS、Solaris 9 OS (32 ビット/64 ビット、UltraSPARC® プラットフォーム)	CPU: UltraSPARC® II 450 MHz 512M バイト RAM	CPU: UltraSPARC® III 750 MHz 1G バイト RAM

これらは一般的な指針です。要件は、Java Studio Enterprise ソフトウェア用にインストールした追加のソフトウェアによって異なることがあります。

インストールに必要なディスク容量を決定する際の最大の要因は、インストールする製品と、導入先システム上の互換製品の有無です。個々のマシンに固有のその他の要因によって、使用されるディスク容量が影響を受けることもあります。ディスク容量が不足していることを検出した場合、インストーラは途中でインストールを打ち切ります。

表 2-6 は、以下をインストールする場合の、サポートされているプラットフォームごとのディスク容量要件を示しています。

- フルインストール (全コンポーネント製品)
- ツールおよび J2SE version 1.4.2_05 platform (IDE、Application Server および Message Queue を含む)

■ 個別コンポーネント製品サーバー

表 2-6 Java Studio Enterprise ソフトウェアのディスク容量要件

コンポーネント製品	Microsoft Windows	Solaris SPARC 版	Solaris x86 版
フルインストール (全コンポーネント製品)	1100M バイト	860M バイト	750M バイト
J2SE + ツールコンポーネント	650M バイト	490M バイト	490M バイト
Application Server	220M バイト	110M バイト	110M バイト
Message Queue	20M バイト	8M バイト	20M バイト
コラボレーション実行環境	4M バイト	4M バイト	4M バイト
Directory Server	130M バイト	60M バイト	45M バイト
Access Manager	85M バイト	80M バイト	60M バイト
Portal Server	100M バイト	160M バイト	95M バイト
Web Server	140M バイト	75M バイト	70M バイト
スワップ空間	2G ~ 4G バイト	2G ~ 4G バイト	2G ~ 4G バイト

ソフトウェア製品の依存および競合関係

インストーラは、実際にインストールする前に次の検査を行うことによって、ソフトウェアの依存関係および競合関係を調べます。

- **インストールされているコンポーネント製品**：すでにインストールされている Java Enterprise System または Java Studio Enterprise 製品の有無 (Solaris OS のみ)
- **コンポーネント製品の依存関係**：インストールするように選択されたコンポーネント製品間の依存関係の有無
- **共有コンポーネントに対する依存関係**：インストールされている共有コンポーネントで、インストールする前にアップグレードする必要があるコンポーネントの有無

Solaris OS のみ：インストーラは、Solaris パッケージ配布でインストールされたコンポーネント製品のみ検出します。これ以外の方法で当初インストールされたコンポーネントは検出しません。このため、状況によっては、システムの独立した調査が必要になったり、現在インストールされているソフトウェアを調べるのに、他の人に問い合わせたりする必要が出てくる場合があります。以下はその例です。

- インストーラは、Solaris とともに配布されている Directory Server バージョンを無視します。このバージョンの Directory Server のパッケージ名は、Java Studio Enterprise バージョンのパッケージ名と異なります。

- インストーラは、Solaris とともに配布されている Message Queue バージョンを報告します。このバージョンのパッケージ名は、Java Studio Enterprise のバージョンのパッケージ名と同じです。

インストールされているコンポーネント製品の検出

Java Studio Enterprise ソフトウェアは以下を検出しますが、互換性はありません。

- Solaris OS システムにプリインストールされている、Message Queue バージョンが 3.0.1 Service Pack 2 より前の Message Queue。
- Application Server または Web Server 以外の Web コンテナにインストールされている Access Manager (旧製品名「Identity Server」)。
- ソフトウェア製品の一部インストール。これには、インストールされているが、正しく構成されていない製品も含まれます。

Java Studio Enterprise ソフトウェアは以下の製品と共存できます。

- Solaris に付属している Directory Server 5.1
- Solaris に付属している Application Server 7
- 既存の Java Studio Enterprise 6 (Windows 版のみ)
- zip/tar 形式でインストールされている製品 (パッケージ化されていない製品)

インストールされている既存コンポーネント製品の取り扱い

Java Studio Enterprise IDE

Java Studio Enterprise 7 IDE は、インストールされている次の既存製品と共存できません。

- Sun Java Studio Standard 5 update 1
- Sun Java Studio Enterprise 6 2004Q1

既存の Java Studio IDE がインストールされているマシンに Sun Java Studio Enterprise 7 をインストールすると、インストーラによってその既存の IDE が検出されます。新しいバージョンの IDE のインストールに進むことができますが、次の点に注意してください。

- インストーラはインストールされている既存の Application Server を検出し、その互換性の有無の表示を行うだけです。既存の Application Server をアップグレードしようとはしません。最新バージョンの Application Server をインストールするには、既存の Application Server をアンインストールする必要があります。

す。このためには、適切なアンインストーラを使用してください。Java Studio Enterprise 7 のインストーラを使って既存のサーバーをアンインストールすることはできません。

- Java Studio Enterprise 6 とともにコンポーネント製品サーバーがインストールされている場合、同じサーバーを 2 部インストールすることはできません。
- 新しくインストールした IDE は、インストールされている既存のサーバーで動作します。
- Java Studio Enterprise 6 とともにインストールされていないサーバーがある場合は、Java Studio Enterprise とともにインストールするかどうかを選択することができます。
- アンインストールでは、必ず適切なアンインストーラを使ってください。アンインストーラは、そのバージョンのインストールによってインストールされた製品のみアンインストールします。
- 既存の IDE をアンインストールする場合は、現在インストールされているバージョンの『インストールガイド』を参照して、正しいアンインストール手順に従ってください。既存のユーザーディレクトリを削除する必要はありません。

Java Studio Enterprise サーバー

Java Studio Enterprise ソフトウェアに付属しているコンポーネント製品サーバーは、Sun Java Enterprise System 配備ソフトウェア集の一部としても配布されています。一般に Java Enterprise System 2004Q2 のインストーラがインストールするコンポーネント製品は、このソフトウェアと互換です。ただし、このインストーラが検出するのは、Java Studio Enterprise にも付属しているコンポーネント製品だけです。

注 – (Solaris OS のみ) PointBase 関係のパッケージが 1 つ無いため、Java Enterprise System 2004Q2 の一部としてインストールされている既存の Application Server は、Java Studio Enterprise 7 と互換性がありません。この既知の問題の詳細は、『Sun Java Studio Enterprise 7 2004Q4 リリースノート』を参照してください。問題の ID 番号は 5076666 です。

インストールされる Directory Server、Access Manager および Portal Server のバージョンは、プラットフォーム (Microsoft Windows または Solaris OS) によって異なります。詳細は、第 1 章の表 1-1 を参照してください。

次の製品がインストールされていると、Java Studio Enterprise ソフトウェアはその製品を検出します。これらの製品は、Java Studio Enterprise と互換性があります。

- Sun Java System Application Server 7 Standard Edition, Update 1。ただし、次の方法でインストールされたもの。
 - Java Studio Enterprise 6 (1 つ前のリリース)
 - スタンドアロンのインストーラ

- Sun Java System Directory Server 5.2 または Sun Java System Directory Server 5 2004Q2 (Java Enterprise System のインストーラか、Java Studio Enterprise インストーラによってインストールされたもの)
- Sun Java System Web Server 6 2004Q1 Update 1, Service Pack 2 (Java Enterprise System のインストーラか、Java Studio Enterprise インストーラによってインストールされたもの)
- Sun Java System Access Manager 6.1 (旧製品名「Identity Server」) または Sun Java System Access Manager 2004Q2 (Java Enterprise System のインストーラか、Java Studio Enterprise インストーラによってインストールされたもの)
- Sun Java System Message Queue 3.5 SP 1: ただし、次の方法でインストールされたもの。
 - スタンドアロンのインストーラ (Microsoft Windows マシンの場合、本製品は、インストールディレクトリのパス名に空白のない場所にインストールする必要があります。)
 - Sun Java System Application Server Standard Edition 7 2004Q2 とともにインストールされたもの
- Sun Java System Portal Server 6.2 または Sun Java System Portal Server 2004Q2 (Java Enterprise System のインストーラか、Java Studio Enterprise インストーラによってインストールされたもの)

適切なバージョンのコンポーネント製品サーバーをインストールしていて、構成していない場合は、最初にそのサーバーをアンインストールし、その後、Java Studio Enterprise インストーラで再インストールしてください。

コンポーネント製品の依存関係

コンポーネント製品の相互依存関係を理解しておくことは大切です。依存関係を理解しておくことによって、インストール中に表示される「製品の選択」ページの動作を理解し、正しく導入計画を立てることができます。表 2-7 は、各コンポーネント製品が他のどのコンポーネント製品に依存しているかをまとめています。この表には、J2SE プラットフォームなどの共有コンポーネントに対する依存関係は含まれていません。

1 列目でインストールする製品を探してから、2 列目を見てください。1 列目の製品が正しく動作するには、2 列目に示されている製品もインストールする必要があります。4 列目は、依存製品が 1 列目の製品と同じマシン上に存在する必要があるかどうかを示しています。インストールでは、これらの選択がインストーラによって自動的に行われます。この情報はあくまで導入計画作成用として提供しています。

表 2-7 コンポーネント製品の依存関係

インストールするコンポーネント製品	依存コンポーネント製品	最低互換バージョン	同一マシンに存在することの必要性
Java Studio Enterprise IDE (ツール)	Sun Java System Application Server	7	必要。リモートにインストールされた Application Server でも動作します。
Sun Java System Application Server	Sun Java System Message Queue	3.0.1 SP2	必要
Sun Java System Directory Server	なし		
Sun Java System Access Manager	Sun Java System Directory Server	5.2	必要
	Sun Java System Web Server または Sun Java System Application Server	6.1 7 update 1	必要
Sun Java System Message Queue	なし		
Sun Java System Portal Server	Sun Java System Access Manager	6.1	必要
Sun Java System Web Server	なし		

共有コンポーネントに対する依存関係 (Solaris OS のみ)

インストーラは、マシンにすでにインストールされているソフトウェアが Java Studio Enterprise ソフトウェアと互換性があるかどうかを確認します。

多くのシステムには、Ant や NSS などの共有コンポーネントがすでに存在します。Java Studio Enterprise インストーラはマシンに存在する共有コンポーネントを調べ、Java Studio Enterprise と互換性のないバージョンの共有コンポーネントを検出した場合は、列挙します。そして、インストールが実行されると、それらの共有コンポーネントを新しいバージョンにアップグレードします。

共有コンポーネントをアップグレードしても問題がないかどうか確認してください。古い共有コンポーネントを使用する既存のプログラムが新しいバージョンと互換性があるか確認する必要があります。付録 F の「共有コンポーネント」の一覧を参照してください。

コンポーネント製品サーバーのアップグレードパス (Solaris OS のみ)

インストーラは、サーバーの実行時バージョンのアップグレードをいっさい行いません。Java Enterprise System 6 をアンインストールして Java Studio Enterprise 7 バージョンのサーバーをインストールし直すのではなく、アップグレードでサーバーの実行時バージョンをアップグレードする方法については、『Sun Java Enterprise System 2004Q2 インストールガイド』

(http://docs.sun.com/db/coll/entsys_04q2_ja?l=ja) の第 8 章を参照してください。

J2SE の取り扱い

Java Studio Enterprise インストーラは、導入先のシステムに Java™ 2 Platform, Standard Edition (J2SE platform) の互換バージョンが存在するかどうかを調べ、その結果に基づいて、次の 2 つの選択肢を提示します。

- 互換性のある J2SE プラットフォームが導入先のマシンに存在しない場合は、推奨する J2SE version 1.4.2_05 platform をインストールする場所を指定するよう求めます。
- 互換性のある J2SE バージョンがシステムに複数存在する場合は、検出したすべての互換バージョンの場所とバージョン番号を一覧表示します。この場合は、使用するバージョンを選択してください。

その他の前提条件の確認

- DNS サフィックスが正しく設定されているかどうかを確認します。149 ページの「DNS サフィックスの確認」を参照してください。
- ダウンロードディレクトリおよびインストールディレクトリのパス名には、空白またはその他特殊文字が含まれてはいけません。

第3章

Java Studio Enterprise の インストール (Microsoft Windows)

この章では、インストールメディア (CD-ROM または DVD) から、または Web サイトからファイルをダウンロードして Java Studio Enterprise ソフトウェアをインストールする方法を説明します。

この章は、以下の節で構成されています。

- 17 ページの「GUI インストーラの利用」
 - 20 ページの「インストーラに関する追加情報」
 - 26 ページの「サイレントモードでのインストール」
-

GUI インストーラの利用

- インストールしようとする単体コンポーネント製品の互換性のないバージョンをすでに削除していることを確認します。詳細は、第 2 章を参照してください。
 - 次のいずれかの方法で製品を入手します。
 - 製品の Web サイトからソフトウェアをダウンロードして、圧縮解除 (unzip) する。
 - ソフトウェアを購入した場合は、インストールメディア (DVD か CD-ROM) を適切なドライブに挿入する。
-

注 – 使用するディスクまたはダウンロードファイルにインストールする製品が含まれていることを確認してください。詳細は、5 ページの「インストールする製品の選択」を参照してください。

▼ Java Studio Enterprise ソフトウェアをインストールする

1. 管理者 (administrator) 権限でシステムにログインします。
2. インストーラを起動します。
 - CD-ROM または DVD からインストーラを起動する場合は、ディスクを適切なドライブに挿入します。
インストーラが起動しない場合は、次の追加手順に従います。
 - a. 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択し、参照を使用して媒体の製品ディレクトリに移動します。
 - b. `media-drive\installer.bat` というファイルをダブルクリックします。
インストーラが起動し、「ようこそ」ページが表示されます。

参考 – DVD の場合、ツールコンポーネント用インストーラは、`ToolsComponents_Windows` ディレクトリにあります。オプションサーバー用インストーラは、`OptionalServers_Windows` ディレクトリにあります。

- Web サイトからダウンロードしてインストーラを起動する手順は次のとおりです。
 - a. 適切なダウンロードファイルをダウンロードして、圧縮解除します。
ダウンロードディレクトリおよびインストールディレクトリのパス名に空白またはその他特殊文字を使わないでください。
ダウンロードしたファイルが、使用プラットフォームおよびインストールするコンポーネント製品に合った適切なファイルであることを確認してください。ダウンロードファイルとその内容の詳細は、5 ページの「インストールする製品の選択」を参照してください。
 - ツールコンポーネント - `jstudio_ent_04Q4-ga-win-1.zip` を圧縮解除すると、`ToolsComponents_Windows` に展開されます。
 - オプションサーバー - `jstudio_ent_04Q4-ga-win-2.zip` を圧縮解除すると、`OptionalServers_Windows` に展開されます。
 - b. ダウンロードファイルを圧縮解除したら、インストーラがあるディレクトリに移動し、`installer.bat` ファイルをダブルクリックして、Java Studio Enterprise インストーラを起動します。
インストール前のシステム検査 (SRC: System Readiness Check) によってシステムが調べられ、インストールに進んでも問題がないかどうか確認されます。SRC が完了すると、インストーラが起動するか、「初期システム検査レポート」を開くオプションが表示されます。

3. 指示が必要な場合は、「レポートを表示」ボタンをクリックします。

「初期システム検査レポート」が表示されます。システムがインストールできる状態でない場合は、このレポートの推奨手順に従ってから、「検査を再開」をクリックします。いったん「終了」をクリックして、推奨手順を終えてからインストーラを再起動してもかまいません。システムがインストール前のシステム検査に合格すると、「ようこそ」ページが表示されます。

参考 – アンインストールが不完全であるか、Windows レジストリまたは製品レジストリファイルに古いエントリが含まれていることがシステム検査で判明した場合は、153 ページの「アンインストールに失敗したシステムを修復する (Microsoft Windows)」の、システムからの不要なエントリなどの削除に関する説明を参照してください。単に製品ファイルを削除することによって、コンポーネント製品をアンインストールした場合は、Windows レジストリが壊れていて、古いレジストリエントリを削除しなければならないことがあります。

4. 「ようこそ」ページで「次へ」をクリックして、インストーラの指示に従います。

インストーラは一連の質問をしてから、選択された製品をインストールします。インストールが完了すると、「インストール完了」ページが表示されます。インストーラのページについて不明な点がある場合は、20 ページの「インストーラに関する追加情報」を参照してください。

5. 「インストール完了」ページの内容を確認します。

- a. 「概要の表示」ボタンをクリックすると、インストールの概要情報を見ることができます。

新しいウィンドウに「インストールの概要レポート」が表示されます。最上部に「インストールの概要」と「構成データ」の 2 つのボタンがあります。

- b. (省略可能) 「設定データ」または「インストールの概要」ボタンをクリックすると、それぞれ該当する情報を見ることができます。

- c. インストーラのログメッセージを表示するには、「インストール完了」ページで「ログの表示」をクリックします。

新しいウィンドウに「インストールログ」が表示されます。

ログファイルは、ユーザー環境変数の %TEMP% に設定されている場所にあります。たとえば C:\Documents and Settings\Administrator\Local Settings\Temp です。

ログファイルの名前は次の形式です。

- Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4_install.Atimestamp
- Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4_install.Btimestamp
- Summary_Report.timestamp

6. 「閉じる」をクリックして、インストーラを終了します。

7. (省略可能) 適切な章を参照して、インストールが正しく完了したかどうかを確認します。
- 第 13 章 - サーバーのインストールが正しく行われたかどうかを確認する方法を説明しています。
 - 第 8 章 - Java Studio Enterprise IDE の起動および設定について説明しています。
 - 第 9 章 - Application Server の使用方法を説明しています。
 - 第 10 章 - Web Server の使用方法を説明しています。

インストーラに関する追加情報

ここでは、インストーラウィザードのページに関する追加情報を提供します。表示されるインストーラのページ (パネル) およびそれらの表示順は、いくつかの要素に依存します。

- プラットフォーム - 一部ページは、特定プラットフォーム専用です。
- インストールするコンポーネント製品 - ツールコンポーネントのインストール中に表示されるページは、オプションサーバーのインストール中に表示されるページと多少異なります。
- マシンにすでにインストールされているコンポーネント製品

初期システム検査レポート

System Readiness Check は、Java Studio Enterprise ソフトウェアやそのコンポーネント製品のランタイムのインストールが不完全でないかどうかを検査するために行われます。また、インストールされている製品やレジストリキーエントリ、製品レジストリエントリ、Windows サービスに矛盾点がないかどうかをチェックします。問題が検出された場合、矛盾点とその対処方法をまとめたレポートが表示されます。図 2-1 および図 3-1 は、このレポート例です。



図 3-1 初期システム検査レポート例

製品のシリアル番号

このページでは、製品ライセンスのシリアル番号を入力します。評価目的で Java Studio Enterprise ソフトウェアをインストールした場合は、「90 日間試用ライセンスのシリアル番号を生成する」のチェックボックスをクリックすることによって試用ライセンスを生成します。このチェックボックスは、インストーラの「製品のシリアル番号」ページにあります。

ソフトウェアを購入した場合は、その時に入手したライセンスシリアル番号を入力します。ライセンスマネージャツールを使用し、インストール後に正規ライセンスにアップグレードすることができます。このツールの詳細は、第 12 章を参照してください。

ツールコンポーネントをインストールした後でオプションサーバーをインストールする場合は、すでにマシンにライセンスのシリアル番号が存在しています。この場合、既存の使用ライセンスを使ってインストールを続行する場合は、「次へ」をクリック

します。正規ライセンスにアップグレードする場合は、試用のものではない、新しい製品シリアル番号を入力します。この番号は、物理媒体に記載されているか、Web ページで入手できます (ダウンロードでソフトウェアを購入した場合)。

製品の選択

このページからインストールするコンポーネント製品を選択します。

表示される、インストール可能な製品の一覧は、ツールコンポーネントまたはオプションサーバーのどちらをインストールしようとしているのかによって異なります。これら 2 つの付属コンポーネント製品は、それぞれ異なるダウンロードファイルか CD、あるいは DVD フォルダにあります。詳細は、5 ページの「インストールする製品の選択」を参照してください。

- ツールコンポーネントのインストールの場合、インストール可能な製品は以下のとおりです。
 - Java Studio Enterprise IDE 7
 - Sun Java System Application Server
 - Sun Java System Message Queue
 - コラボレーション実行環境
- オプションサーバーのインストールの場合、インストール可能な製品は以下のとおりです。
 - Sun Java System Web Server
 - Sun Java System Directory Server
 - Sun Java System Access Manager (旧製品名「Identity Server」)
 - Sun Java System Portal Server

コンポーネント製品には、他の製品に依存するものがあります。依存製品は、インストーラによって自動的に選択されます。製品の依存関係の詳細は、13 ページの「コンポーネント製品の依存関係」を参照してください。そうした依存関係があるため、サポートされない組み合わせがあります。たとえば Directory Server および Web コンテナをインストールすることなく、Access Manager や Portal Server をインストールすることはできません。Access Manager および Portal Server 用の Web コンテナには、Application Server か Web Server のどちらでも使用できます。

マシンにすでにインストールされているコンポーネント製品の選択はできません。

コンテナの選択

Access Manager または Portal Server をインストールする場合は、デフォルトの Web コンテナ (Application Server) の代わりにコンテナとして、Web Server を選択できます。このためには、次の手順に従います。

▼ Access Manager および Portal Server 用の Web コンテナを選択する

1. オプションサーバー CD またはダウンロードファイルを使用してインストーラを起動します。
2. 「製品の選択」ページでインストールするサーバーを選択します。Web Server は必ず選択してください。

Web コンテナはまだ選択していません。この選択は、次のパネルで行います。

3. 「次へ」をクリックします。

「コンテナの選択」ページが表示されます。このページで、代替 Web コンテナの使用を指定します。

- ツールコンポーネントまたはダウンロードファイルを使用して、Application Server をすでにインストールしている場合、この時点で、デフォルトの Web コンテナとして Application Server が選択されています。
 - Java Studio Enterprise のツールコンポーネントの部分がそれまでにインストールされていない場合は、コンテナとして Web Server が選択されています。
4. Web Server の選択を指定するラジオボタンをクリックして、「次へ」をクリックし、インストールを続行します。

必要な Web Server インスタンスが作成され、Access Manager および Portal Server がこのインスタンス内で実行されるように設定されます (両方選択されている場合)。

リモートサーバーの場所

このページは、Application Server が別のマシンにインストールされていて、そのリモートサーバーにアプリケーションを配備する場合に、インストーラにその情報を提供するために使用します。ローカルマシンに Application Server をインストールして、そのサーバーを使用する場合は、デフォルトをそのまま使用して「次へ」をクリックします。

参考 – IDE からリモートの Application Server に接続することもできます。

インストールディレクトリ

このページでは、インストールディレクトリを入力します。デフォルトのインストールルートディレクトリは、`%SystemDrive%\Sun\jstudio_04Q4` です。デフォルト以外のインストールディレクトリを使用する場合は、次の注意事項に従ってください。

- パス名には、空白あるいはその他特殊文字が含まれるディレクトリは使用できません。
- `java-studio-install-dir` ルートディレクトリ名が 20 文字を超えてはいけません。Java Studio Enterprise でインストールされるコンポーネント製品の中には、その実行可能ファイルへのパス名の長さ制限があるものがあります。

コンポーネント製品はそれぞれ、ルートディレクトリの下専用のディレクトリにインストールされます。ディレクトリ構造の詳細は、付録 B を参照してください。

構成

このページで入力した値は、インストールする各種サーバーの構成に使用されます。表示される必須フィールド一覧は、インストールした製品によって異なります。

ホスト名は、ソフトウェアをインストールするマシンの名前です。

DNS のドメイン名は、各種サーバーの構成に使用されます。サーバーのインストールおよび構成が正しく行われるには、この値が適切である必要があります。使用しているマシンでこの値に誤りがないか確認する方法については、149 ページの「DNS サフィックスの確認」を参照してください。このパラメータの適切な値が不明な場合は、システム管理者にお尋ねください。

管理者のユーザー ID および管理者のパスワードは、インストールする Java Studio Enterprise サーバー製品の構成に使用されます。インストール後は、この ID およびパスワードを使用して、サーバー管理インタフェースにアクセスします。必ずパスワードをメモして、安全な場所に保管してください。インストール後にパスワードにアクセスすることはできません。

注 – Access Manager および Portal Server は、このページで入力された管理者のユーザー ID を使用しません。これら 2 つのコンポーネント製品の管理コンソールにアクセスするには、`amadmin` というユーザー名を使用します。

構成情報の確認

インストール後、構成情報は以下の方法で確認することができます。

- `%TEMP%` に設定されているディレクトリにある概要レポートを表示する。
たとえば `C:\Documents and Settings\Administrator\Local Settings\Temp` です。このファイル名の形式は次のとおりです。
`Summary_Report.timestamp`
- Web ブラウザで構成情報を表示する。`Configuration_Data.html` というファイルが、`java-studio-install-dir` にあります。

静的 IP アドレスを持たないマシンへのインストール

この節では、静的 IP アドレスを持たないシステムへの Java Studio Enterprise サーバーのインストールについて説明します。次のような、ネットワーク上にないマシンあるいは静的 IP アドレスを持たないマシンにインストールする場合は、25 ページの「ローカルホストの IP アドレスを使用してインストールする」の手順に従ってください。

- ラップトップ
- 動的に割り当てられた IP アドレスを使用するマシン (DHCP 環境)

基本的に、インストールを完了したら、ネットワークからマシンを切り離し、再起動してください。これによって、Java Studio Enterprise インストーラが自動的に IP アドレスとして 127.0.0.1 を、ホスト名として localhost を選択します。

マシンがネットワークに接続されていて、DHCP を使用して動的 IP アドレスがすでに割り当てられている場合、インストーラはその動的アドレスを使用して構成します。ただし、この場合、マシンを再起動すると、期待通りに機能しなくなることがあります。

注 – 遠隔システムから、この節で説明している 127.0.0.1 とローカルホストを使用しているマシンにインストールされている Application Server に接続することはできません。

▼ ローカルホストの IP アドレスを使用してインストールする

1. ネットワークからマシンを切り離します。
2. マシンを再起動します。
これで、マシンがローカルホストの IP アドレス 127.0.0.1 を使用することになります。
3. プライマリ DNS サフィックスが正しく設定されていることを確認します。
149 ページの「DNS サフィックスの確認」を参照してください。

注 – ラップトップの場合、DNS サフィックスの値は重要ではありません。ドメイン名には、laptop.com などを使用できます。

4. ファイアウォールソフトウェアを実行している場合は停止します。
5. 標準のインストール手順に従って Java Studio Enterprise をインストールします。
Microsoft Windows システムの場合は、17 ページの「GUI インストーラの利用」を参照してください。
6. インストールが完了したら、次の適切な章に進んで、インストールが正しく行われたかどうかを確認します。
 - 第 13 章 - サーバーのインストールが正しく行われたかどうかを確認する方法を説明しています。
 - 第 8 章 - 初めて Java Studio Enterprise IDE を起動する方法を説明しています。
 - 第 9 章 - Application Server の使用方法を説明しています。
 - 第 10 章 - Web Server の使用方法を説明しています。

注 - 通常、プロキシサーバーを使用してインターネットに接続する環境で、マシン名 (ホスト名) として localhost を使用して Java Studio Enterprise をインストールした場合は、インストールしたサーバーの管理コンソールにアクセスするときに直接接続するように、または DNS プロキシサーバーを使わないように、Web ブラウザでプロキシ構成を変更する必要があります。

サイレントモードでのインストール

サイレントインストールは、類似のインストール構成で複数のホストに Java Studio Enterprise をインストールする場合に便利です。サイレントインストールするには、インストーラを 1 回実行し、「状態ファイル」に入力値を取り込む必要があります。適切なコマンド行オプションを使用すると、インストーラのこのドライ実行が行われ、製品はインストールされません。状態ファイルには、それぞれが 1 つのプロンプトまたはフィールドを表すパラメータ一覧の形式で応答内容が含まれます。その後、入力としてこの状態ファイルを編集したものを使用して、多数のホストでインストーラを実行することができます。マシンまたはプラットフォーム別に状態ファイルのパラメータを編集する必要があります。そうすることによって、企業内の複数のホストにまたがって 1 つインストール構成を利用することができます。

サイレントインストールの準備と実行の詳細は、第 7 章を参照してください。

第4章

Java Studio Enterprise のアンインストール (Microsoft Windows)

Java Studio Enterprise ソフトウェアには、それ自身を削除するためのアンインストーラが用意されています。Java Studio Enterprise ソフトウェアをアンインストールするには、管理権限が必要です。

この章で取り上げる内容は以下のとおりです。

- 27 ページの「GUI アンインストーラの利用」
 - 29 ページの「サイレントモードでのソフトウェアのアンインストール」
-

GUI アンインストーラの利用

Sun Java Studio Enterprise 7 のアンインストーラを使用して、Java Studio Enterprise の特定のコンポーネント製品だけをアンインストールしたり、ソフトウェア全体をアンインストールしたりできます。アンインストーラは、「スタート」メニューから起動することも、Microsoft Windows の「アプリケーションの追加と削除」ユーティリティを使用して起動することもできます。

注意 – Java Studio Enterprise ソフトウェアは、どのような場合でも、単にファイルを削除することによるアンインストールは行わないでください。適切なアンインストーラを使わないと、インストール内容が壊れる危険性が高くなります。

「スタート」メニューから起動する手順は次のとおりです。

▼ Java Studio Enterprise ソフトウェアをアンインストールする

1. アンインストーラを起動する前に、IDE を終了します。

2. 「スタート」 > 「プログラム」 > 「Sun Microsystems」 > 「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」 > 「Java Studio Enterprise のアンインストール」を選択します。

アンインストーラが起動し、開始ページが表示されます。

3. 「次へ」をクリックします。
「製品の選択」ページが表示されます。
4. アンインストールする製品を選択します。

注 – 警告メッセージが画面に表示されることがありますから、注意してください。アンインストーラが、システム上に存在する他の Java Studio Enterprise コンポーネント製品が使用する可能性があるコンポーネント製品のアンインストールを禁止することはありません。

5. 「次へ」をクリックしてアンインストールを開始します。
アンインストールが完了するまでに数分時間がかかることがあります。
6. アンインストールが完了したら、「閉じる」をクリックします。

7. *java-studio-install-dir* の内容を確認します。

Java Studio Enterprise ソフトウェア全体のアンインストールが成功しても、次のファイルおよびフォルダは残っています。

- *java-studio-install-dir*
 - bin - ログファイルが含まれていることがあります。
 - MessageQueue3.5 (空のディレクトリ)

この *java-studio-install-dir* ディレクトリにファイルが含まれている場合は、アドオン製品をインストールしていたか、アンインストールが不完全であった可能性があります。詳細は、第 15 章を参照してください。アンインストールするコンポーネント製品を個別に選択した場合は、その製品に関するファイルだけアンインストールされます。選択した以外の製品のディレクトリおよびファイルは、そのままマシンに残ります。

8. アンインストールのログファイルにエラーメッセージが含まれていないか確認します。

ログファイルは、ユーザー環境変数の %TEMP% に設定されているディレクトリにあります (たとえば C:\Documents and Settings\Administrator\Local Settings\Temp)。ログファイルの名前は次の形式です。

- Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4_uninstall.Atimestamp
- Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4_uninstall.Btimestamp

9. *java-studio-install-dir* とその内容の削除は、アンインストールが正常に終了したことを確認してから、行ってください。

サイレントモードでのソフトウェアのアンインストール

サイレントアンインストールは、類似の構成を持つ複数のホストから **Java Enterprise System** コンポーネントを自動的にアンインストールするのに便利です。サイレントアンインストールするには、アンインストーラを 1 回実行し、「状態ファイル」に入力値を取り込む必要があります。適切なコマンド行オプションを使用すると、アンインストーラのこのドライ実行が行われ、製品はアンインストールされません。状態ファイルには、それぞれが 1 つのプロンプトまたはフィールドを表すパラメーター一覧の形式で応答内容が含まれます。その後、入力としてこの状態ファイルを編集したものを使用して、多数のホストでアンインストーラを実行することができます。マシンまたはプラットフォーム別に状態ファイルのパラメータを編集する必要があります。

サイレントアンインストール中、アンインストーラは状態ファイルを使用して、**Java Studio Enterprise** コンポーネントをアンインストールし、構成解除します。

サイレントモードでのアンインストール手順は、サイレントモードでのインストール手順と似ています。サイレントモードでのアンインストールについては、第 7 章を参照してください。

第5章

Java Studio Enterprise のインストール (Solaris OS)

この章では、インストールメディア (CD または DVD) から、または Web サイトからファイルをダウンロードして Java Studio Enterprise ソフトウェアを Solaris OS 環境にインストールする方法を説明します。インストールする前に、Solaris OS パッチのインストールが必要になることがあります。

この章で取り上げる内容は以下のとおりです。

- 31 ページの「Solaris OS パッチ要件の確認」
- 32 ページの「GUI インストーラの利用」
- 35 ページの「インストーラに関する追加情報」
- 40 ページの「サイレントモードでのインストール」
- 40 ページの「インストール中の障害の追跡」

Solaris OS パッチ要件の確認

Solaris OS のパッチをインストールする必要があるかどうかを調べる最も簡単な方法は、Java Studio Enterprise インストーラを起動して、「システム要件の確認」のところまで実行してみることです。この検査の最後に、インストーラは、必要な Solaris パッチに関する情報を表示します。システムに必要なパッチがインストールされている場合、インストーラは必要なパッチに関する情報を表示しません。Solaris 環境への Solaris パッチのインストールについて不明な点がある場合は、システム管理者にお尋ねください。Solaris OS 用のパッチをインストールするにはスーパーユーザー権限が必要です。

付録 A に、必要なパッチの一覧が記載されています。

GUI インストーラの利用

- インストールしようとする単体コンポーネント製品の互換性のないバージョンをすでに削除していることを確認します。詳細は、第 2 章を参照してください。
- 次のいずれかの方法で製品を入手します。
 - 製品の Web サイトからソフトウェアをダウンロードして、圧縮解除 (unzip) する。
 - インストールメディア (DVD か CD-ROM) を適切なドライブに挿入する。

注 – 使用するディスクまたはダウンロードファイルにインストールする製品が含まれていることを確認してください。詳細は、5 ページの「インストールする製品の選択」を参照してください。

▼ Java Studio Enterprise ソフトウェアをインストールする

注 – ここでは例として、`ssh` 用のコマンドを使用します。使用している UNIX シェルに必要なコマンドに置き換えてください。

1. マシンにインストールする準備が正しく完了していることを確認します。詳細は、第 2 章を参照してください。
2. インストールを開始します。
 - 物理媒体からインストールを開始する手順は次のとおりです。
 - a. `root` のパスワードを使用し、スーパーユーザーとしてシステムにログインします。
 - b. 製品の媒体を挿入します。

ローカルのマシン設定によって異なりますが、媒体を挿入すると、「ファイルマネージャ」ウィンドウが表示されることがあります。その場合、インストーラを起動するには、「ファイルマネージャ」ウィンドウで「`installer`」アイコンをダブルクリックします。

「ファイルマネージャ」ウィンドウが表示されない場合は、次の手順に従います。

 - i. 端末ウィンドウを開きます。

- ii. 適切な CD-ROM または DVD ディレクトリに移動して、インストールを開始します。

```
# cd /cdrom/volume-label
# ./installer
```

参考 – DVD の場合、インストーラは、インストールしようとする製品に対応する最上位ディレクトリにあります。たとえば Solaris SPARC に IDE および Application Server をインストールする場合は、`/cdrom/jse_04q4_dvd/ToolsComponents_Solaris_sparc` ディレクトリに移動します。詳細は、5 ページの「インストールする製品の選択」を参照してください。

「ようこそ」ページが表示されます。手順 3 に進んでください。

- Web サイトからダウンロードしてインストールを開始する手順は次のとおりです。
 - a. Java Studio Enterprise をダウンロードして、`java-studio-download-dir` に圧縮解除します。

参考 – ダウンロードディレクトリのパス名に空白またはその他特殊文字を使わないでください。

ダウンロードしたファイルが、使用プラットフォームおよびインストールするコンポーネント製品に合った適切なファイルであることを確認してください。ダウンロードファイルとその内容の詳細は、表 2-4 を参照してください。

x86 版 Solaris

- ツールコンポーネント - `jstudio_ent_04Q4-ga-solaris-x86-1.zip` を圧縮解除すると、`ToolsComponents_Solaris_x86` ディレクトリに展開されます。
- オプションサーバー - `jstudio_ent_04Q4-ga-solaris-x86-2.zip` を圧縮解除すると、`OptionalServers_Solaris_x86` ディレクトリに展開されます。

SPARC 版 Solaris

- ツールコンポーネント - `jstudio_ent_04Q4-ga-solaris-sparc-1.zip` を圧縮解除すると、`ToolsComponents_Solaris_sparc` ディレクトリに展開されます。
- オプションサーバー - `jstudio_ent_04Q4-ga-solaris-sparc-2.zip` を圧縮解除すると、`OptionalServers_Solaris_sparc` ディレクトリに展開されます。

- b. X サーバーへのアクセスを許可します。

```
% xhost + machine-name
```

- c. スーパーユーザー (root) になります。以下はその例です。

```
% su - root
```

- d. 使用マシンに表示が行われるように DISPLAY 環境変数を設定します。以下はその例です。

```
% setenv DISPLAY machine-name:0.0
```

- e. インストーラが含まれているサブディレクトリに移動します。
f. インストーラを起動します。

```
#!/installer
```

「ようこそ」ページが表示されます。手順 3 に進んでください。

3. 「ようこそ」ページで「次へ」をクリックして、インストーラウィザードのページの表示される指示に従います。

インストーラは一連の質問をしてから、選択された製品をインストールします。インストールが完了すると、「インストール完了」ページが表示されます。インストーラのページについて不明な点がある場合は、35 ページの「インストーラに関する追加情報」を参照してください。

注 - 「非 root ユーザーによる製品の使用を許可 (管理ドメインを作成)」というページで、標準ユーザーアカウント用の Application Server および Web Server の root 以外のサーバーインスタンスを作成してください。詳細は、37 ページの「root 以外のユーザーによる製品の使用」を参照してください。

4. 「インストール完了」ページの内容を確認します。
- a. 「概要の表示」ボタンをクリックすると、インストールの概要情報を見ることができます。
新しいウィンドウに「インストールの概要レポート」が表示されます。最上部に「インストールの概要」と「設定データ」の 2 つのボタンがあります。
- b. (省略可能) 「設定データ」ボタンをクリックすると、インストールされたコンポーネント製品の構成情報を見ることができます。

- c. インストーラのログメッセージを表示するには、「インストール完了」ページで「ログの表示」をクリックします。

インストーラを終了すると、`/var/sadm/install/logs`にあるログファイルを見ることができます。

ログファイルの名前は次の形式です。

- `Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4_install.Atimestamp`
- `Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4_install.Btimestamp`
- `Summary_Report.timestamp`
- `Shared_Component_Upgrade.timestamp`

5. 「閉じる」をクリックして、インストーラを終了します。
6. スーパーユーザー権限を終了します。
7. クライアントアクセスを許可していた場合は、クライアントアクセスを禁止します。

```
# xhost - machine-name
```

8. (省略可能) 適切な章を参照して、インストールが正しく完了したかどうかを確認します。
 - 第 14 章 - サーバーのインストールが正しく行われたかどうかを確認する方法を説明しています。
 - 第 8 章 - Java Studio Enterprise IDE の起動方法を説明しています。
 - 第 9 章 - Application Server の使用方法を説明しています。
 - 第 10 章 - Web Server の使用方法を説明しています。

インストーラに関する追加情報

ここでは、インストール中に表示されるインストーラウィザードのページに関する追加情報を提供します。

「共通コンポーネントのアップグレード」

アップグレードする必要がある共有コンポーネントがあると、このインストーラページが表示されます。このページは、インストールに進む前にアップグレードする必要がある共有コンポーネントの一覧です。

- 「次へ」をクリックして、示されたコンポーネントをアップグレードするか、インストーラを終了します。

インストールディレクトリ

このページでは、インストールディレクトリを入力します。デフォルトのインストールディレクトリは `/opt/SUNWjstudio04q4` です。デフォルト以外のインストールディレクトリを使用する場合は、次の注意事項に従ってください。

- デフォルト以外のインストールディレクトリを使用する場合は、ファイル書き込み権があることを確認してください。
- `java-studio-install-dir` ルートディレクトリ名が 20 文字を超えてはいけません。Java Studio Enterprise でインストールされるコンポーネント製品の中には、その実行可能ファイルへのパス名の長さ制限があるものがあります。
- インストールディレクトリとしては、ローカルマシンのディレクトリを指定してください。
- NFS マウントされているファイルシステムに存在するディレクトリは使用しないでください。Java Studio Enterprise インストーラは、ネットワークマウントされているファイルシステムへのインストールをサポートしていません。
- 選択したインストールを行うのに必要なディスク容量があることを確認してください。

システム要件の確認

このページには、システムへのインストールが可能な状態であるかどうかに関する情報が表示されます。マシンが要件を満たしていない場合、インストールはその問題点を説明する情報を表示します。

- 「レポートの参照」をクリックすると、その詳細を見ることができます。

このレポートは、`/var/sadm/install/logs/SystemCheck_Report.timestamp` に保存されます。

リモートサーバーの場所

このページでは、リモートマシンにインストールされている既存の Application Server に関する情報の入力が必要です。リモートマシンにある Application Server を使用する場合は、「リモートマシン上の Application Server へ接続する」オプションを選択して、必要な構成情報を入力します。それ以外の場合は、デフォルト値の「リモートマシン上の Application Server へ接続しない」を使用します。

構成

このページで入力した値は、各種サーバーの構成に使用されます。表示される必須フィールド一覧は、インストールした製品によって異なります。

ホスト名は、ソフトウェアをインストールするマシンの名前です。

DNS のドメイン名は、各種サーバーの構成に使用されます。サーバーのインストールおよび構成が正しく行われるには、この値が適切である必要があります。使用しているマシンでこの値に誤りがないか確認する方法については、149 ページの「DNS サフィックスの確認」を参照してください。このパラメータの適切な値が不明な場合は、システム管理者にお尋ねください。

管理者のユーザー ID および管理者のパスワードは、インストールする各種 Java Studio Enterprise サーバー製品の構成に使用されます。インストール後は、この ID およびパスワードを使用して、サーバー管理インタフェースにアクセスします。使用したパスワードは書き留めて保管しておいてください。インストール後にパスワードを読み出すことはできません。

注 – Access Manager および Portal Server は、このページで入力された管理者のユーザー ID を使用しません。これら 2 つのコンポーネント製品の管理コンソールにアクセスするには、`amadmin` というユーザー名を使用します。

構成情報の確認

インストール後、構成情報は以下の方法で確認することができます。

- `/var/sadm/install/logs` ディレクトリにある「概要レポート」を参照する。このファイル名の形式は次のとおりです。`Summary_Report.timestamp`
- Web ブラウザで構成情報を表示する。`Configuration_Data.html` というファイルが、`java-studio-install-dir` にあります。

root 以外のユーザーによる製品の使用

このインストーラページを使用して、root 以外のユーザーアカウントが IDE から Application Server および Web Server を使用できるようにすることができます。root 以外の Application Server および Web Server の用途としては、root 以外のユーザーアカウント用に作成されたドメインおよびインスタンスの制御があります。このことが、ソフトウェアパッケージのインストール方法に影響することはありません。たとえば、Application Server の `asadmin` ユーティリティを使用したり、Web Server の管理サーバーを起動したりするには、root 権限が必要です。

デフォルトでは、インストーラは管理ドメインと **Application Server** インスタンスを1つずつ作成、構成し、**Java Studio Enterprise IDE** 用に完全に組み込みます。また、**Web Server** インスタンスも、**IDE** 用に構成され、組み込まれます。これらのデフォルトのインスタンスは、ソフトウェアをインストールした **root** ユーザーの所有になります。

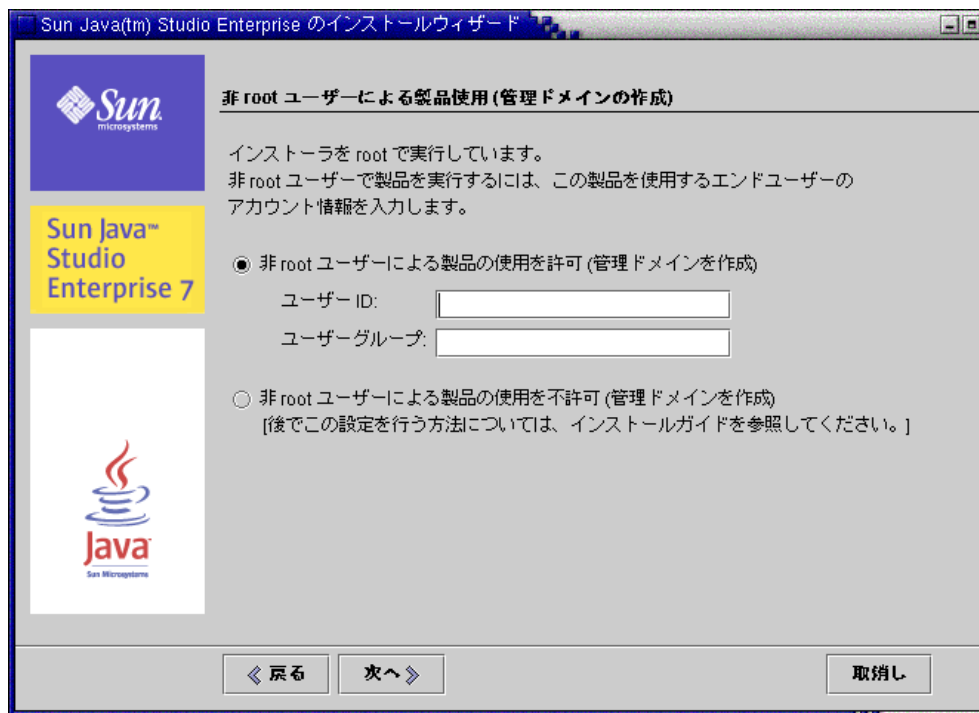
Access Manager または **Portal Server** をインストールした場合、これらの製品は、インストーラの「コンテナの選択」ページを使用して、代替 **Web** コンテナとして **Web Server** が選択されていないかぎり、**Application Server** のデフォルトの **root** 所有インスタンス内で実行されるように設定されます。

標準ユーザーの所有する **Application Server** および **Web Server** のインスタンスをインストーラが作成できるようにするには、このページで **IDE** ユーザーの標準アカウントに関する情報を入力します。

管理ドメインの **Application Server** の概念について不明な点がある場合は、第9章を参照してください。インストール中に **root** 以外のサーバーインスタンスを作成しなくても、インストール後に手動で作成することもできます。詳細は、第9章および第10章を参照してください。

▼ root 以外のユーザーが **Application Server** および **Web Server** を使用できるようにする

1. プロンプトが表示されたら、適切なチェックボックスが選択されていることを確認します。



2. ソフトウェアを使用する標準ユーザーのユーザー ID およびユーザーグループを入力します。
これは、既存のアカウントである必要があります。
3. 「次へ」をクリックして、通常のインストールを続行します。

root 以外のユーザーによる製品の使用を許可した場合の結果

このオプションを選択して、標準ユーザーアカウントの情報を入力すると、インストーラによって以下のことが行われます。

1. root 以外のユーザーに属するデフォルトの Application Server インスタンスと管理ドメインを作成する。
インストール中に作成されたこの Application Server と管理ドメインは、指定された root 以外のユーザーアカウントに属し、そのユーザーが起動、停止、使用することができます。そのユーザーが IDE を起動、使用すると、サーバーレジストリにこのデフォルトのサーバーインスタンスが示され、IDE でのあらゆるアクションは、この root 以外のユーザーインスタンスに対する操作になります。詳細は、第 9 章を参照してください。
2. root 以外のユーザーに属する Web Server インスタンスを作成する。

作成された root 以外のユーザーインスタンスは完全に IDE と統合されます。Web Server のこの root 以外のインスタンスは、IDE のサーバーレジストリに現れ、開発目的に利用することができます。詳細は、第 10 章を参照してください。root 以外のインスタンス名は `https-jstudio` です。

Access Manager または Portal Server 用の Web コンテナとして Web Server が選択されると、root に属する Web Server インスタンスは、Access Manager と Portal Server 用の Web コンテナとして構成され、root 権限を持つユーザーのみ起動、停止、使用できます。root インスタンス名の形式は、次のとおりです。

- `https-machinename.domainname`

サイレントモードでのインストール

サイレントインストールは、類似のインストール構成で複数のホストに Java Studio Enterprise をインストールする場合に便利です。サイレントインストールするには、インストーラを 1 回実行し、「状態ファイル」に入力値を取り込む必要があります。状態ファイルには、それぞれが 1 つのプロンプトまたはフィールドを表すパラメータ一覧の形式で応答内容が含まれます。この状態ファイルを編集してホスト別の値を設定し、入力として使用することによって、多数のホストでインストーラを実行することができます。そうすることによって、企業内の複数のホストにまたがって 1 つインストール構成を利用することができます。詳細は、第 7 章を参照してください。

インストール中の障害の追跡

1. デフォルト以外のインストールディレクトリを指定したのに、デフォルトのディレクトリの `/opt/SUNWjstudio04q4` ディレクトリにソフトウェアがインストールされた。

考えられる原因：インストールディレクトリとして、ネットワークマウントされたファイルシステム上のディレクトリを指定した可能性があります。今回のバージョンのソフトウェアは、ローカルマシン以外のディレクトリへのインストールをサポートしていません。

対策：アンインストールしてから、ローカルマシンのディレクトリを使用して再インストールしてください。

2. CD-ROM からソフトウェアをインストールしようとして、32 ページの「GUI インストーラの利用」の 手順 2 の指示をすべて試してみたが、インストーラが起動しない。

考えられる原因：ボリューム管理システムが、ボリュームラベルに #1 などの文字を付加している可能性があります。ボリュームラベルの最後にこのような文字がある場合は、この後の解決策を試してください。たとえば、SPARC 版 Solaris OS の場合、ツールコンポーネント CD-ROM のボリュームラベルは jse_04q4_sparc-1 ですが、jse_04q4_sparc-1#1 というようなラベルになっている場合です。

対策：下記の手順に従って、システムのボリューム管理プロセス (vold) をいったん停止して再起動し、インストーラを再実行します。

- a. CD-ROM およびフロッピーディスクが使用されていないことを確認します。

媒体の全ユーザーを確認できたかどうか確信できない場合は、fuser コマンドを実行してください。

- b. スーパーユーザーになっていることを確認します。

- c. ボリューム管理を停止します。

```
# /etc/init.d/volmgt stop
```

- d. ボリューム管理を再起動します。

```
# /etc/init.d/volmgt start
```


第6章

Java Studio Enterprise の アンインストール (Solaris OS)

Java Studio Enterprise ソフトウェアには、それ自身を削除するためのアンインストーラが用意されています。アンインストールは、インストールで必要とされたユーザー権限と同じ権限を使用して行う必要があります。

この章で取り上げる内容は以下のとおりです。

- 43 ページの「GUI アンインストーラの利用」
 - 45 ページの「サイレントモードでのソフトウェアのアンインストール」
-

GUI アンインストーラの利用

Solaris システムから Sun Java Studio Enterprise 7 ソフトウェアをアンインストールするには、Java Studio Enterprise アンインストーラを使用します。

注意 – このソフトウェアは、どのような場合でも `rm -r` あるいは `pkgrm` コマンドを使用して、アンインストールしないでください。アンインストーラを使わないと、インストール内容が壊れる危険性が高くなります。

▼ Java Studio Enterprise ソフトウェアをアンインストールする

1. アンインストーラを起動する前に、IDE を終了します。

2. 次のように入力することによって X サーバーへのクライアントアクセスを許可します。

```
% xhost + machine-name
```

3. スーパーユーザー (root) になります。
4. ローカルマシンに表示されるように表示環境変数を設定します。

```
% setenv DISPLAY machine-name:0.0
```

5. *java-studio-install-dir* に移動します。以下はその例です。

```
#cd /opt/SUNWjstudio04q4
```

6. アンインストーラウィザードを起動します。

```
# ./uninstall
```

アンインストーラが起動し、開始画面が表示されます。

7. 「次へ」をクリックします。

「製品の選択」ページが表示されます。

8. アンインストールする製品を選択します。

警告メッセージが画面に表示されることがありますから、注意してください。アンインストーラが、システム上に存在する他の Java Studio Enterprise コンポーネント製品が使用する可能性があるコンポーネント製品のアンインストールを禁止することはありません。

9. 「次へ」をクリックしてアンインストールを開始します。

アンインストールが完了するまでに数分時間がかかることがあります。

10. アンインストールが完了したら、「閉じる」をクリックします。

11. *java-studio-install-dir* の内容を確認します。

Java Studio Enterprise ソフトウェア全体のアンインストールが成功すると、空の *java-studio-install-dir* が残ります。

このディレクトリにファイルが含まれている場合は、アドオン製品をインストールしていたか、アンインストールが不完全であった可能性があります。個別のコンポーネント製品をアンインストールした場合、その製品以外のインストールディレクトリはそのまま残ります。

注 – アンインストーラによって、*java-studio-install-dir* が削除されることはありません。

12. アンインストールのログファイルにエラーメッセージが含まれていないか確認します。

ログファイルは、*/var/sadm/install/logs* ディレクトリにあります。ログファイルの名前は次の形式です。

- *Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4_uninstall.Atimestamp*
- *Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4_uninstall.Btimestamp*

アンインストールが不完全であると思われる場合は、第 15 章の「アンインストールに失敗した場合の説明」を参照してください。

13. (省略可能) アンインストールが成功した場合は、残ったディレクトリを削除します。

```
# rm -r java-studio-install-dir
```

注 – 残ったディレクトリは、Java Studio Enterprise ソフトウェア全体を削除し、どのファイルも不要であることが確実である場合にのみ削除してください。

このコマンドは、ログファイルおよびインストールディレクトリのみを削除する場合に使用します。このコマンドを使用して製品関係のファイルを削除しないでください。アンインストーラが正常終了していることを確認してから、ログファイルおよび製品関係ファイルが存在するディレクトリを削除してください。

14. クライアントアクセスを禁止し、スーパーユーザー権限を終了します。

```
# xhost - machine-name  
# exit
```

サイレントモードでのソフトウェアのアンインストール

サイレントアンインストールは、類似の構成を持つ複数のホストから Java Enterprise System コンポーネントを自動的にアンインストールするのに便利です。詳細は、第 7 章を参照してください。

第7章

サイレントモードでのインストールとアンインストール

この章では、Java Studio Enterprise ソフトウェアをサイレントモードでインストールおよびアンインストールする方法を説明します。

この章は、以下の節で構成されています。

- 47 ページの「サイレントモードでのインストール」
 - 56 ページの「サイレントモードでのソフトウェアのアンインストール」
-

サイレントモードでのインストール

サイレントインストールは、類似のインストール構成で複数のホストに Java Studio Enterprise をインストールする場合に便利です。サイレントインストールするには、インストーラを 1 回実行し、「状態ファイル」に入力値を取り込む必要があります。状態ファイルには、それぞれが 1 つのプロンプトまたはフィールドを表すパラメータ一覧の形式で応答内容が含まれます。この状態ファイルを編集してホスト別の値を設定し、入力として使用することによって、多数のホストでインストーラを実行することができます。そうすることによって、企業内の複数のホストにまたがって 1 つインストール構成を利用することができます。

この章は、以下の節で構成されています。

- 48 ページの「サイレントモードでのインストールの準備」
- 48 ページの「サイレントモードの使用に関する注意事項」
- 49 ページの「状態ファイルの作成」
- 51 ページの「状態ファイルの編集」
- 54 ページの「サイレントモードでのインストーラの実行」

サイレントモードでのインストールの概要

サイレントモードでインストールし、同じプラットフォームの複数のシステムに Java Studio Enterprise を類似のインストールを行うには、以下のように複数の手順を行う必要があります。

1. 非インストールモードでインストーラを実行することによって、状態ファイルを作成します。56 ページの「状態ファイルを生成する」の手順に従ってください。
2. 51 ページの「状態ファイルの編集」の節の注意事項に従って状態ファイルを編集します。
3. サイレントインストールモードを使用するプラットフォームに対する正確な状態ファイル ID を生成します。52 ページの「プラットフォームに適切な ID の作成」を参照してください。この手順を行う必要がある場合は、53 ページの「インストーラを使用して状態ファイル ID を生成する」の手順を使用します。
4. サイレントモードでインストーラを実行します。54 ページの「サイレントモードでインストーラを実行する」の手順に従ってください。
5. ツールコンポーネントを含むディスク 1 (またはダウンロードファイル 1) のインストールを終えたら、オプションサーバーを含むディスク 2 (またはダウンロードファイル 2) についても、上記 4 つの手順を繰り返します。

サイレントモードでのインストールの準備

状態ファイルを作成する前に、対話形式でインストールするのと同じ手順でインストールの準備を行います。Solaris OS マシンで、まだインストールの準備をしていない場合は、3 ページの「インストールの準備」および 31 ページの「Solaris OS パッチ要件の確認」を参照してください。

サイレントモードを使用するにあたっては、次の注意事項を確認してください。

サイレントモードの使用に関する注意事項

Java Studio Enterprise サーバーコンポーネントを使用したことがある場合は、手動で状態ファイルを作成する作業に慣れていることでしょう。しかし、この方法は間違いを犯しやすい可能性があります。

サイレントインストールに成功させるために、次の注意事項を守ってください。

- 49 ページの「状態ファイルの作成」で説明しているように、状態ファイルは、インストーラに生成させます。

元になる状態ファイルを手動で作成しないでください。インストーラが生成した状態ファイルには、インストーラのリアルタイム依存関係検査やエラーレポートが活かされています。

- サイレントモードを使用して、**Java Studio Enterprise** のツールコンポーネントおよびオプションサーバーの両方をインストールする場合は、インストールするディスクまたはファイルごとに状態ファイルを 1 つ生成する必要があります。
- 編集する前に状態ファイルの複製を作成してください。
- パラメータの値を編集する以外のパラメータの変更を行わないでください。
 - 値がなくてもパラメータを削除しないでください。
 - パラメータを追加しないでください。
 - 含まれているパラメータの順序を変更しないでください。
- 値を編集するときに元の型と形式をメモし、新しい値を入力する際はそれらの型と形式を維持してください。以下はその例です。
 - 古い値がホスト名の場合は、ホスト名を入力します。完全修飾ドメイン名ではありません。
 - 古い値がスラッシュで始まる場合は、必ず新しい値もスラッシュで始めます。
 - 元の値の英字の大文字と小文字の区別を維持します。
- どんな値も削除しないで、置き換えてください。そのパラメータが必須であった場合、インストールまたは構成に失敗することがあります。
- 「DNS サフィックス」プロパティが正しく設定されていることを確認します。149 ページの「DNS サフィックスの確認」を参照してください。

状態ファイルの作成

状態ファイルを作成するには、グラフィカルインタフェースと、実際のインストールを禁止するコマンド行オプションを使用して、インストーラを実行します。「状態ファイルを生成する」の手順に従ってください。その後で、特定のターゲットマシン用に状態ファイルを編集します。51 ページの「状態ファイルの編集」を参照してください。

参考 – このソフトウェアのディスクまたはファイルごとに状態ファイルを 1 つ作成する必要があります。ツールコンポーネントおよびオプションサーバーのインストーラが生成する状態ファイルのペア値の組み合わせは異なります。

▼ 状態ファイルを生成する

1. インストールの際の適切なアクセス権を使用してログインします。

- Solaris OS の場合

- a. `xhost` コマンドを使用して、ディスプレイへのアクセスを許可します。

```
% xhost + your-local-machine
```

- b. `root` でログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。

- c. ローカルシステムに表示が行われるように `DISPLAY` 環境変数を設定します。

```
% setenv DISPLAY your-local-machine:0.0
```

- Microsoft Windows の場合

- 管理者 (administrator) 権限でログインします。

2. コマンドウィンドウで、インストーラプログラムが存在するディレクトリに移動します。

たとえば、Web サイトからファイルをダウンロードした場合は、以下の場所です。

```
cd java-studio-download-dir
```

3. 状態ファイルの絶対パス名を指定してインストーラを起動します。インストーラコマンドの形式は次のとおりです。

- Solaris OS の場合

```
# ./installer -no -saveState [statefile]
```


■ Microsoft Windows の場合

```
C:\> installer.bat -no -saveState [statefile]
```

上記コマンドのオプションの意味は次のとおりです。

オプション	説明
-no	このホストへのソフトウェアのインストールを禁止します。状態ファイルを生成する場合は必須です。
-saveState	<i>statefile</i> で指定した場所に状態ファイルを生成するようという指示です。 <ul style="list-style-type: none">• <i>statefile</i> 値を省略した場合、インストーラは、デフォルトのファイル (隠しディレクトリの <i>statefile.out</i>、<i>.install</i>) に書き込みます。• 注: 物理媒体からインストーラを起動した場合、状態ファイル名およびパスは必須です。
<i>statefile</i>	生成する状態ファイルへの絶対パスを指定します。

4. 使用プラットフォーム別のインストールに関する章で説明している指示に従って、インストーラを実行します。

インストーラに応答すると、状態ファイルにその応答が記録されます。インストールが完了すると、指定した場所に状態ファイルが生成されています。

状態ファイルの編集

サイレントインストールを行う前に、状態ファイルを編集し、インストール先のマシンに合わせてホスト名やドメイン名、IP アドレス、その他のローカルパラメータを設定します。52 ページの「ローカルパラメータの編集」を参照してください。状態ファイルのパラメータの編集には特に注意を払い、ホスト名、ドメイン名および IP アドレスの値が間違っていないことを確認してください。サイレントモードのインストールでは、対話形式と同等の妥当性検査は行われません。

状態ファイルを作成したオペレーティングシステムと異なるオペレーティングシステムにインストールする場合は、状態ファイル ID の変更が必要になることがあります。52 ページの「プラットフォームに適切な ID の作成」を参照してください。

注 – 別のマシンで作成された状態ファイルを使用すると、「指定された *statefile* は壊れています。」というメッセージがコンソールに表示されます。その場合は、状態ファイル ID および他のすべてのローカルマシンパラメータを変更していることを確認してください。

ローカルパラメータの編集

次の表は、マシンの設定によっては、編集が必要になる可能性があるパラメータの一覧です。たとえば、状態ファイルを生成したマシンが、インストール先のマシンと同じドメインの場合と、そうでない場合があります。

表 7-1 状態ファイルの編集可能なパラメータ

パラメータ名	意味とデフォルト値 (ある場合)
currentInstallDirectory	インストールディレクトリ。デフォルト値： <ul style="list-style-type: none">• Solaris OS - /opt/SUNWjstudio04q4• Windows - %SystemDrive%\Sun\jstudio_04Q4
CMN_HOST_NAME	マシン名
CMN_DOMAIN_NAME	ドメイン名
CMN_ADMIN_USER	インストーラのセッション中に入力された管理者のユーザー ID。デフォルトは admin。
CMN_ADMIN_PASSWORD	インストーラのセッション中に入力された管理者のパスワード (デフォルトなし)。使用したパスワードは書き留めておいてください。インストール後にパスワードを読み出すことはできません。
CREATE_NON_ROOT_INSTANCE	yes または no。デフォルトは no。
DEPLOY_CONTAINER_TYPE	デフォルトは appserver。webserver を指定することもできます。
STUDIO_USER	root 以外のユーザーアカウントのログイン ID。
STUDIO_GROUP	root 以外のユーザーアカウントのグループ。

プラットフォームに適切な ID の作成

状態ファイルを実行するマシンと同じオペレーティングシステムが動作するマシンで状態ファイルを生成します。次のプラットフォームは、それぞれに状態ファイルの ID の種類が異なります。

- SPARC プラットフォーム版の Solaris 8
- SPARC プラットフォーム版の Solaris 9
- x86 プラットフォーム版の Solaris
- Microsoft Windows 2000 Professional Edition
- Microsoft Windows XP Professional Edition

次の手順では、サイレントインストールを行うプラットフォーム上でインストーラを実行することによって状態ファイル ID を生成します。

注意 – Windows マシンで作成された状態ファイルを、Solaris OS マシンで編集、使用することはできません。

▼ インストーラを使用して状態ファイル ID を生成する

1. 適切なアクセス権を使用してログインします。
 - (Solaris OS の場合) root でログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
 - (Microsoft Windows の場合) インストーラを実行するには管理者 (administrator) 権限が必要です。
2. コマンドウィンドウで、インストーラが存在するディレクトリに移動します。
3. `-id` オプションを付けてインストーラを実行します。
 - Solaris OS の場合

```
# ./installer -id
```

- Microsoft Windows の場合

```
C:\> installer.bat no-src -id
```

このコマンドによって、暗号化された識別子が生成されます。次のように暗号化されています。

```
ddaf55796c650e12941234a6bf8be824397f5fe
```

4. 識別子をコピーし、`STATE_BEGIN` および `STATE_DONE` の値として状態ファイルにペーストします。

次は状態ファイル内の状態ファイル ID 例を示しています。

```
[STATE_BEGIN Sun Java(tm) Studio Enterprise  
f31c7e86a64605bc5b9b629931a30b275a0eb447]  
.  
.  
.  
[STATE_DONE Sun Java(tm) Studio Enterprise  
f31c7e86a64605bc5b9b629931a30b275a0eb447]
```

サイレントモードでのインストーラの実行

状態ファイルを生成したマシンとオペレーティングシステムが同じマシンでインストーラを実行するか、インストール先のマシンのプラットフォーム用の状態ファイル ID を作成する手順に進みます。53 ページの「インストーラを使用して状態ファイル ID を生成する」を参照してください。

▼ サイレントモードでインストーラを実行する

1. Java Studio Enterprise コンポーネントをインストールするホスト上で端末ウィンドウを開きます。
2. インストーラのポート割り当てロジックとの間で問題が起きるのを回避するには、デスクトップのファイアウォールソフトウェアを無効にします。
3. (Solaris OS のみ) インストールの準備として、X サーバーへのアクセスを許可し、DISPLAY 環境変数を設定します。

- a. DISPLAY へのアクセスを許可します。

```
% xhost + machine-name
```

- b. DISPLAY 環境変数にローカルディスプレイが正しく設定されていることを確認します。たとえば使用しているマシン名が *myhost* の場合は、以下のようになります。

```
% setenv DISPLAY myhost:0.0
```

4. 適切なアクセス権を使用してログインします。
 - (Solaris OS の場合) root である必要があります。
 - (Microsoft Windows の場合) 管理者権限 (administrator) が必要です。
5. コマンドウィンドウで、インストーラプログラムが存在するディレクトリに移動します。
6. 次のオプションを付けてインストーラを起動します。
 - Solaris OS の場合

```
# ./installer -nodisplay -noconsole -state statefile
```

- Microsoft Windows の場合

```
C:\> installer.bat -nodisplay -noconsole -state statefile
```

上記コマンドのオプションの意味は次のとおりです。

オプション	説明
-noconsole	コマンド行インタフェースを使用しないサイレントモードでインストーラを起動します。
-nodisplay	グラフィカルユーザーインタフェースを使用しないサイレントモードでインストーラを起動します。
-state	サイレントインストールへの入力として、指定した <i>statefile</i> を使用します。
<i>statefile</i>	<i>statefile</i> への絶対パス名を指定します。

インストールするコンポーネント数と種類によって、実行に時間がかかることがあります。

7. (省略可能 - Solaris OS のみ) サイレントインストールの進捗状況を監視します。

インストーラの実行中、インストールログに対する変更を見ることによってその進捗状況を監視することができます。次の手順に従ってください。

- a. 端末ウィンドウで `cd` コマンドを使用して、ログファイルのディレクトリに移動します。
以下はその例です。

```
cd /var/sadm/install/logs
```

- b. 現在のインストールに関するログファイルを探します。

Java Studio Enterprise ログファイルの詳細は、145 ページの「インストールログファイルの調査」を参照してください。

- c. `tail` コマンドを使用して、ログに書き込まれるメッセージを監視します。以下はその例です。

```
# tail -f log-file-name
```

サイレントモードでのソフトウェアのアンインストール

サイレントアンインストールは、類似の構成を持つ複数のホストから Java Enterprise System コンポーネントを自動的にアンインストールするのに便利です。サイレントアンインストールするには、アンインストーラを 1 回実行し、アンインストーラが「状態ファイル」に入力値を取り込めるようにする必要があります。

サイレントモードでのアンインストール手順は、サイレントモードでのインストール手順と似ています。サイレントモードの利用については、48 ページの「サイレントモードでのインストールの準備」および 49 ページの「状態ファイルの作成」を参照してください。52 ページの「プラットフォームに適切な ID の作成」で説明しているように、サイレントアンインストールするには、編集する必要があるパラメータは、ホストによって異なる 状態ファイル ID だけです。

サイレントモードでアンインストールする基本的な手順は、以下のようになります。

- 状態ファイルを生成する。
- 状態ファイルを編集する。
- 状態ファイルを使用し、サイレントモードでアンインストーラを実行する。

▼ 状態ファイルを生成する

1. (Solaris OS のみ) インストールの準備として、X サーバーへのアクセスを許可し、DISPLAY 環境変数を設定します。

- a. DISPLAY へのアクセスを許可します。

```
% xhost + machine-name
```

- b. DISPLAY 環境変数にローカルディスプレイが正しく設定されていることを確認します。

```
% setenv DISPLAY machinename:0.0
```

2. 適切なアクセス権を使用してログインします。

- (Solaris OS の場合) root でログインしていない場合は、「スーパーユーザー」になります。
- (Microsoft Windows の場合) 管理者権限 (administrator) が必要です。

3. アンインストーラが含まれているサブディレクトリに移動します。

```
cd java-studio-install-dir
```

4. 次のコマンドでアンインストーラを実行します。

- Solaris OS の場合

```
# ./uninstall -no -saveState statefile
```

- Microsoft Windows の場合

```
C:\> uninstall.bat -no -saveState statefile
```

上記コマンドのオプションの意味は次のとおりです。

<code>-no</code>	ソフトウェアの削除を禁止します。
<code>-saveState</code>	<code>statefile</code> で指定した場所に状態ファイルを生成するという指示です。作成する状態ファイルへの絶対パスを指定します。
<code>statefile</code>	生成する状態ファイルへの絶対パスを指定します。

5. アンインストーラを最後まで実行します。

アンインストーラに応答すると、指定した状態ファイルにその応答が記録されます。アンインストールが完了すると、指定した場所に状態ファイルが生成されています。

6. サイレントインストールを行うホストごとに状態ファイルの複製を作成し、必要に応じてその中の状態ファイル ID を編集します。

生成された状態ファイルを使用して、状態ファイルを生成したマシンと OS が異なるマシンから Java Studio Enterprise をアンインストールする場合は、適宜、状態ファイル ID を変更する必要があります。52 ページの「プラットフォームに適切な ID の作成」を参照してください。

注意 – Windows マシンで作成された状態ファイルを、Solaris OS マシンで使用することはできません。

▼ サイレントモードでアンインストーラを実行する

1. 56 ページの「状態ファイルを生成する」の手順 6 の説明に従って、正しく状態ファイルを作成し、編集していることを確認します。
2. アンインストールするための適切なアクセス権を持っていることを確認します。
3. アンインストーラが含まれているディレクトリに移動します。
4. 次のオプションを付けて、コマンド行からアンインストーラを起動します。

■ Solaris OS の場合

```
# ./uninstall -nodisplay -noconsole -state statefile
```

■ Microsoft Windows の場合

```
C:\> uninstall.bat -nodisplay -noconsole -state statefile
```

上記コマンドのオプションの意味は次のとおりです。

<code>-noconsole</code>	コマンド行インタフェースを使用しないサイレントモードでアンインストーラを起動します。
<code>-nodisplay</code>	グラフィカルユーザーインタフェースを使用しないサイレントモードでアンインストーラを起動します。
<code>-state</code>	サイレントアンインストールへの入力として、指定した <i>statefile</i> を使用します。
<i>statefile</i>	<i>statefile</i> への絶対パス名を指定します。

アンインストーラの実行中、アンインストールログの内容を見ることによってその進捗状況を監視することができます。

▼ サイレントモードでのアンインストールを監視する (Solaris OS)

1. 端末ウィンドウでログファイルのディレクトリに移動します。

```
# cd /var/sadm/install/logs
```

2. 現在のアンインストールに関するログファイルを探します。
監視するログファイルは次のとおりです。

- `Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4__uninstall.Btimestamp`
`timestamp` 変数は、ログが作成された日時を表し、`MMddhhmm` の形式です。

`MM` 月を意味します

`dd` 日を意味します。

`hh` 時を意味します。

`mm` 分を意味します。

3. `tail` コマンドを使用して、ログに書き込まれるメッセージを監視します。
以下はその例です。

```
# tail -f log-file-name
```


第8章

Java Studio EnterpriseIDE の設定

IDE をインストールしたら、この章の説明に従って Java Studio Enterprise ソフトウェアの起動、設定、登録を行います。

この章は、以下の節で構成されています。

- 61 ページの「IDE の起動」
- 63 ページの「IDE の設定」
- 64 ページの「コラボレーション実行環境の利用」
- 67 ページの「起動オプションの利用」
- 69 ページの「Java Studio Enterprise IDE のユーザーディレクトリ」
- 70 ページの「IDE 設定中の障害追跡」

IDE の起動

ツールコンポーネントのインストールの最後に、IDE を起動するためのオプションが表示されます。Microsoft Windows マシンの場合、デフォルトで、このオプションは選択されています。Solaris OS マシンの場合は、ファイルアクセス権の問題があるため、このオプションは選択されていません。

IDE を初めて起動すると、次の作業を行うように求められます。

- ソフトウェアの登録
- 自動更新検査を行うかどうかの指定

▼ IDE を起動する (Microsoft Windows)

IDE は、以下の 3 通りの方法で起動できます。

- デスクトップにある「Java Studio Enterprise」アイコンをダブルクリックする。
- 「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」->「Java Studio Enterprise を起動」を選択する。

- 次の手順でコマンド行から IDE を起動する。

1. 「コマンドプロンプト」ウィンドウで、IDE の実行可能ファイルの入ったインストールディレクトリに移動します。

例：

```
C:\> cd java-studio-install-dir\Ent_04Q4\bin
```

2. 次のいずれかのコマンドで IDE を起動します。

- デスクトップアイコンが使用しているデフォルトの起動ツールを使用して IDE を起動する場合は、`runidew.exe` を使用します。

```
C:\> runidew.exe
```

- IDE を起動して、Windows コンソールにメッセージを表示する場合は、次のように入力します。

```
C:\> runide.exe
```

`runide.exe` コマンドに対しては、コマンド行または `java-studio-install-dir\Ent_04Q4\bin\ide.cfg` ファイルでオプションを指定することができます。67 ページの「起動オプションの利用」を参照してください。

▼ IDE を起動する (Solaris)

1. IDE の実行可能ファイルが入っているインストールディレクトリに移動します。以下はその例です。

```
% cd java-studio-install-dir/Ent_04Q4/bin
```

2. IDE を起動します。

```
% ./runide.sh
```

`runide.exe` コマンドに対しては、コマンド行または `java-studio-install-dir/Ent_04Q4/bin/ide.cfg` ファイルでオプションを指定することができます。67 ページの「起動オプションの利用」を参照してください。

IDE の設定

IDE には、IDE 環境を制御するための次のウィザードが用意されています。

- 設定インポートウィザード
- 設定ウィザード
- 登録ウィザード

設定インポートウィザード

マシンに以前のバージョンの IDE がある場合、IDE を初めて起動すると、設定インポートウィザードが表示されます。このウィザードでは、Java Studio Enterprise に以前のバージョンの IDE の設定をインポートすることができます。設定をインポートする必要がない場合は、「いいえ」を選択して、「IDE を起動」をクリックしてください。

設定ウィザード

設定ウィザードには、IDE のメインウィンドウから「ツール」>「設定ウィザード」を選択することによってアクセスできます。

設定ウィザードでは、以下のことを行うことができます。

- IDE の表示ウィンドウモードの設定 (MDI または SDI)
- 内部および外部 Web ページの表示に使用する Web ブラウザの指定
- ファイアウォールがある場合に使用する Web プロキシ構成の設定
- 「モジュールのインストール」ページを使用した IDE モジュールの有効または無効
- 「アップデートセンター」ページを使用した以下の制御
 - 自動更新検査
 - 自動更新間隔
 - チェックするアップデートセンター URL

登録ウィザード

IDE を初めて起動すると、登録ウィザードが表示されます。このウィザードでは、Sun Developer Resources Web サイトにソフトウェアを登録することができます。

ソフトウェアを登録すると、次の特典が得られます。

- アップデートセンターにアクセスして、新しいモジュールおよびアップデートをダウンロードし、インストールできる。
- モジュールやパッチ、バグ修正版にアクセスできる

IDE のメインウィンドウから「ヘルプ」>「その他のリソース」>「登録ウィザード」を選択することによって、後で Sun 開発者リソースに登録することもできます。

▼ IDE モジュールを有効または無効にする

1. メインメニューから「ツール」>「設定ウィザード」を選択します。
2. 「モジュールのインストール」ページが表示されるまで「次へ」をクリックします。
3. 「モジュールのカテゴリ」ノードを展開して、モジュールの一覧を表示します。
モジュールのアイコンをクリックすると、モジュール機能の簡単な説明を見ることができます。
4. 「有効化」プロパティを True または False に切り替えることによってモジュールを有効または無効にします。

デフォルトでは、WebLogic サーバー配備モジュール (WebLogic プラグイン) を除いて、IDE にインストールされているすべてのモジュールは有効になっています。

WebLogic モジュールの有効化については、
<http://developers.sun.com/prodtech/javatools/jsenterprise/reference/techart/index.html> で WebLogic に関する専門的な記事が紹介されています。

コラボレーション実行環境の利用

Sun Java Studio Enterprise 7 2004Q4 では、企業におけるコラボレーションのための新機能が導入されています。IDE でコラボレーション機能を使用できるようにするには、ツールコンポーネントディスク (またはファイル) から IDE をインストールするときにコラボレーション実行環境をインストールして、起動します。5 ページの「インストールする製品の選択」を参照してください。

コラボレーション実行環境は、Windows の場合は「スタート」メニュー、Solaris OS の場合はコマンド行から起動できます。Microsoft Windows システムの場合、コラボレーション実行環境は、Windows が再起動されたときに自動的に起動するように設定されています。この設定は、Microsoft Windows のコントロールパネルを使用して変更できます。66 ページの「コラボレーション実行環境オプションを設定する (Microsoft Windows)」を参照してください。

ランタイムが起動したら、IDE を起動し、IDE からアカウントを作成します。このためには、次の手順に従ってください。

▼ コラボレーション機能を使用可能にする

1. ツールコンポーネントをインストールしたら、ランタイムスクリプトを探し、起動します。
 - (Microsoft Windows の場合) 「スタート」 > 「プログラム」 > 「Sun Microsystems」 > 「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」 > 「コラボレーション実行環境」 > 「実行環境を起動」を選択します。
 - (Solaris OS の場合)
 - a. 実行可能ファイルが入っているインストールディレクトリに移動します。以下はその例です。

```
% cd java-studio-install-dir/CollabRuntime/bin
```

- b. コラボレーション実行環境プロセスを起動します。

```
% ./xmppd start
```

このプロセスを起動するには、root でログインする必要があります。

2. IDE を起動します。
3. IDE のメインメニューから「コラボレーション」 > 「ログイン」を選択します。
IDE の右側に「コラボレーションログイン」ウィンドウが開きます。
4. 「アカウントを追加」をクリックします。
「コラボレーションアカウントを追加」ウィザードが表示されます。
5. 「コラボレーションサーバーに新しいアカウントを作成する」を選択して、「次へ」をクリックします。

6. ウィザードの指示に従って「サーバーの場所」区画まで操作を進めます。

コラボレーション実行環境がある場所を入力します。Configuration_Data.html ファイルを参照することによって、インストール中に使用された実際のポート番号と場所を確認できます。デフォルトのインストールディレクトリを使用した場合、このファイルは次の場所にあります。

- (Microsoft Windows) C:/Sun/jstudio_04Q4/Configuration_Data.html
- (Solaris OS) /opt/SUNWjstudio/Configuration_Data.html

サーバーの場所は、*machinename:portnumber* の形式です。インストール中にデフォルトのポート番号が使用可能であった場合、この場所は *machinename:5222* になっています。

▼ コラボレーション実行環境オプションを設定する (Microsoft Windows)

コラボレーション実行環境は、Microsoft Windows サービスとしてインストールされます。デフォルトの設定では、Windows システムが起動したときに自動的に起動します。この設定は、次の手順で変更できます。

1. 「スタート」>「設定」>「コントロールパネル」(または「スタート」>「コントロールパネル」) を選択します。

「コントロールパネル」ダイアログが表示されます。

2. 「管理ツール」をダブルクリックします。

「管理ツール」ダイアログが表示されます。

3. 「サービス」をダブルクリックします。

4. サービスの一覧を下方向にスクロールして、「Java Studio Enterprise 7 コラボレーション実行環境」のエントリを右クリックします。

5. コンテキストメニューから「プロパティ」を選択し、ドロップダウンリストから「スタートアップの種類」を選択します。

実行環境のデフォルト設定は自動で、このため、Windows が起動したときに自動的に起動します。

▼ コラボレーションのログオプションを変更する

1. 次の場所からコラボレーション実行環境構成ファイルを探します。

java-studio-install-dir/CollabRuntime/config/xmppd.conf

2. デバッグログを有効にするには、テキストエディタでこの構成ファイルを開き、*iim.log.iim_server.severity=DEBUG* を設定します。

3. コラボレーション実行環境のログファイルは、`java-studio-install-dir\CollabRuntime\log\xmppd.log` にあります。

▼ コラボレーション関係のマニュアルを参照する

IDE のオンラインヘルプには、コラボレーション機能に関するマニュアルが用意されています。

- 「ヘルプ」 > 「ヘルプ (トピック別)」 を選択して、適切なトピックを選択します。
 - 開発者コラボレーションヘルプ
 - 開発者コラボレーションチャットヘルプ
 - 開発者コラボレーションファイル共有ヘルプ

▼ コラボレーション実行環境を停止する

- (Microsoft Windows の場合) 「スタート」 > 「プログラム」 > 「Sun Microsystems」 > 「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」 > 「コラボレーション実行環境」 > 「実行環境を停止」 を選択します。
- (Solaris OS の場合)
 - a. 実行可能ファイルが入っているインストールディレクトリに移動します。以下はその例です。

```
% cd java-studio-install-dir/CollabRuntime/bin
```

- b. コラボレーション実行環境プロセスを停止します。

```
% ./xmppd stop
```

起動オプションの利用

runide 起動スクリプトにコマンド行オプションを追加して、実行することができます。

オプションは、次の方法で利用できます。

- コマンド行でオプションを入力する。
- `java-studio-install-dir/Ent_04Q4/bin/ide.cfg` ファイルにオプションを入力する。

IDE は、コマンド行オプションを解析する前に `ide.cfg` ファイルを読み取ります。`ide.cfg` ファイルでは、複数行にオプションを入力することができます。

表 8-1 は、`runide` のコマンド行オプションの一覧です。

表 8-1 IDE の起動オプション

オプション	説明
<code>-h</code> <code>-help</code>	使用可能なオプションとその使用法を出力します。
<code>-jdkhome <i>jdk-home-dir</i></code>	インストール中に指定したデフォルト以外の J2SE プラットフォームの場所を指定します。
<code>-cp:p <i>additional-classpath</i></code>	IDE のクラスパスの前に指定されたクラスパスを追加します。
<code>-cp:a <i>additional-classpath</i></code>	IDE のクラスパスの後に指定されたクラスパスを追加します。
<code>-userdir <i>IDE-user-dir</i></code>	<i>IDE-user-dir</i> (ユーザー設定がある場所) を指定します。 このオプションを指定されていない場合は、デフォルトの場所が使用されます。69 ページの「Java Studio Enterprise IDE のユーザーディレクトリ」を参照してください。
<code>-J <i>jvm-flags</i></code>	Java™ 仮想マシン (JVM™) ソフトウェアに指定されたフラグを直接渡します。
<ul style="list-style-type: none">• <code>-Xverify:none</code>	<code>-J -Xverify:none</code> は、バイトコードの妥当性を検査しないよう JVM ソフトウェアに指示します。これによって、起動時間が短縮されます。このフラグを設定すると、Java 言語が提供する保護の一部が行われなくなります。詳細は、JVM ソフトウェアのマニュアルを参照してください。
<ul style="list-style-type: none">• <code>-Xms24m</code>	<code>-J -Xms24m</code> は、JVM ソフトウェアの初期ヒープサイズを 24M バイトに設定します。このフラグによって、JVM ソフトウェアが起動中にヒープサイズを拡張することがなくなり、起動時間が短縮されます。
<ul style="list-style-type: none">• <code>-Xmx96m</code>	最大 Java ヒープサイズ
<ul style="list-style-type: none">• <code>-Xss1024k</code>	スレッドスタックサイズ

表 8-1 IDE の起動オプション (続き)

オプション	説明
(Microsoft Windows のみ) hotspot または -classic	使用する Java 仮想マシン (JVM) を指定します。 「Java 仮想マシン」および「JVM」という用語は、 Java プラットフォーム用の仮想マシンを意味しま す。
"-ui" <i>UI_class_name</i>	指定された UI クラスを IDE のルック & フィールに 設定します。
"-fontsize" <i>size</i>	IDE ユーザーインターフェースに使用するフォンス イズをポイント数で設定します。デフォルト値は 11 ポイントです。

Java Studio Enterprise IDE のユーザー ディレクトリ

IDE は、ユーザー固有のデータをユーザーディレクトリに格納します。ユーザー固有のデータとしては、たとえば IDE の設定やオプション、その他、PointBase サーバーや UDDI レジストリサーバー、Tomcat などの個人的な開発サーバーに必要な実行時データがあります。ユーザーディレクトリにはまた、テクニカルサポートを受けるときに有用な情報を提供する `ide.log` ファイルも含まれます。

- Microsoft Windows システムの場合、このディレクトリのデフォルトの場所は `%SystemDrive%\Documents and Settings\user-id\.jstudio\Ent04Q4` です。
- Solaris システムの場合は、`$HOME/.jstudio/Ent04Q4` です。

初期インストール時、このディレクトリに必要な最小ディスク容量は 5.5M バイトです。実際の実行時ディスク使用量は、IDE で使用されるコンポーネントによって異なります。

IDE の初めての起動では、コマンド行で `-userdir` コマンド行オプションを付けて IDE を起動することによって、デフォルト以外のユーザーディレクトリの場所を指定することができます。コマンド行オプションについては、表 8-1 を参照してください。

IDE 設定中の障害追跡

この節では、新しくインストールした IDE の設定および構成中に発生する可能性がある問題を説明しています。

1. IDE のパフォーマンスに問題がある。

考えられる原因：仮想メモリまたはスワップ空間が不足している可能性があります。

対策：仮想メモリまたはスワップ空間のサイズを、マシンの RAM 容量の 1.5 倍から 2 倍の範囲のサイズに増やしてください。

2. IDE の開始画面からリンクにアクセスしようとする、以下のような例外が発生する。

```
Could not access the URL through the external browser.Check the browser configuration...
```

考えられる原因：外部 Web ブラウザの設定が正しくない可能性があります。

対策：次の手順で外部ブラウザの設定をしてください。

- a. 「ツール」メニューから「オプション」を設定します。
- b. 「オプション」ウィンドウで「IDE 構成」ノードを展開します。
- c. 「サーバーと外部ツールの設定」ノードを展開します。
- d. 「Web ブラウザ」ノードを展開します。
- e. 「外部ブラウザ (コマンド行)」を選択し、使用している外部ブラウザに従って、「ブラウザの実行可能ファイル」プロパティおよび「DDE サーバー」プロパティに適切な値を設定します。

それでも問題が解決しない場合は、次の手順に従います。

■ Windows の場合

- a. デスクトップの「Java Studio Enterprise」アイコンを選択して、右クリックします。
- b. 「プロパティ」を選択します。
- c. 以下のように「リンク先」フィールドを編集します。

```
C:\ java-studio-install-dir\bin\runidew.exe -userdir pathname-to-user-directory
```

- Solaris の場合
 - コマンド行から、起動オプションの `-userdir` を指定して IDE を起動します。69 ページの「Java Studio Enterprise IDE のユーザーディレクトリ」も参照してください。
- 3. IDE の起動メニューから、Web ページにリンクしている項目をどれか選択すると、次のエラーメッセージが表示されます。

```
Error: Cannot find the file C:\Sun\jstudio_04Q4\AppServer7\docs\
about.html. Make sure the path and filename are correct and that
all required libraries are available.
```

考えられる原因：このエラーは、Netscape ブラウザを使用しているときに発生する Microsoft Windows のエラーです。HTML ページを開くプログラムとして Netscape を設定していて、Netscape をデフォルトブラウザとして設定していない場合に、このエラーが発生することがあります。

対策：「了解」をクリックして、このエラーを消します。デフォルトブラウザとして Netscape を設定するか、HTML ページを開くプログラムとして Internet Explorer を設定します。

- 4. 上記のエラーを消した後で、次のエラーメッセージが表示されます。

```
Error: Unable to run this command.
```

「了解」をクリックして、このエラーを消します。デフォルトブラウザとして Netscape を設定します。

5. Solaris システムにツールコンポーネントをインストールし、「IDE を起動」を選択すると、次のエラーメッセージが表示されます。

```
# java.io.IOException: Permission denied
at java.io.UnixFileSystem.createFileExclusively(Native Method)
at java.io.File.createNewFile(File.java:828)
at org.netbeans.CLIHandler.initialize(CLIHandler.java:358)
at org.netbeans.CLIHandler.initialize(CLIHandler.java:245)
at org.netbeans.Main.execute(Main.java:143)
at org.netbeans.Main.main(Main.java:33)
...
...
...
org.netbeans.core.NbTopManager.get(NbTopManager.java:188)
at org.netbeans.core.Main.start(Main.java:485)
at org.netbeans.core.TopThreadGroup.run(TopThreadGroup.java:90)
at java.lang.Thread.run(Thread.java:534)
Cannot add System filesystem: null, exiting...
```

考えられる原因：このエラーメッセージは、アクセス権に問題があるために IDE の起動に失敗したことを示しています。多くの場合は、スーパーユーザーで IDE をインストールし、最後に「IDE を起動」オプションを選択したことが原因です。インストールに問題があったことを示しているわけではありません。

対策：端末をウィンドウおよびスーパーユーザー環境を終了して、標準ユーザーとして IDE を起動してください。

IDE における Sun Java System Application Server インスタンスの利用

Java Studio Enterprise のツールコンポーネントを正常にインストールすると、デフォルトのアプリケーションサーバーとしての Sun Java System Application Server Standard Edition 7 2004Q2 (以降「Application Server」) の構成を検証することができます。Java Studio Enterprise IDE には、Sun Java System Application Server プラグインが含まれています。この章では、このプラグインによって可能になる一般的な作業とともに、IDE からの Application Server インスタンスの作成および IDE におけるシナリオについて説明します。この章ではまた、管理ドメインおよびその他の一般的な Application Server 作業についての基礎的な情報も提供します。

Application Server の管理および使用方法については、マニュアルで詳しく説明しています。Sun Java System Application Server のマニュアルは、http://docs.sun.com/db/coll/ApplicationServer7_04q2 から入手できます。

この章は、以下の節で構成されています。

- 74 ページの「Application Server の統合とインスタンスについて」
- 77 ページの「デフォルトの管理ドメインの使用」
- 79 ページの「管理ドメインについて」
- 85 ページの「その他の一般的な Application Server 作業」

Application Server の統合とインスタンスについて

Sun Java System Application Server プラグインによって、IDE と Application Server を密に統合することができます。この節では、さまざまなインストールシナリオで作成される Application Server ドメインとインスタンス、プラグインによって可能になる新しい Application Server 自動起動機能について説明します。この節で取り上げる内容は次のとおりです。

- 74 ページの「Application Server のインスタンス (Microsoft Windows)」
- 75 ページの「Application Server のインスタンス (Solaris OS)」
- 77 ページの「Application Server と IDE の統合」

Application Server のインスタンス (Microsoft Windows)

Sun Java System Access Manager および Sun Java System Portal Server は、Sun Java Studio Enterprise 7 のオプションサーバーからインストールできます。これら 2 つの製品は、基本的に Web コンテナ内で動作する Web アプリケーションです。Web コンテナとしては、Application Server または Web Server のどちらでも使用できます。デフォルトの Web コンテナは Application Server です。表 9-1 は、生成されるサーバーインスタンスをまとめています。

表 9-1 インストール中に作成される Application Server インスタンス (Microsoft Windows)

シナリオ	Application Server をインストール	Access Manager をインストール	Portal Server をインストール	代替 Web コンテナとして Web Server が選択された場合	作成される Application Server のドメインとインスタンス (Web Server の詳細は第 10 章を参照)	ドメインの所有者
1	○	×	×	なし	domain1:admin-server domain1:server1	管理者 (administrator)
2	○	○	○	×	domain1:server1 domain1:admin-server	管理者 (administrator)
3	○	○	○	○	jstudio-domain:admin-server jstudio-domain:jstudio-server [Access Manager および Portal Server 用の Web コンテナ]	管理者 (administrator)
	○	○	○	○	domain1:admin-server domain1:server1	管理者 (administrator)

Application Server のインスタンス (Solaris OS)

インストール中の選択によって異なりますが、Java Studio Enterprise IDE および Application Server をインストールすると、インストーラによって 1 つまたは複数の構成済みサーバーインスタンスが作成されます。表 9-2 は、考えられる選択のシナリオと作成されるインスタンスをまとめています。

表 9-2 Application Server インストール中に作成されるインスタンス (Solaris OS)

シナリオ	Application Server をインストール	Access Manager をインストール	Portal Server をインストール	Web コンテナが Web Server の場合	作成される Application Server のドメインとインスタンス	ドメインの所有者	インストール中の root 以外の使用許可
1	○	×	×	なし	domain1:admin-server domain1:server1	root root	×
1a	○	×	×	なし	domain1:admin-server domain1:server1	インストール中に指定された root 以外のユーザー	○
2	○	○	○	×	domain1:admin-server domain1:server1 jstudio-domain:admin-server jstudio-domain:jstudio-server [Access Manager および Portal Server 用の Web コンテナ]	root root root root	×
2a	○	○	○	×	domain1:admin-server domain1:server1 jstudio-domain:admin-server jstudio-domain:jstudio-server [Access Manager および Portal Server 用の Web コンテナ]	インストール中に指定された root 以外のユーザー root	○
3	○	○	○	○	domain1:admin-server domain1:server1	root root	×
3a	○	○	○	○	domain1:admin-server domain1:server1	インストール中に指定された root 以外のユーザー	○

Application Server と IDE の統合

IDE のサーバーレジストリに表示されるのは、domain1 のインスタンスだけです。Access Manager および Portal Server 用の Web コンテナとして使用される jstudio-domain を作成した場合、jstudio-domain は IDE の外で起動、停止する必要があります。IDE の外での Application Server の起動および停止の詳細は、第 13 章 (Microsoft Windows の場合) または第 14 章 (Solaris OS の場合) を参照してください。

IDE の構成済み Application Server を明示的に起動する必要はありません。サーバーの起動は、サーバーにアクセスしたときに自動的に行われます。自動起動は、「実行時」ウィンドウのサーバーレジストリの「デフォルトサーバー」ノードで Application Server インスタンスがデフォルトの J2EE サーバーとして設定されている場合に作動します。IDE のサーバーレジストリに初めてアクセスすると、プラグインによって domain1 管理サーバーが自動的に起動され、構成済みの Application Server インスタンス server1 がデフォルトの J2EE サーバーに設定されます。

次の作業を行うと、Application Server の自動起動が作動します。

- **J2EE モジュールまたは Web アプリケーションを配備する。** Application Server 管理インスタンスがまだ動作していない場合は、自動的に起動されます。
- **J2EE モジュールまたは Web アプリケーションを実行する。** Application Server 管理インスタンスとサーバーインスタンスがまだ動作していない場合は、自動的に起動されます。

注 – 管理コンソールを使用するには、インストール中に指定した管理者パスワードが必要です。

デフォルトの管理ドメインの使用

Java Studio Enterprise IDE および Sun Java System Application Server をインストールすると、事前に構成されたデフォルト管理ドメインが作成されます。このドメインは、IDE のサーバーレジストリに追加されています。サーバー設計では、この管理ドメインおよび関係する管理サーバーは、インストールを行ったスーパーユーザーまたは管理者に属します。

(Solaris OS の場合) デフォルトのドメインおよびサーバーインスタンスが root 以外の (標準) ユーザーアカウントに属するよう指定することができます。root 以外のユーザーアカウントを指定するオプションは、インストール中に選択する必要があります。37 ページの「root 以外のユーザーによる製品の使用」を参照してください。このオプションは、Solaris OS マシンへのインストールでしかサポートされていません。

通常 IDE を使用するユーザーがスーパーユーザーまたは管理者権限を持っている場合、そのユーザーはインストールされているデフォルトの設定でサーバーを起動することができます。たとえば 開発者が管理権限を持つユーザーログインを使用して毎日の作業を行う Microsoft Windows 開発環境では、78 ページの「デフォルトの管理サーバーを確認する」の説明に従いデフォルトの管理ドメインおよびサーバーを使用することができます。

標準の IDE ユーザーがスーパーユーザーまたは管理権限を持たない場合、デフォルトの管理ドメインを使用するには、次の追加手順が必要になります (このマニュアルでは説明していません)。

- スーパーユーザーが所有するデフォルトドメインを操作するためのアクセス権を持つユーザーグループを作成する。
- 標準ユーザーが専用の Application Server インスタンスを作成したり、デフォルトの管理サーバーを起動、停止したりできるよう、ドメインディレクトリのアクセス権を変更する。
- IDE を使わずにデフォルト管理サーバーを起動し (これはスーパーユーザーが行う)、IDE ユーザーが IDE を使って、このドメインに属するサーバーインスタンスを操作できるようにする。

注意 - ドメインディレクトリのアクセス権を変更する場合、設定を間違えると、セキュリティ上の問題が発生することがあります。詳細は、Application Server のマニュアルを参照してください (表 9-3 を参照)。

▼ デフォルトの管理サーバーを確認する

1. IDE の「実行時」ウィンドウをクリックします。

「実行時」ウィンドウに「サーバーレジストリ」ノードが表示されます。「サーバーレジストリ」ノードには、インストールされているすべての Web サーバーおよびアプリケーションサーバーのサブノードが含まれています。デフォルトのサーバーになっっているサーバーを示すノードもあります。

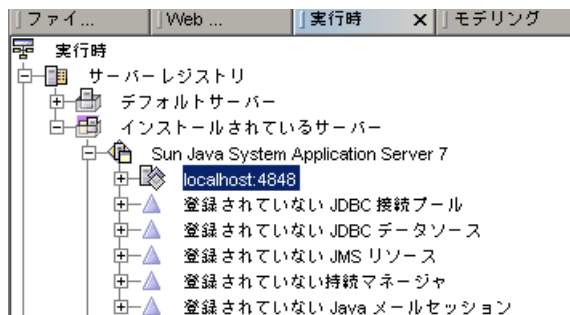
2. 「サーバーレジストリ」ノードを展開します。

デフォルトの管理サーバーが起動して、Sun Java System Application Server が IDE のデフォルトのアプリケーションサーバーとして構成されます。この処理が完了するまでに 1 分ほど時間がかかることがあります。

3. 「デフォルトサーバー」ノードを展開します。

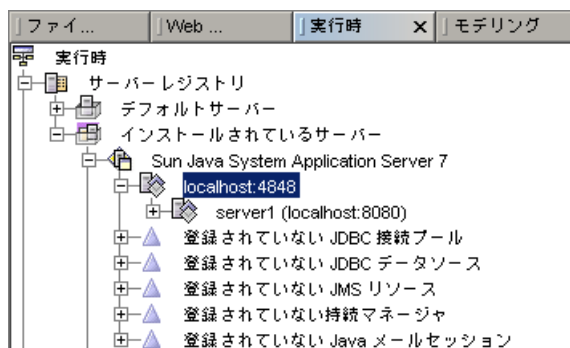
server1 インスタンスが、J2EE アプリケーション用のデフォルトのサーバーに設定されていることを確認します。

4. (省略可能) 「インストールされているサーバー」ノードを展開して、「Sun Java System Application Server 7」ノードを展開します。



この画面例では、「localhost:4848」ノードが管理サーバーインスタンスです。

5. (省略可能) 「localhost:4848」ノードを展開して、Application Server インスタンスの server1 を表示します。



管理ドメインについて

この節は、Sun Java System Application Server 7 のマニュアルからの抜粋で、管理ドメインに関する基礎的な情報を提供します。Sun Java System Application Server には、管理ドメインという機能が導入されています。この機能によって、同じインストールイメージを再利用する、互いに完全に独立した Application Server の実行時構成を複数定義することができます。それぞれの管理ドメインは 1 つの管理サーバーによって表され、この管理サーバーが 1 つ以上の Application Server インスタンスを制御します。管理ドメインの構成は、マシンの任意の場所に置くことができます。

それぞれ専用のワークステーションを使用している開発者が毎日の開発に 1 つの管理ドメインを共用することはよくあることですが、共有開発サーバーと運用環境の両方がある環境では、複数の管理ドメインを使用することで多大なメリットを得ることができます。共有開発サーバーでは、開発者ごとに 1 つの管理ドメインを作成することによって、共有サーバーマシンの各開発者に区切られた領域、「サンドボックス」を

提供することができます。運用環境では、システム管理者は、管理ドメインによって製品を複数インストールしなくても、独立した安全な実行時構成を定義することができます。

開発環境の技術的な慣行によって異なりますが、個々の開発者が使用可能な管理サーバードメインを作成または構成する際のオプションは複数あります。

表 9-3 は、構成済みのインスタンスが開発ニーズに合わない場合に Application Server の構成を行う手順をまとめています。

表 9-3 Application Server の手順

説明	手順の説明場所	作業可能なユーザー
別のユーザーが IDE で使用する管理ドメインを作成する。	81 ページの「別のユーザー用のドメインを作成する」を参照。	スーパーユーザー または管理者のみ
IDE サーバードメインにユーザードメインを追加する。	83 ページの「IDE にユーザーのドメインを追加する」を参照。	任意の IDE ユーザー
デフォルトの管理ドメインおよびサーバーを操作するアクセス権を持つユーザーグループを作成する。	『Sun Java System Application Server 7 2004Q2 Administration Guide』を参照。	スーパーユーザー または管理者のみ
標準ユーザーがデフォルトの管理ドメインおよびサーバーを操作できるよう、ドメインディレクトリのアクセス権を変更する。	標準的な Solaris OS 管理作業。システム管理者にお尋ねください。	スーパーユーザー または管理者のみ

ユーザーごとの管理ドメインの作成

Solaris 開発環境では、通常、ユーザーはスーパーユーザー権限を持つユーザーとして IDE を実行しません。このため、付属の Sun Java System Application Server を使用する場合は、起動および停止が可能な管理ドメインへのアクセス権を IDE ユーザーに付与する必要があります。このアクセス権を付与することによって、開発作業の必要に応じて、IDE ユーザーがそのドメイン内で Application Server インスタンスを作成、操作できるようになります。

管理サーバードメインへのアクセス権をユーザーに付与する方法は複数あります。ここで説明する 2 段階の手順では、標準 IDE ユーザーに独立したドメインを 1 つ作成します。この手順を終了すると、ユーザーは自分の管理ドメインをどのように使用するか自由に制御することができ、システム管理者の介入が最小限ですみます。

この手順は、次の 2 段階の作業で構成されます。

- 81 ページの「別のユーザー用のドメインを作成する」
- 83 ページの「IDE にユーザーのドメインを追加する」

この手順では、第 1 の段階として、スーパーユーザーが標準 (非 root) ユーザーごとに独立した Application Server 管理ドメインを 1 つ作成します。第 2 の段階では、標準ユーザーが、IDE のサーバーレジストリに管理ドメインを追加することによって (「登録」ともいう) IDE 内に新しいドメインを構成します。こうして標準ユーザーは、開発の必要に応じて、このドメインの管理サーバーを制御したり、Application Server のインスタンスを操作したりできます。

▼ 別のユーザー用のドメインを作成する

標準ユーザーアカウント用のドメインは、以下の手順でスーパーユーザーが作成します。この手順は、IDE を使わずにコマンド行で行います。Microsoft Windows システムでこの手順を使用する場合は、必要に応じてコマンドおよびディレクトリを変更してください。asadmin についての詳細は、<http://docs.sun.com/source/817-3652-10> から入手可能な『Sun Java System Application Server 7 2004Q2 Administration Guide』を参照してください。

1. スーパーユーザーまたは管理者 (administrator) になります。
2. asadmin ユーティリティの実行可能ファイルが存在するディレクトリに移動します。

たとえば次のように入力します。

```
# cd /opt/java-studio-install-dir/AppServer7/bin
```

この例は、Solaris インストールでのデフォルトのインストールディレクトリを示しています。本製品をインストールしたときに別のインストールディレクトリを指定した場合は、/opt/java-studio-install-dir をそのディレクトリへのパス名に置き換えてください。

3. コマンド行から `asadmin` ユーティリティの `create-domain` コマンドを使用して、ドメインを作成します。

```
# ./asadmin create-domain --sysuser standarduser --adminport portnumber
--adminuser useradmin --adminpassword userpassword userdomain
```

このコマンドのオプションと関係する引数は、この後の表に示すとおりです。ドメイン名はオプションなしで指定します。

オプション	引数	説明
<code>--sysuser</code>	<code>standarduser</code>	使用システムの既存の標準ユーザーのログイン ID
<code>--adminport</code>	<code>portnumber</code>	この管理ドメインインスタンスに使用可能なポート番号
<code>--adminuser</code>	<code>useradmin</code>	この管理ドメインに関連付けるユーザー名
<code>--adminpassword</code>	<code>userpassword</code>	この管理ドメインのユーザー名に関連付けるユーザーパスワード
なし	<code>userdomain</code>	標準ユーザーのドメイン名。一意である必要があります。
<code>--path</code>	<code>domain_path</code>	ドメインの作成場所にするディレクトリへのパス。省略された場合、ドメインはデフォルトのドメインディレクトリに作成されます。詳細は、『Sun ONE Application Server 7 入門ガイド』を参照してください。

次のメッセージが表示されます。

```
Created Domain userdomain successfully.
```

4. スーパーユーザー権限を終了します。
5. 手順 3 で使用した値 (ポート番号、管理ユーザー名、管理ユーザーパスワード、ドメイン名) を標準ユーザーに通知します。

標準ユーザーは、これらの値を使用し、IDE でアプリケーションサーバーの構成を完了します。これらの値は、83 ページの「IDE にユーザーのドメインを追加する」の節の手順 3 で使用します。

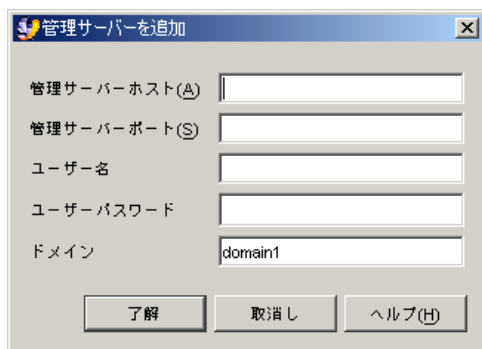
▼ IDE にユーザーのドメインを追加する

この手順は、通常の日常の開発業務で IDE の実行で使用するものと同じログインおよびアクセス権を使用して行ってください。

注 – インストール中に root 以外のユーザーによる使用を可能にした場合、この手順を使用する必要はありません。インストールによって作成されたデフォルトの管理ドメインおよびサーバーインスタンスは、指定した root 以外のユーザーがすでに所有し、そのユーザー用に構成されています。

1. IDE を起動します。
2. IDE の「実行時」ウィンドウで「サーバーレジストリ」ノードを選択します。
3. 次の手順で管理サーバーを追加 (Application Server の用語では「登録」ともいう) します。
 - a. 「サーバーレジストリ」ノードを展開して、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。
 - b. 「Sun Java System Application Server 7」ノードを右クリックし、コンテキストメニューから「管理サーバーを追加」を選択します。

「管理サーバーを追加」ダイアログが表示されます。



- c. テキストフィールドに値を入力します。

IDE をインストール、ユーザーの管理ドメインを作成したスーパーユーザーまたは管理者から、次の値を入力します。

テキストフィールド	説明
管理サーバーホスト	localhost またはローカルマシン名
管理サーバーポート	create-domain コマンドで使用されたポート番号

ユーザー名	create-domain コマンドで使用されたユーザー名
ユーザーパスワード	create-domain コマンドで使用されたユーザーパスワード
ドメイン	create-domain コマンドで使用されたユーザードメイン

d. 「了解」をクリックします。

次のエラーメッセージが表示されることがあります。

```
Could not connect to Admin Server.If Admin Server is local it will be started.
```

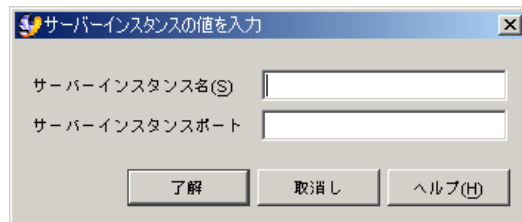
e. 「了解」をクリックして、このエラーメッセージを消します。

ローカルの管理サーバーが起動され、新しい管理サーバーが IDE に追加されます。サーバーレジストリに、ドメインと管理サーバーを表す新しい管理サーバーノードが生成されます。これで、Application Server インスタンスを作成できます。

4. Application Server インスタンスを作成する手順は次のとおりです。

a. 「実行時」ウィンドウで、入力したポート番号で識別される新しい管理サーバーノードをマウスの右ボタンでクリックし、コンテキストメニューから「サーバーインスタンスを作成」を選択します。

「サーバーインスタンスの値を入力」ダイアログが表示されます。



b. 名前と使用可能なポート番号を入力します。

たとえば MyServer、50000 と入力します。

注 – UNIX システムの場合、1023 から下のポート番号は予約されています。1023 より大きい番号で使用可能なポート番号を使用してください。デフォルトのアプリケーションサーバーあるいはシステム上の他のアプリケーションが使用しているポート番号を使用しないでください。

c. 「了解」をクリックします。

IDE に新しい Application Server インスタンスが作成されます。これは、管理サーバーインスタンスを展開することで確認できます。

5. 新しいサーバーをデフォルトのアプリケーションサーバーおよび Web サーバーとして設定するには、新しい Application Server インスタンスを右クリックして、「デフォルトとして設定」を選択します。
6. 「デフォルトサーバー」ノードを展開して、確認します。

J2EE アプリケーションおよび Web 層アプリケーション用のデフォルトサーバーに、新しいサーバーがデフォルトとして表示されています。

その他の一般的な Application Server 作業

▼ デフォルトの Application Server を手動で設定する

1. IDE の「実行時」ウィンドウで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「デフォルトサーバー」サブノードを展開します。

Sun Java System Application Server がデフォルトアプリケーションサーバーの場合は、「J2EE アプリケーション」ノードのラベルが *server-instance(machinename:portnumber)* の形式になっています。そうならない場合は、次の手順に進みます。



2. 「インストールされているサーバー」ノードで、使用するサーバーインスタンスを探し、そのサーバーインスタンスをマウスの右ボタンでクリックして、「デフォルトとして設定」を選択します。

これで、サーバーが J2EE アプリケーションおよび Web 層アプリケーション用のデフォルトサーバーとして設定されます。

▼ Application Server インスタンスを手動で起動、停止する

1. アプリケーションサーバーのノードを右クリックし、コンテキストメニューから「状態」を選択します。

注 – 管理サーバーが動作されていない場合、このノードは表示されません。管理サーバーが動作していることを確認し、操作をやり直してください。

「Sun Java System Application Server インスタンスの状態」ダイアログが表示されます。



2. 「サーバーを起動」(または「サーバーを停止」) をクリックします。
サーバーがすでに動作中の場合は、ダイアログに「サーバーを停止」ボタンが表示されず、
サーバーが起動している場合は、「状態」行に「実行中」と表示されます。
3. 「閉じる」をクリックします。

第 10 章

IDE における Sun Java System Web Server インスタンスの利用

Java Studio Enterprise IDE および Sun Java System Web Server 6 2004Q1 Update 1, Service Pack 2 (オプションサーバーにある Web Server) を正しくインストールすると、Web Server が正しく構成されているか検証することができます。Java Studio Enterprise IDE には、Sun Java System Web Server プラグインが含まれています。この章では、このプラグインによって可能になる一般的な作業とともに、IDE からの Web Server インスタンスの使用シナリオについて説明します。

Sun Java System Access Manager および Sun Java System Portal Server は、Sun Java Studio Enterprise 7 のオプションサーバーからインストールできます。これら 2 つの製品は、基本的に Web コンテナ内で動作する Web アプリケーションです。Web コンテナとしては、Application Server または Web Server のどちらでも使用できます。デフォルトの Web コンテナは Application Server です。オプションサーバーのインストール中、Web コンテナとして Web Server を選択することができます。表 10-1 および表 10-2 は、生成される Web Server インスタンスをまとめています。

この章は、以下の節で構成されています。

- 87 ページの「適切な Web Server インスタンスの使用 (Microsoft Windows)」
- 91 ページの「適切な Web Server インスタンスの使用 (Solaris OS)」
- 94 ページの「その他の一般的な Web Server 作業」

適切な Web Server インスタンスの使用 (Microsoft Windows)

インストール中の選択によって異なりますが、Java Studio Enterprise IDE および Web Server をインストールすると、インストーラによって 1 つまたは複数の Web Server インスタンスが作成されます。表 10-1 は、考えられる選択のシナリオと作成されるインスタンスをまとめています。

表 10-1 インストール中に作成される Web Server インスタンス (Microsoft Windows)

シナリオ	Web Server をインストール	Access Manager をインストール	Portal Server をインストール	Web コンテナが Web Server の場合	作成されるインスタンス	インスタンス所有者
1	○	×	×	なし	https-admserv https-machinename.domainname	管理者
2	○	○	○	×	https-admserv https-machinename.domainname	管理者
3	○	○	○	○	https-admserv https-machinename.domainname = Access Manager および Portal Server 用の Web コンテナ	管理者

- シナリオ 1 では、Web Server の単独インストールを想定しています。
- シナリオ 2 は、Web Server、Access Manager、および Portal Server をインストールして、デフォルトの Web コンテナ (Application Server) を使用するという想定です。
- シナリオ 3 は、Web Server、Access Manager、および Portal Server をインストールして、Web コンテナとして Web Server を選択する想定です。

シナリオ 3 で Web Server をインストールした場合は、配備用に独立した Web Server インスタンスを作成、使用して、Access Manager や Portal Server のいずれかが誤って配備解除されるなどの問題を回避することができます。88 ページの「Web Server インスタンスを作成する (Microsoft Windows の場合)」の手順に従ってください。

インストールに使用された管理者アカウント以外が所有する Web Server インスタンスの作成方法については、88 ページの「Web Server インスタンスを作成する (Microsoft Windows の場合)」の手順に従ってください。

Microsoft Windows マシンでの Web Server インスタンスの技術的な詳細は、付録 C で説明しています。

▼ Web Server インスタンスを作成する (Microsoft Windows の場合)

この手順では、Web Server 管理コンソールを使用して、新しい Web Server インスタンスを作成します。

1. Web Server をインストールしたマシンで管理者 (administrator) としてログインします。
2. コマンド行から、Web Server 管理サーバーのインストールディレクトリに移動します。たとえばデフォルトのディレクトリを使用している場合は、次のようなコマンドを使用します。

```
cd \Sun\jstudio_04Q4\WebServer6_2004q1\https-admserv
```

3. Web Server 管理サーバープロセスを開始します。

```
startsvr.bat
```

「サービスは正常に開始されました。」というメッセージが表示されたら、次の手順に進みます。

4. Web ブラウザでデフォルトサーバーの URL を入力することによって、Web Server グラフィカルインタフェースにアクセスします。
この URL は `http://hostname.domainname:adminport` の形式です。たとえば `http://host1.example.com:8888` です。
以下の手順で正しい URL を探すことができます。
 - a. Web ブラウザで `java-studio-install-dir/Configuration_Data.html` ファイルを開きます。
 - b. 「Web Server 管理 URL」というエントリを探して、そのエントリのリンクをクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、ユーザー名とパスワードを入力します。
インストール中の「構成」ページで入力した値を使用してください。ユーザー名に使用した名前を思い出せない場合は、適切なインストールセッションの `Summary_Report.timestamp` を参照してください。このレポートの場所については、使用プラットフォームのインストールに関する章を参照してください。
ブラウザのウィンドウに Web Server Administration Server コンソールが表示されます。
6. 「Servers」タブで「Add Server」をクリックします。
ブラウザに「Add Server」フォームが表示されます。

7. 要求された値を入力します。

フィールド名	入力値の例	説明
Server Name	www.mozilla.com (または <i>machine-name.domain-name</i>)	このサーバーの完全限定ホスト名を指定します。
Server Port	8059	このサーバーに対する HTTP 要求を処理する未使用のポート番号を指定します。
Server Identifier	marketing_server	管理サーバーがこのサーバーインスタンスに使用するサーバー識別子 (名前) を指定します。サーバー識別子の先頭文字が数字であってはけません。ASCII 文字のみ使用できます。
Document Root	<i>/home/IDE-user-account-login</i>	サーバーの Web ドキュメントの場所へのディレクトリパスを指定します。

8. 「OK」をクリックします。

新しいインスタンスが作成されます。これで IDE で、このサーバーインスタンスをデフォルトの Web Server として設定できます。95 ページの「IDE でデフォルトの Web Server インスタンスを設定する」を参照してください。

適切な Web Server インスタンスの使用 (Solaris OS)

インストール中の選択によって異なりますが、Java Studio Enterprise IDE および Web Server をインストールすると、インストーラによって 1 つまたは複数の Web Server インスタンスが作成されます。表 10-1 は、考えられる選択のシナリオと作成されるインスタンスをまとめています。

表 10-2 インストール中に作成される Web Server インスタンス (Solaris OS)

シナリオ	Web Server をインストール	Access Manager をインストール	Portal Server をインストール	Web コンテナが Web Server の場合	作成されるインスタンス	インスタンス所有者	インストール中の root 以外の使用許可
1	○	×	×	なし	https-admserv https-machinename.domainname	root root	×
1a	○	×	×	なし	https-admserv https-machinename.domainname https-jstudio	root root インストー ル中に指定 された root 以外 のユーザー	○
2	○	○	○	×	https-admserv https-machinename.domainname	root root	×

表 10-2 インストール中に作成される Web Server インスタンス (Solaris OS) (続き)

シナリオ	Web Server をインストール	Access Manager をインストール	Portal Server をインストール	Web コンテナが Web Server の場合	作成されるインスタンス	インスタンス所有者	インストール中の root 以外の使用許可
2a	○	○	○	×	https-admserv https-machinename.domainname https-jstudio	root root インストー ル中に指定 された root 以外 のユーザー	○
3	○	○	○	○	https-admserv https-machinename.domainname	root root	×
3a	○	○	○	○	https-admserv https-machinename.domainname https-jstudio	root root インストー ル中に指定 された root 以外 のユーザー	○

Solaris OS マシンへのインストールでは、root 以外のユーザーによる Application Server および Web Server の使用を可能にすることができます。そのようにした場合、インストーラは 指定されたユーザーアカウントに属する 2 つ目の Web Server インスタンスを作成します。インストール中にこのオプションを選択しなかった場合は、92 ページの「Web Server インスタンスを作成する (Solaris OS)」 の手順に従って、標準ユーザー用の Web Server インスタンスを作成してください。

Solaris マシンでの Web Server インスタンスの技術的な詳細は、付録 D で説明しています。

▼ Web Server インスタンスを作成する (Solaris OS)

別のユーザー (通常は root 以外のユーザー) 用のインスタンスは、以下の手順でスーパーユーザーが作成します。この手順では、Web Server 管理コンソールを使用して、新しいインスタンスを作成します。

1. スーパーユーザーになります。
2. コマンド行から、Web Server 管理サーバーのインストールディレクトリに移動します。

```
# cd /opt/SUNWwbsvr/https-admserv
```

3. Web Server 管理サーバープロセスを開始します。

```
# ./start
```

「server started successfully」というメッセージが表示されたら、次の手順に進みません。

4. Web ブラウザでデフォルトサーバーの URL を入力することによって、Web Server グラフィカルインターフェイスにアクセスします。

この URL は `http://machinename.domainname:adminport` の形式です。たとえば `http://host1.example.com:8888` です。

以下の手順で正しい URL を探すことができます。

- a. Web ブラウザで `java-studio-install-dir/Configuration_Data.html` ファイルを開きます。
 - b. 「Web Server Admin URL」というエントリを探して、そのエントリのリンクをクリックします。
5. プロンプトが表示されたら、ユーザー名とパスワードを入力します。

インストール中の「構成」ページで入力した値を使用してください。行ったインストールセッションに関する `Summary_Report.timestamp` に User Name の情報があります。このレポートの場所については、使用プラットフォームのインストールに関する章を参照してください。

ブラウザのウィンドウに Web Server Administration Server コンソールが表示されます。

6. 「サーバー」タブで「サーバーを追加」をクリックします。

ブラウザに「サーバーを追加」フォームが表示されます。

7. 要求された値を入力します。

フィールド名	入力値の例	説明
Server Name	www.mozilla.com (または <i>machine-name.domain-name</i>)	このサーバーの完全限定ホスト名を指定します。
Server Port	1025 (Solaris OS) 必ず、1024 より大きい、使用されていないポート番号を使用します。	このサーバーに対する HTTP 要求を処理する未使用のポート番号を指定します。
Server Identifier	marketing-server	管理サーバーがこのサーバーインスタンスに使用するサーバー識別子 (名前) を指定します。サーバー識別子の先頭文字が数字であってははいけません。ASCII 文字のみ使用できます。
Server User	<i>IDE-user-account-login</i>	このサーバーインスタンスが属するユーザー名を指定します。IDE を実行するユーザーアカウントと同じである必要があります。
Document Root	<i>/home/IDE-user-account-login</i>	サーバーの Web ドキュメントの場所へのディレクトリパスを指定します。

8. 「OK」をクリックして、新しいインスタンスを作成します。

9. スーパーユーザー権限を終了します。

10. 指定したサーバー識別子を標準ユーザーに通知します。

標準ユーザーは、次の手順を使用して、IDE でこのサーバーインスタンスをデフォルト Web Server として設定することができます。

その他の一般的な Web Server 作業

ここで説明する手順を使用し、デフォルトの Web Server インスタンスを設定、確認したり、IDE から Web Server インスタンスを起動したりすることができます。IDE を使わずに Web Server を検証する方法については、第 13 章 (Microsoft Windows の場合) または第 14 章 (Solaris OS の場合) のいずれか適切な章を参照してください。

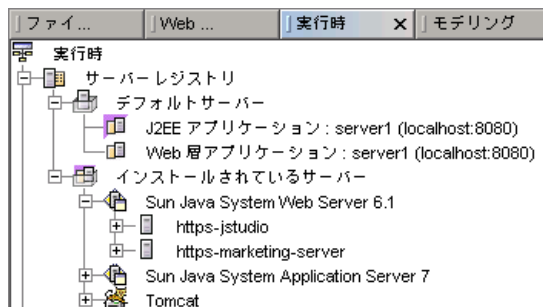
▼ IDE でデフォルトの Web Server インスタンスを設定する

注 – この手順は、Web Server インスタンスを作成したときに指定されたサーバーユーザー (標準ユーザー) が行います。

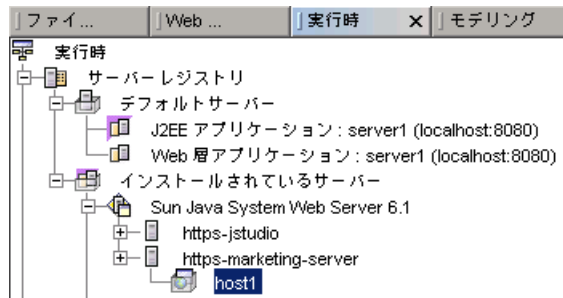
1. IDE の「実行時」ウィンドウで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。
2. 「Sun Java System Web Server 6.1」ノードを展開します。

サーバー識別子として指定された名前の Web Server インスタンスが表示されます。
例: https-marketing-server

(Solaris のみ) インストール中に root 以外のユーザー用の Web Server インスタンスを作成した場合、サーバーレジストリの内容は以下のようになります。



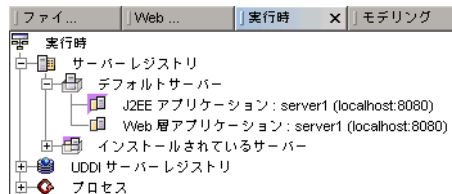
3. Sun Java System Web Server インスタンスのノードを展開して、仮想サーバーを表示します。
4. 仮想サーバーのノードを右クリックし、コンテキストメニューから「デフォルトとして設定」を選択します。
5. 「デフォルトサーバー」ノードを展開して、デフォルトとして「Web 層アプリケーション」ノードに新しいサーバーインスタンスが表示されていることを確認します。



▼ デフォルトの Web Server を確認する

1. IDE の「実行時」ウィンドウで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「デフォルトサーバー」サブノードを展開します。

「Web 層アプリケーション」ノードのラベルが `server-instance(machinename:portnumber)` の形式で、IDE から使用する Web Server インスタンスと同じ場合、デフォルトの Web Server は正しく設定されています。そうならない場合は、次の手順に進みます。



2. 「インストールされているサーバー」ノードで、Web Server インスタンスを探し、そのサーバーインスタンスをマウスの右クリックして、「デフォルトとして設定」を選択します。

これで、サーバーが Web 層アプリケーション用のデフォルトサーバーとして設定されます。

▼ Web Server インスタンスを起動または停止する

1. 「Sun Java System Web Server 6.1」ノードを右クリックし、コンテキストメニューから「サーバーを起動」または「サーバーを停止」を選択します。
2. Web Server コンソールに戻って、サーバーが正しく起動または停止したことを確認します。

Web Server の使用については、Sun Java System Web Server のマニュアルにさらに詳しい説明があります。

第11章

データベースの利用

この章では、Java™ DataBase Connectivity (JDBC™) ソフトウェアの構成方法を説明します。この章の内容の大部分は、IDE の例やチュートリアルで使用されている PointBase Server 4.2 Restricted Edition (以降「PointBase」) に関係しています。この章ではまた、IDE での他のデータベースの利用に関する全般的な情報も取り上げています。

PointBase は、Java Studio Enterprise のインストールしたときに、その一部としてデフォルトで提供されるデータベースです。PointBase は、SSun Java System Application Server Standard Edition 7 2004Q2 のインストールディレクトリにあります (例: `java-studio-install-dir\AppServer7\pointbase`)。PointBase のマニュアルは、`java-studio-install-dir\AppServer7\pointbase\docs` にあります。

このリリースの Java Studio Enterprise ソフトウェアでは、PointBase と IDE および Application Server との統合が強化されています。

この章で取り上げる内容は以下のとおりです。

- 97 ページの「PointBase 接続の設定」
- 101 ページの「他の JDBC 対応データベースの利用」

PointBase 接続の設定

エンタープライズアプリケーションは、JDBC API を使用してデータベースと対話します。システム内のビジネスオブジェクトがデータベースアクセスを共有できるよう、エンタープライズアプリケーションはデータベース接続をプールする必要があります。JDBC データソースによって、データベースに接続することができます。持続マネージャは、コンテナにインストールされているエンティティ Bean の持続性を管理するコンポーネントです。接続プール、JDBC データソース、JDBC 持続マネージャを接続リソースといいます。

Sun Java System Application Server とともにデータベースを利用するエンタープライズアプリケーションを配備、実行するには、Application Server 側の環境でデータベースの JDBC ドライバを有効にし、接続リソースを作成しておく必要があります。

Java Studio Enterprise 7 インストーラを使用して、IDE および Application Server をインストールすると、次のことが自動的に行われます。

- PointBase JDBC ドライバがインストールされて、Application Server に登録されます。構成手順の一環として接続リソースが作成されます。
- PointBase データベースに初めてアクセスすると、その接続の開始、確立が行われます。データベースアクセスを必要とする次のことを行うと、PointBase データベースサーバーが自動的に起動されます。
 - PointBase JDBC ドライバを使用して、IDE のデータベースエクスプローラからデータベースサーバーに接続する。
 - データベースエクスプローラにある接続されていない PointBase 接続からデータベースサーバーに接続する。
 - データベーススキーマを収集する。
 - CMP ウィザードからデータベースサーバーに接続する。
 - Web アプリケーションフレームワークのウィザードからデータベースに接続する。
- PointBase 接続プールが登録されている Application Server インスタンスに対して J2EE アプリケーションを実行する。

注 – デフォルトの Application Server インスタンスに対してアプリケーションを実行すると、そのアプリケーションが PointBase を利用しなくても、PointBase データベースサーバーが起動されることがあります。これは、デフォルトの Application Server インスタンスに、Application Server と IDE 統合のためのインストーラの構成プロセスの一環として PointBase 接続プールが定義されているためです。この接続プールリソースが存在すると、Application Server の自動起動中、IDE は Application Server インスタンスを起動する前に PointBase データベースサーバーを起動します。アプリケーションが PointBase データベースを使用することがなく、この状況での PointBase サーバーの起動をしない場合は、Application Server インスタンスから接続プールリソースを削除してください。

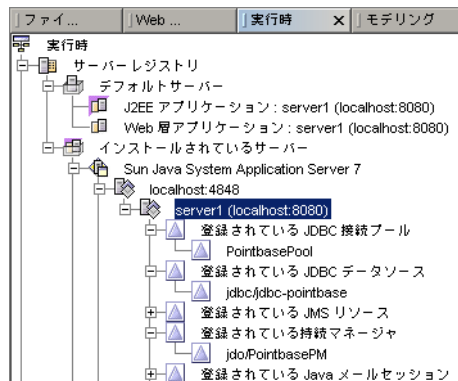
IDE のインストールとは別に Sun Java System Application Server をインストールした場合の IDE のサンプルの使用方法については、100 ページの「IDE で外部の PointBase を利用する」を参照してください。

▼ PointBase のリソース構成を確認する

1. IDE の「実行時」ウィンドウで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。
2. Sun Java System Application Server 7 サーバーのノードを展開し、さらにデフォルト管理サーバーのノード (localhost:4848) を展開します。
実際のポート番号は異なることがあります。
3. デフォルトの Application Server インスタンスのノード (MyServer (localhost:xxxx)) を展開します。
変数 xxxx は、Application Server インスタンスに割り当てられているポート番号です。
4. JDBC 接続プール、JDBC データソース、および持続マネージャの登録リソースを展開します。

IDE インストーラが Application Server 用の PointBase 接続リソースを構成できている場合は、次のノードが表示されます。

- 登録されている JDBC 接続プール : PointbasePool
- 登録されている JDBC データソース : jdbc/jdbc-pointbase
- 登録されている持続マネージャ : jdo/PointbasePM



▼ サンプル用に PointBase JDBC リソースを設定する

Application Server 環境で PointBase JDBC リソースを設定する必要がある場合は、次の手順を使用してください。

1. IDE の「実行時」ウィンドウで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。

2. 使用する Application Server インスタンスを探し出します。

このインスタンスのノードには、*app-server-name (app-server-host:app-server-port)* という形式のラベルが付いています (例: `server1 (localhost:8080)`)。

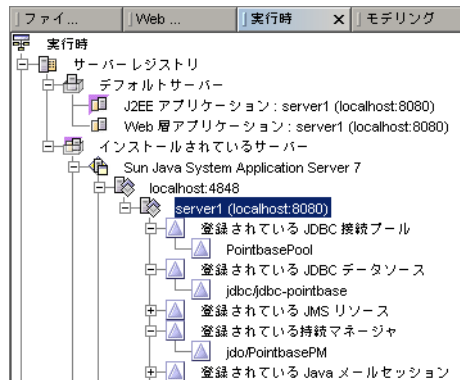
3. その Application Server インスタンスのノードをマウスの右クリックし、コンテキストメニューから「PointBase JDBC リソースを事前構成」を選択します。

砂時計の形をしたタイマーアイコンが表示されます。処理が完了すると、カーソルは通常のアイコンに戻ります。

4. 「登録されている JDBC 接続プール」、「登録されている JDBC データソース」、および「登録されている持続マネージャ」の登録リソースを展開します。

次のノードがあります。

- 登録されている JDBC 接続プール: PointbasePool
- 登録されている JDBC データソース: jdbc/jdbc-pointbase
- 登録されている持続マネージャ: jdo/PointbasePM



▼ IDE で外部の PointBase を利用する

IDE の外部に PointBase がインストールされている場合は、この手順に従って、外部にインストールされている PointBase に IDE を接続します。外部 PointBase へのアクセス権がない場合は、Java Studio Enterprise の例およびチュートリアルを使用する前に PointBase をインストールする必要があります。PointBase のインストール方法については、『Sun ONE Application Server 7 入門ガイド』を参照してください。

1. 「ツール」->「PointBase ネットワークサーバー」->「構成」を選択します。
2. 「ブラウズ」ボタンを使用して、PointBase のインストールディレクトリに移動します。
3. 必要に応じて別のポート番号を指定します。

4. 「了解」をクリックします。

sample.dbn と sample\$1.wal を上書きするか問い合わせが表示されたら、「いいえ」をクリックします。

他の JDBC 対応データベースの利用

Sun Java Studio Enterprise 7 2004Q4 ソフトウェアは、他のよく使われるデータベースドライバもインストール、登録します。このため、「データベースエクスプローラドライバ」ノードには、以下も表示されます。

- Oracle データベースドライバ
- Sybase データベースドライバ
- Microsoft SQL データベースドライバ
- IBM の DB2 データベースドライバ

これらのインストールされたデータベースドライバを IDE から使用する手順は、次のとおりです。

▼ Java Studio Enterprise によってインストールされたデータベースドライバを使用する

1. IDE の「実行時」ウィンドウで「データベース」ノードを展開します。
2. 「ドライバ」ノードを展開して、使用するドライバを選択します。
3. 選択したドライバを右クリックし、コンテキストメニューから「接続」を選択します。

「新しいデータベース接続」ダイアログが表示されます。「ドライバ」フィールドで正しいドライバが選択されていることを確認します。

4. 「データベース URL」フィールドに JDBC の URL を入力します。

一般に、この URL は jdbc: で始まり、その後にドライバの短縮名ともう 1 つコロンが付きます。URL の残りの部分は、使用するドライバの種類によって異なります。たとえば、ホストおよびポートの指定が必要になることがあります。データベースファイルの名前あるいは ODBC DSN で十分であることもあります。正しく指定できるよう、既存のドライバには、URL の適切な書式のテンプレートが用意されています。以下はその例です。

- IBM の DB2 - jdbc:sun:db2://servername:portnumber;databaseName=DATABASENAME
- Microsoft SQL Server - jdbc:sun:sqlserver://server_name:[portNumber]

- Oracle - jdbc:sun:oracle://server_name[:portNumber][;SID=DATABASENAME]
- Sybase - jdbc:sun:sybase://server_name[:portNumber]

角括弧内のパラメータは省略可能です。不明な点がある場合は、使用するドライバのマニュアルを参照してください。

5. データベース構成に必要な場合は、ユーザー名およびパスワードを入力します。
6. 「セッション中はパスワードを保存」チェックボックスを選択して、IDE にパスワードを記憶させます。

パスワードは、現在の IDE セッションの間のみ保存されます。IDE を再起動した場合は、パスワードを再入力する必要があります。この機能は、「実行時」ウィンドウの各接続データベースのプロパティで有効または無効にできます。
7. 「了解」をクリックして、データベースに IDE を接続します。

接続に成功すると、「ドライバ」と同じレベルに新しいノードが表示されます。接続されたデータベースのアイコンによって、接続が確立されたことが示されます。接続に失敗した場合は、接続が切断されていることを示すダイアログが表示されます。

▼ Java Studio Enterprise によってインストールされていないデータベースドライバを使用する

Java Studio Enterprise によってインストールされていないデータベースドライバを IDE から使用する場合は、以下の手順に従います。

1. IDE の「実行時」ウィンドウで「データベース」ノードを展開します。
2. 「ドライバ」ノードを右クリックし、コンテキストメニューから「ドライバを追加」を選択します。

「JDBC ドライバを追加」ダイアログが表示されます。
3. 「追加」ボタンをクリックして、ドライバの .jar または .zip ファイルが存在するディレクトリに移動し、.jar または .zip ファイルを追加します。

ドライバが複数の .jar または .zip ファイルを必要とする場合は、この手順を繰り返して、必要なすべてのファイルを追加します。
4. ドライバのドライバクラスを指定します。

ドライバのクラス名については、ドライバのマニュアルを参照してください。
5. インストールしたドライバの名前を指定し、「了解」をクリックします。

「ドライバ」ノードに、追加したドライバを表すノードが表示されます。

第12章

インストールしたソフトウェアのアップグレード

この章は、以下の節で構成されています。

- 103 ページの「アップデートセンターを利用したモジュールの更新」
- 104 ページの「ライセンスマネージャツールの使用法」

アップデートセンターを利用したモジュールの更新

システムに IDE をインストールすると、アップデートセンターを利用して、新しい IDE モジュールを追加したり、既存の IDE モジュールを更新したりできます。

▼ IDE のモジュールを更新する

1. メインメニューから「ツール」>「アップデートセンター」を選択します。
アップデートセンターウィザードが表示されます。
2. アップデートセンターとして「Sun Java Studio Enterprise アップデートセンター」を選択します
3. プロキシ構成の設定をしていない場合は、「プロキシ構成」ボタンをクリックします。
「プロキシ構成」ダイアログが表示されます。必要に応じて値を変更し、「了解」をクリックして、アップデートセンターウィザードに戻ります。

4. 「次へ」をクリックします。
アップデートセンターの「ログイン」ページが表示されます。
5. Java Studio Enterprise アップデートセンターのログイン名とパスワードを入力して、「次へ」をクリックします。
アップデートセンターが、使用可能なモジュールを表示します。

注 – アップデートセンターのログイン名およびパスワードは、インストール中にサーバーを構成するのに使用したものと同じではありません。

6. モジュールを個々に選択するか、「>>」ボタンをクリックすることによってすべてを選択します。
「<」ボタンを使用すると、使用しているプラットフォームに不適切なバージョンを除外することができます。
7. 「次へ」をクリックして、アップデートセンターのインストール手順に従います。
選択されたモジュールがインストールされ、IDE が自動的に再起動します。

ライセンスマネージャツールの使用法

Java Studio Enterprise IDE のライセンスマネージャツールを使用して、既存のライセンスを表示したり、試用ライセンスを正規ライセンスにアップグレードしたりすることができます。90 日間試用ライセンスのシリアル番号を使用して IDE をインストールした場合、その有効期限が近づくと、警告メッセージが表示されます。90 日間の使用期間中いつでも、製品を購入して、正規ライセンスのシリアル番号を入手することができます。

次の手順でライセンスマネージャを使用することによってライセンス情報を見たり、正規ライセンスにアップグレードしたりすることができます。

▼ ライセンスのステータスを表示する

試用期間中の場合は、ライセンスマネージャツールを試用することによって残りの日数を見ることができます。

1. IDE のメインウィンドウから「ツール」>「ライセンスマネージャ」を選択します。
ライセンスマネージャが表示されます。

2. 「シリアル番号のレポート」タブをクリックします。

「シリアル番号のレポート」ページが表示されます。これで、シリアル番号情報や、試用または正規ライセンスの別、有効期限までの残りの日数を確認することができます。

▼ 正規ライセンスにアップグレードする

試用期間中いつでも、次の手順で正規ライセンスにアップグレードすることができます。90 日間の試用期間が経過した後で IDE を起動しようとする時、ここで説明する「シリアル番号のインストール」ページが表示され、新しい正規シリアル番号を入力することができます。製品を購入すると、正規シリアル番号を受け取ることができます。

注 – 正規シリアル番号は、IDE をインストールしたときに使用したのと同じユーザー権限を使用してインストールする必要があります。たとえば Solaris の場合、インストールは root ユーザーで行う必要があります、このため、root ユーザーで IDE を実行して、ライセンスをアップグレードする必要があります。

1. スーパーユーザーになるか、管理者権限を使用してシステムにログインします。
IDE を自分でインストールしていない場合は、システム管理者に問い合わせてください。
2. IDE を起動します。
3. メインメニューから「ツール」>「ライセンスマネージャ」を選択します。
ライセンスマネージャが表示されます。
4. 「シリアル番号のインストール」タブをクリックします。
「シリアル番号のインストール」ページが表示されます。
5. テキストボックスに正規シリアル番号を入力して、「インストール」をクリックします。

▼ IDE を使わずにライセンスのステータスを表示する

Java Studio Enterprise IDE をインストールしていない場合は、スタンドアロンのライセンスマネージャツールを使用してソフトウェアライセンスのステータスを見ることができます。

1. *java-studio-install-dir/bin* ディレクトリに移動します。

- (Microsoft Windows の場合) デフォルトのインストールディレクトリを使用した場合は、`C:\Sun\jstudio_04Q4\bin` に移動します。
- (Solaris OS の場合) デフォルトのインストールディレクトリを使用した場合は、次のコマンドを使用します。

```
% cd /opt/SUNWjstudio/bin
```

2. ライセンスマネージャツールを起動します。

- (Microsoft Windows の場合) `licManager.bat` ファイルをダブルクリックします。
- (Solaris OS の場合) 次のコマンドを使用します。

```
# ./licManager
```

3. 試用ライセンスを正規ライセンスにアップグレードする場合は、その操作をします。

このツールを使用して、試用ライセンスを正規ライセンスにアップグレードすることもできます。このためには、管理者またはスーパーユーザー権限が必要です。この手順の説明に従ってライセンスマネージャを起動した後 105 ページの「正規ライセンスにアップグレードする」で説明している手順 4 および手順 5 を行ってください。

第13章

Java Studio Enterprise サーバーの利用 (Microsoft Windows)

インストールを終えると、この章の手順を使用して、Java Studio Enterprise サーバーが Microsoft Windows プラットフォームに正しくインストール、構成されたか検証することができます。この章で取り上げる内容は以下のとおりです。

- 107 ページの「検証の概要」
- 108 ページの「インストールされたサーバーの検証」
- 118 ページの「その他のマニュアルの入手方法」
- 118 ページの「サーバー検証中の障害追跡」

検証の概要

この節では、一般的な検証手順の概要および構成情報の確認方法を簡単に説明します。

コンポーネント製品サーバーを起動、停止するには、管理者権限が必要です。大部分の Java Studio Enterprise サーバーの起動は、基本的に次の 3 つのステップに分かれます。

1. 管理サーバープロセスを開始する。
2. 管理ツールにログインする。
サーバーの多くは、管理ツールに対するブラウザインタフェースがあります。
3. 管理インタフェースを使用してサーバーインスタンスを起動する。

サーバーの多くは、コマンド行インタフェースもあります。管理に関する詳細は、コンポーネント製品のマニュアルを参照してください。

Sun Java System Application Server Standard Edition 7 2004Q2 および Sun Java System Web Server 6.1 2004Q2 SP2 は、それぞれのプラグインを使用し、Java Studio Enterprise IDE から起動、停止することもできます。

表 13-1 は、インストールされたサーバーごとの検証手順をまとめています。

表 13-1 Java Studio Enterprise サーバーの検証手順 (Windows)

作業	Windows の場合
Application Server の検証	110 ページの「Application Server を検証する」
Web Server の検証	111 ページの「Web Server を検証する」
Access Manager の検証	114 ページの「Access Manager (旧製品名「Identity Server」) を検証する」
Portal Server の検証	116 ページの「Portal Server を検証する」

構成情報の確認

サーバーの検証を行うには、インストールされたサーバーのポート番号やインスタンス名、その他の構成情報を知っている必要があります。各サーバーの構成情報は、次の方法で確認することができます。

- Web ブラウザで構成情報を表示する。Configuration_Data.html というファイルが、`java-studio-install-dir` にあります。
- インストーラによって作成された「概要レポート」を参照する。
 - レポートは、環境変数 `%TEMP%` で指定されたディレクトリに保存されます。たとえば `C:\Documents and Settings\Administrator\Local Settings\Temp\Summary_Report.timestamp` です。

インストールされたサーバーの検証

Microsoft Windows システムの場合は、「スタート」メニューまたはコマンド行からサーバーを起動することができます。コマンド行からの方法については、付録 C を参照してください。この節では、「スタート」メニューの項目を使用してサーバーを起動、停止する方法を説明します。

インストールされているサーバーを検証する最も簡単な方法は、すべてのサーバーを起動する、「スタート」メニューのオプションを使用して、サーバーごとに管理ツールにアクセスできることを確認する方法です。以降の手順は、管理権限を持つユーザーとしてログインしていることが前提になります。

▼ すべてのサーバーを起動して検証する

1. 「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」->「サーバーを起動」->「すべてのサーバー」を選択します。
これで、インストールされたすべてのサーバーが正しい順序で起動されます。
2. (省略可能) 「コンピュータの管理」ダイアログにアクセスし、以下の手順でサーバーが正しく起動されていることを確認します。
 - a. 「コンピュータの管理」ダイアログを開きます。
 - (Microsoft Windows 2000 Pro の場合) 「マイコンピュータ」アイコンを右クリックし、コンテキストメニューから「管理」を選択します。
 - (Microsoft Windows XP Pro の場合) 「スタート」を選択して、「マイコンピュータ」を右クリックし、コンテキストメニューから「管理」をクリックします。
 - b. 「サービスとアプリケーション」をダブルクリックします。
 - c. 「サービス」をダブルクリックします。
 - d. 次の Java Studio Enterprise サーバーのエントリが見える位置まで、サービスの一覧を下方向にスクロールします。各サーバーエントリの「状態」列に「開始」という値が表示されていることを確認します。
 - Sun App Server 7 (domain1:server1)
 - Sun App Server 7 (jstudio-domain:jstudio-server)
 - Sun App Server 7 Admin Server (domain1:admin-server)
 - Sun App Server 7 Admin Server (jstudio-domain:admin-server)
 - Sun ONE Administration Server 5.2
 - Sun ONE Directory Server 5.2 (*machinename*)
 - Sun ONE Web Server 6.1 (*https-machinename.domainname*)
 - Sun ONE Web Server 6.1 Administration Server
3. 以下の手順でサーバーの管理コンソールにアクセスします。
 - a. Application Server - 110 ページの「Application Server を検証する」の手順 2 ~ 3
 - b. Web Server - 111 ページの「Web Server を検証する」の手順 2 ~ 3
 - c. Access Manager - 114 ページの「Access Manager (旧製品名「Identity Server」) を検証する」の手順
 - d. Portal Server - 116 ページの「Portal Server を検証する」の手順
 - e. Directory Server - 120 ページの「インストールされた Directory Server を検証する」の手順 2 ~ 5

▼ Application Server を検証する

1. 「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」->「サーバーを起動」->「Application Server」を選択します。

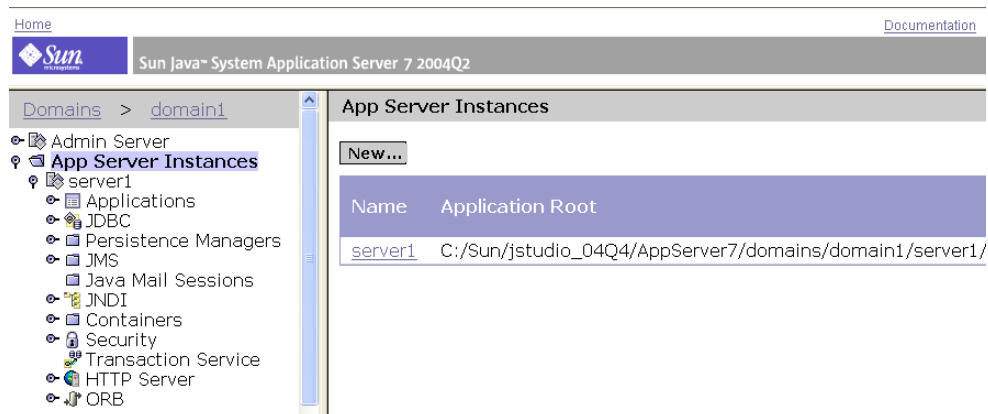
これで、Application Server の管理プロセスとデフォルトインスタンスが起動します。

2. 「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」->「サーバー管理」->「Application Server」を選択します。

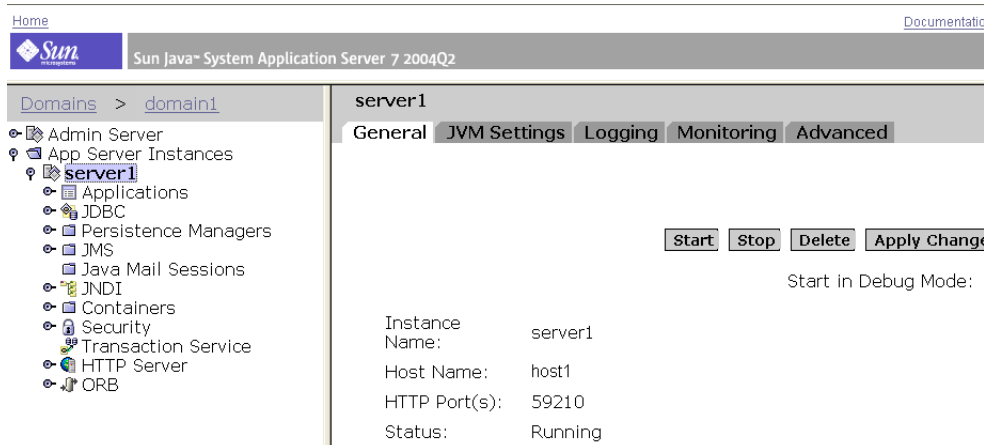
これで、Application Server の管理のログインプロンプトが表示されます。

3. ユーザー名およびパスワードを入力して、「OK」をクリックします。

インストール中に指定した値を使用します。Application Server コンソールが表示されます。



4. 左欄で「server1」ノードをクリックして、サーバーインスタンスの状態を確認します。

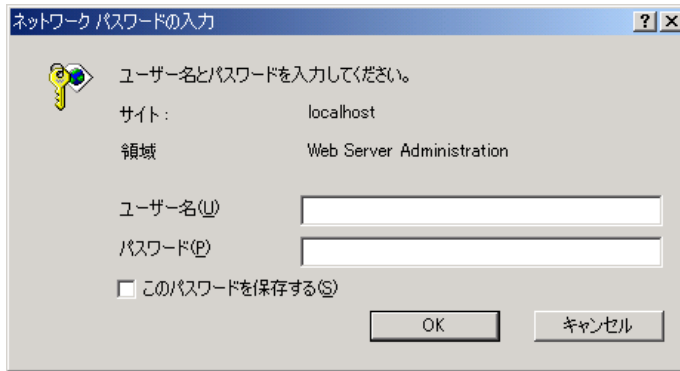


注 – IDE を使わずに「スタート」メニューから Application Server を起動すると、Java Studio Enterprise インストーラによって作成されたすべての Application Server インスタンスが起動されます。IDE を使用してサーバーを起動すると、特定のインスタンスを起動することができます。

▼ Web Server を検証する

Web Server は、「スタート」メニューから起動することも、Java Studio Enterprise IDE から起動することもできます。この手順では、「スタート」メニューを使用しません。

1. 「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」->「サーバーを起動」->「Web Server」を選択します。
これで、Web Server Administration サービスが開始されます。
2. 「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」->「サーバー管理」->「Web Server」を選択します。
これで、Web Server の管理のログインプロンプトが表示されます。



次のエラーが表示された場合は、その後で説明している対策を構じます。

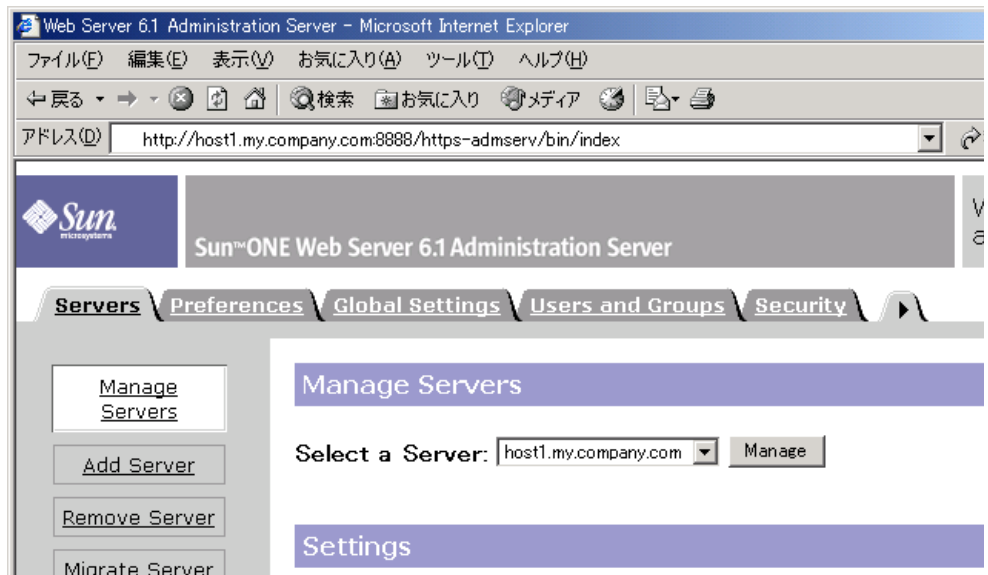
```
The connection was refused when attempting to contact
servername:portnumber
```

- Web Server 管理サーバーが実際に起動していることを確認します。このためには Microsoft Windows サービスで「Sun One Web Server 6.1 Administration Server」の状態が「開始」になっていることを確認します。必要に応じてコマンド行からこのサービスを開始する方法の詳細は、付録 C を参照してください。
- プロキシ設定が、直接接続を使用するか、Web Server ドメイン名にプロキシサーバーを使わない設定になっていることを確認します。

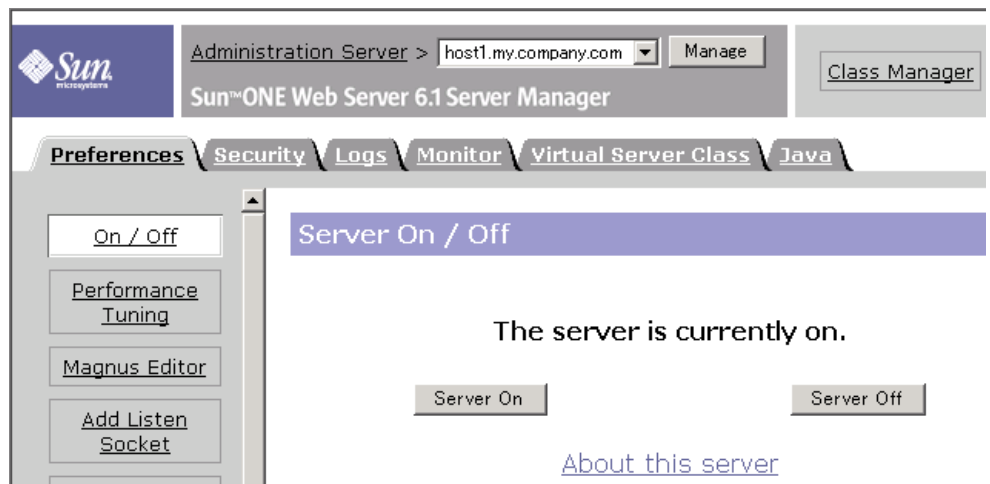
参考 – プロキシサーバーが Web Server を検出できなかったことを示すエラーが表示された場合は、プロキシの設定に誤りがあることが原因である可能性があります。Web ブラウザのプロキシ設定を調べて、インストールされている Web Server に使用されているドメインが「プロキシなしの状態」に設定されていることを確認してください。プロキシ設定を編集する方法については、ブラウザのマニュアルを参照してください。

3. ユーザー名およびパスワードを入力して、「OK」をクリックします。

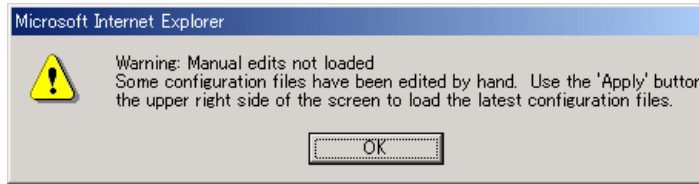
インストール中の「構成」ページで入力した値を使用します。ブラウザのウィンドウに Web Server コンソールが表示されます。



4. サーバーインスタンスを選択して「Manage」をクリックします。
Web Server Manager によってサーバーインスタンスが表示されます。



次の警告ダイアログが表示された場合は、その後で説明している対策をとります。



- 「OK」をクリックし、指示されている「Apply」ボタンを使用して変更を適用します。
- 5. サーバーインスタンスが無効の場合は「Server On」をクリックすることによってサーバーインスタンスが動作していることを確認します。

▼ Access Manager (旧製品名「Identity Server」) を検証する

Access Manager Admin コンソールを使用するには、Directory Server と Web コンテナインスタンス、管理サーバーが動作している必要があります。デフォルトの Web コンテナは Application Server です。「スタート」メニューからすべてのサーバーを起動した場合、この作業はすでに行われています。

1. *java-studio-install-dir* に移動し、Web ブラウザで *Configuration_Data.html* ファイルを開きます。
このファイルには、インストールされている各サーバーランタイムに割り当てられている URL が含まれています。
2. このレポートで Sun Java System Access Manager 6.1 に関するセクションを探します。
エントリを見て、「Access Manager コンソール URL」という行を探します。これは、`http://machinename.domainname:port-number/amconsole` の形式のライブハイパーリンクになっています。
3. このリンクをクリックします。
ブラウザのウィンドウに Access Manager 管理コンソールが表示されます。



Sun™ ONE Identity Server

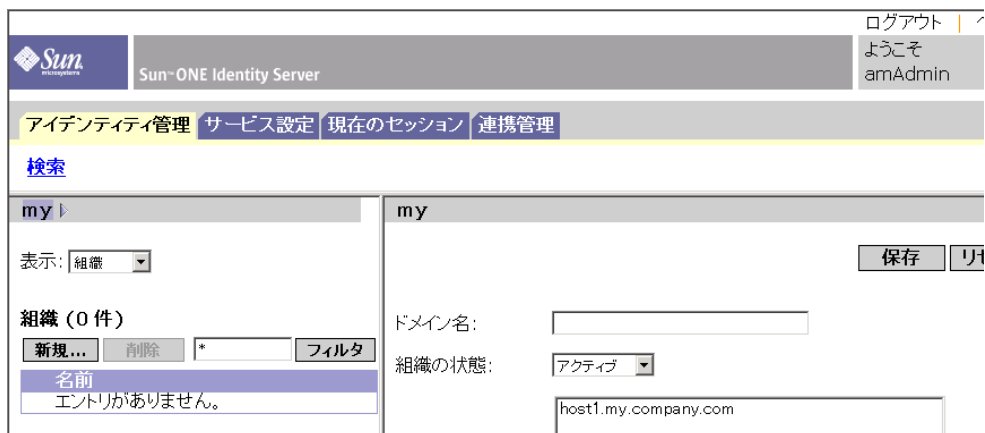
このサーバーは LDAP 認証を使用しています

ユーザー名:

パスワード:

4. ユーザー名およびパスワードを入力して、「ログイン」をクリックします。
ブラウザのウィンドウに Access Manager のコンソールが表示されます。

注 - 「ユーザー名」には、`amadmin` を使用します。「パスワード」には、インストール中に指定した値を使用します。



Access Manager の使用

Access Manager は、バインドユーザーとして `amldapuser` を使用して、認証中にディレクトリでユーザーを検索します。デフォルトでは、このユーザーにはディレクトリに対する読み取りアクセス権があります。このユーザーのバインドパスワードは、インストール中に使用された管理者パスワードに「1」を付加することによってインストーラによって事前に設定されます。たとえば、インストーラの「構成」ページで管理者パスワードとして `admin123` が入力された場合、割り当てられる `amldapuser` パスワードは `admin1231` になります。

▼ Portal Server を検証する

Directory Server、Web コンテナ、および Access Manager を検証する手順に従って検証を正常終了したら、次の追加手順を行います。

1. Access Manager コンソールからログアウトし、新しいブラウザインスタンスを起動します。
2. Web ブラウザで `java-studio-install-dir\Configuration_Data.html` ファイルを開きます。
このファイルには、インストールされている各サーバーランタイムに割り当てられている URL が含まれています。
3. このレポートで Sun Java System Portal Server 6 2004Q2 に関するセクションを探します。

4. エントリから、「Portal Server コンソール URL」という行を探します。これは、`http://webcontainerhost.domainname:port-number/portal` の形式のライブハイパーリンクになっています。

たとえば、Web コンテナが Application Server で、ポート番号のデフォルト値を使用している場合、この URL は `http://host1.my.company.com:8080/portal` のようになります。

5. このリンクをクリックします。

ブラウザのウィンドウに Portal Server デスクトップが表示されます。Web コンテナインスタンスへの Portal Server の配備が成功していると、上記の例のようなデスクトップが表示されます。

▼ すべてのサーバーを停止する

- 「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」->「サーバーを停止」->「すべてのサーバー」を選択します。

その他のマニュアルの入手方法

docs.sun.com からマニュアルを入手することができます。以下の表に、入手可能なマニュアルへのリンクの一部を示します。

表 13-2 サーバーランタイムのマニュアルへのリンク (Windows 版)

コンポーネント製品の サーバーランタイム版	リンク
Sun Java System Application Server Standard Edition 7 2004Q2	http://docs.sun.com/db/coll/ ApplicationServer7_04q2_ja?l=ja
Sun Java System Web Server 6.1 2004Q2 SP2	http://docs.sun.com/db/coll/S1_websvr61sp2_ja?l=ja
Sun Java System Message Queue 3.5 SP 1	http://docs.sun.com/db/coll/MessageQueue_35_sp1_ja?l=ja
Sun Java System Directory Server 5 2004Q2	http://docs.sun.com/db/coll/ S1_DirectoryServer_04q2_ja?l=ja
Sun Java System Access Manager 6.1	http://docs.sun.com/db/coll/IdentityServer_04q2_ja?l=ja
Sun Java System Portal Server 6 2004Q2	http://docs.sun.com/db/coll/PortalServer_04q2_ja?l=ja
Sun Java System Identity Server Policy Agent 2.1 for Sun Java System Application Server 7	http://docs.sun.com/db/coll/S1_IdServPolicyAgent_21

サーバー検証中の障害追跡

Java Studio Enterprise サーバーには特有の依存関係があり、適切な順序で起動する必要があります。Application Server または Web Server だけを使用する場合、起動順序要件はありません。サーバーランタイムを手動で起動する場合は、適切な起動順序に従ってください。Windows の「スタート」メニューから実行するスクリプトは、サーバー間の依存関係に自動的に対処します。

Access Manager および Portal Server を使用する場合は、起動順序が重要になります。Access Manager および Portal Server は、Application Server (デフォルト) または Web Server のいずれかで動作する Web アプリケーションとして配備されます。

(サーバーの選択は、インストーラの「製品の選択」ページで可能。22 ページの「コンテナの選択」を参照)。また、Access Manager および Portal Server は、Directory Server にも依存します。このため、Access Manager または Portal Server のどちらにアクセスする場合でも、事前に Directory Server と適切な Web コンテナの両方を起動しておく必要があります。サーバーの停止は、起動と逆の順序で行います。

注 – `java-studio-install-dir\bin` にある `startservers.bat` というスクリプトは、正しい順序で自動的にすべてのサーバーを起動します。このスクリプトは、コマンド行から実行することも、Windows の「スタート」メニューから実行することもできます。

Access Manager および Portal Server の管理コンソールを正しく起動できない場合は、次のことを確認してください。

- Web ブラウザで正しくプロキシが設定されている (119 ページの「Web ブラウザのプロキシ設定を確認する」の手順を参照)。
- サーバーが正しい順序で起動されている (119 ページの「正しい順序でサーバーを起動する」の手順を参照)。
- Directory Server の接続 (120 ページの「インストールされた Directory Server を検証する」の手順を参照)。

▼ Web ブラウザのプロキシ設定を確認する

Access Manager の管理コンソールへのアクセス、あるいは Portal Server Desktop の表示で「Page Not Found」エラーが表示された場合は、Web ブラウザのプロキシ設定を調べてください。インストールされているサーバーにアクセスする場合、Web ブラウザがプロキシサーバーを使用して URL を解決するように設定されてはいけません。たとえば Mozilla1.4 の場合は、次の手順でプロキシ設定を変更します。

1. Web ブラウザのウィンドウで「編集」>「設定」を選択します。
2. 「詳細」ノードを展開して、「プロキシ」を選択します。
「プロキシ」ダイアログが表示されます。プロキシサーバーを使用している場合は、「手でプロキシを設定する」オプションを選択します。
3. 「プロキシなし」というテキストボックスに自分のサーバードメインが含まれていることを確認します。

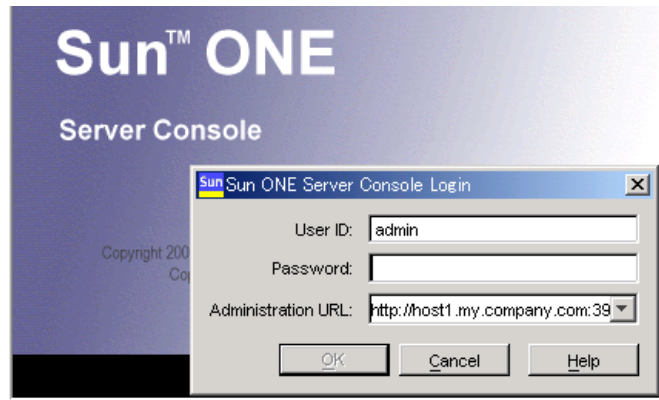
▼ 正しい順序でサーバーを起動する

1. Directory Server を起動します。
管理サーバーとサーバーインスタンスの両方を起動します。

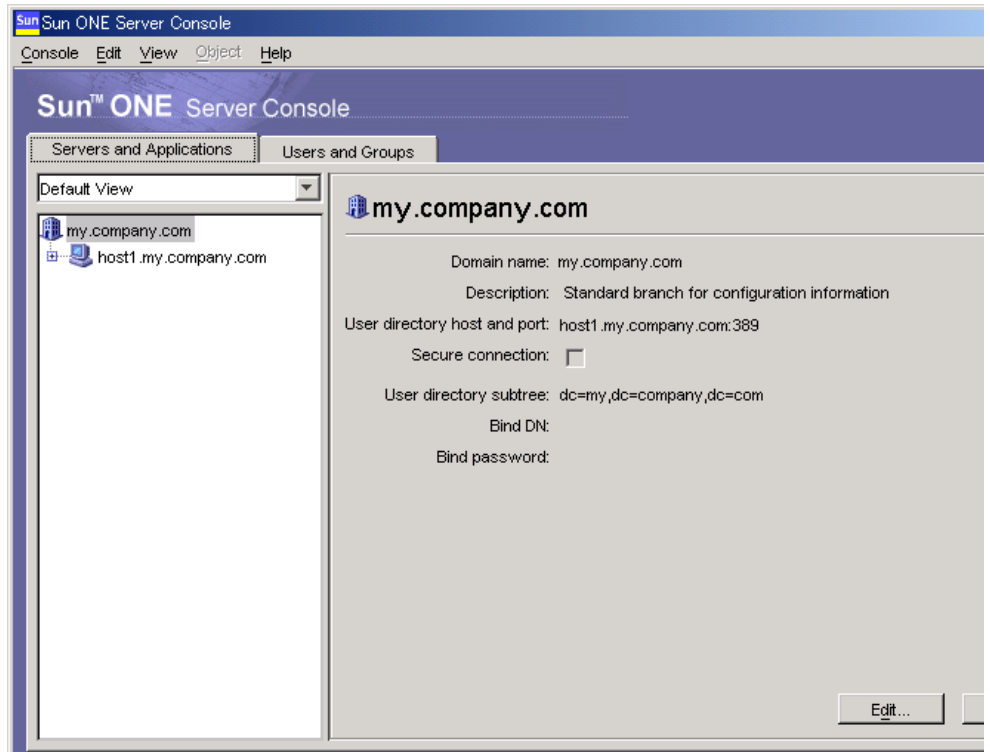
2. Web コンテナとして Application Server (デフォルト) または Web Server のいずれかを起動します。
管理サーバーとサーバーインスタンスの両方を起動します。
3. Access Manager または Portal Server Desktop へのアクセスを試みます。

▼ インストールされた Directory Server を検証する

1. 「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」->「サーバーを起動」->「Directory Server」を選択します。
これで、Directory Server の管理プロセスと Directory Server のインスタンスが起動します。
2. 「スタート」->「プログラム」->「Sun Microsystems」->「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」->「サーバー管理」->「Directory Server」を選択します。
「Server Console Login」ダイアログが表示されます。User ID および Administration URL として、インストールと構成中に使用された値が表示されます。

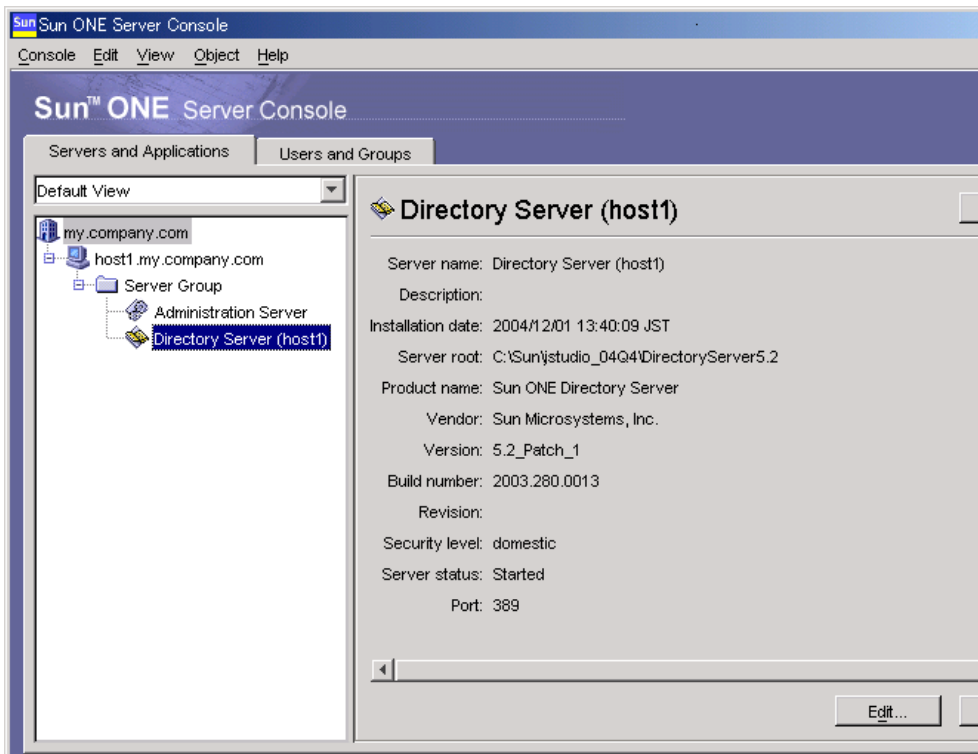


3. パスワードを入力して、「了解」をクリックします。
インストール中に「構成」ページで使用したパスワードを入力します。Server コンソールが表示されます。

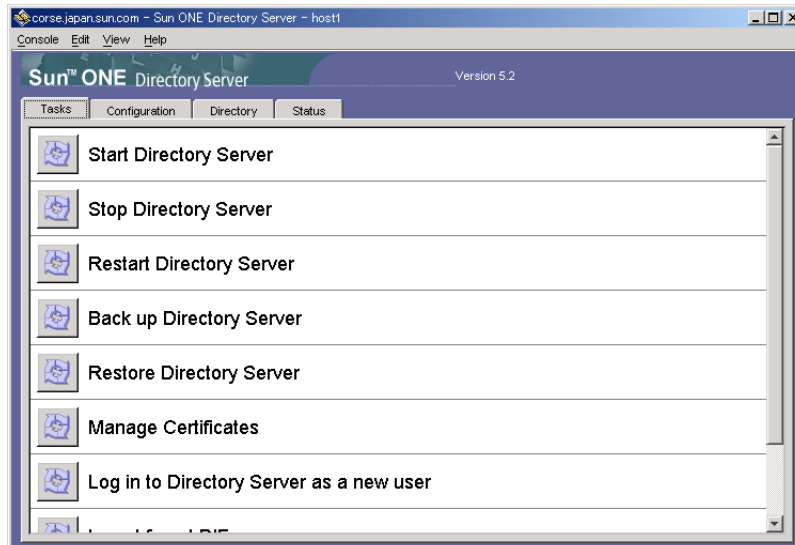


4. 「サーバーとアプリケーション」タブでサーバーホストのノードを展開し、さらに「Server Group」ノードを展開します。

Administration Server のエントリ 1 つと Directory Server (*machinename*) の形式のサーバーのエントリ 1 つが現れます。



5. 「Directory Server」ノードをダブルクリックします。
サーバーインスタンスの Sun ONE Directory Server コンソールが表示されます。
このコンソールから、管理操作を行うことができます。



よくあるエラーの診断

この節では、よくあるエラーの一部をまとめています。

1. Web ブラウザから Access Manager コンソールにアクセスしようとする、次のエラーになる。

```
Server Error
This server has encountered an internal error which prevents it
from fulfilling your request.The most likely cause is a
misconfiguration.Please ask the administrator to look for messages
in the server's error log.
```

考えられる原因：Access Manager は、Directory Server や Application Server などの他の Java Studio Enterprise サーバーに依存しています。サーバーが一部動作していない可能性があります。

対策：正しい順序でサーバーを起動してください。詳細は、119 ページの「正しい順序でサーバーを起動する」を参照してください。

2. すべてのサーバーをインストールした後、`http://localhost/amserver` の形式の URL を使って `amserver` にアクセスしようとする、 「Page Not Found」エラーになる。

考えられる原因：プロキシサーバーの設定に誤りがある可能性があります。プロキシサーバーが設定されている場合、Access Manager はそのプロキシサーバーを使用して URL を解決しようとします。

対策：Web ブラウザのプロキシ設定を直接接続またはプロキシサーバーを使わない設定にしてください。

3. 「スタート」メニューから **Access Manager** を起動しようとする、コンソールウィンドウに次のエラーメッセージが表示される。

```
C:\Sun\jstudio\IS6.1\bin>C:\Sun\jstudio\DirectoryServer5.2\slapd-localhost\start -slapd.bat
C:\Sun\jstudio\WebServer6.1\https-localhost.my.company.com\startsvr.bat
C:\Sun\jstudio\IS6.1\bin>net start slapd-localhost
The requested service has already been started.
More help is available by typing NET HELPMSG 2182
C:\Sun\jstudio\IS6.1\bin>
```

考えられる原因：Directory Server がすでに起動していて、再起動することができません。

対策：このメッセージは無視してかまいません。Directory Server および Web Server の両方がすでに動作していますから、Access Manager にアクセスできます。

4. Java Studio Enterprise をインストールすると Access Manager のインストールまたは構成に失敗する。

考えられる原因：システムの DNS サフィックスの設定が正しくない可能性があります。

対策：149 ページの「DNS サフィックスの確認」を参照してください。

5. Portal Server デスクトップにアクセスしようとする、ブラウザのウィンドウに次のエラーが表示される。

```
デスクトップに重大なエラーが発生しました。原因は、サーバーの設定不良である可能性があります。
この問題を管理者に報告してください。
考えられる原因：
デスクトップにアクセスする権限がない
```

考えられる原因：Portal Server デスクトップにアクセスする前に Access Manager コンソールからログアウトしていません。

対策：Access Manager コンソールからログアウトするか、新しいブラウザインスタンスを起動してから、操作をやり直してください。

第14章

Java Studio Enterprise サーバーの 使用方法 (Solaris OS)

インストールを終えると、この章の手順を使用して、Java Studio Enterprise サーバーが正しくインストールされて、正しく構成されたか検証することができます。この章で取り上げる内容は以下のとおりです。

- 125 ページの「検証の概要」
- 126 ページの「インストールされたサーバーの検証」
- 134 ページの「サーバーの停止」
- 137 ページの「その他のマニュアルの入手方法」
- 137 ページの「サーバー検証中の障害追跡」

検証の概要

この節では、一般的な検証手順、サーバー起動スクリプトの使用方法、構成情報の確認方法を簡単に説明します。

root 所有のコンポーネント製品サーバーを起動、停止するには、root 権限が必要です。Application Server または Web Server の root 以外のインスタンスを作成した場合は、インストール中に指定した root 以外のユーザーアカウントでログインして、それらインスタンスを起動、停止することができます。

参考 – 適切なユーザー名およびパスワードを知っている限り、これらのブラウザインタフェースには、root 以外のユーザーでアクセスすることができます。

大部分の Java Studio Enterprise サーバーの起動は、基本的に次の3つのステップに分かれます。

1. 管理サーバープロセスを開始する。

2. 管理ツールにログインする。

サーバーの多くは、管理ツールに対するブラウザインタフェースがあります。

3. 管理インタフェースを使用してサーバーインスタンスを起動する。

サーバーの多くは、コマンド行インタフェースもあります。詳細は、コンポーネント製品のマニュアルを参照してください。

Sun Java System Application Server Standard Edition 7 2004Q2 おおび Sun Java System Web Server 6.1 2004Q2 SP2 は、それぞれのプラグインを使用し、Java Studio Enterprise IDE から起動、停止することもできます。

構成情報の確認

サーバーの検証を行うには、インストールされたサーバーのポート番号やインスタンス名、その他の構成情報が必要です。各サーバーの構成情報は、次の方法で確認することができます。

- Web ブラウザで構成情報を表示する。Configuration_Data.html というファイルが、`java-studio-install-dir` にあります。
- インストーラによって作成された「概要レポート」を参照する。このレポートは、`/var/sadm/install/logs/SystemCheck_Report.timestamp` に保存されています。

参考 – インストールされているサーバーの管理コンソールにアクセスする最も簡単な方法は、Configuration_Data.html ファイルに含まれているライブリンクを使用する方法です。この方法は、この後の手順で説明します。

インストールされたサーバーの検証

すべてのサーバーを起動する正確な手順は、インストールされているサーバーと選択されたインストールオプションによって異なります。root でログインして一度サーバー起動スクリプトを実行し、再度、通常の root 以外のアカウントログインでログインしてスクリプトを実行しなければならないことがあります。このオプションと生成されるサーバーインスタンスについては、37 ページの「root 以外のユーザーによる製品の使用」を参照してください。

注 – root 所有のサーバーを起動、停止するには、スーパーユーザー権限が必要です。インストール中に Application Server および Web Server の root 以外のインスタンスを作成した場合は、root 以外のインスタンスの起動、停止用のスクリプトの実行などの操作を root 以外で行うことができます。

表 14-1 は、インストールされたサーバーの検証手順をまとめています。

表 14-1 Java Studio Enterprise サーバーの検証手順 (Solaris OS)

作業	手順
root 所有のサーバーの起動	127 ページの「root 所有のサーバーを起動する」
root 以外の所有のサーバーの起動	128 ページの「root 以外の所有のサーバーを起動する」
Application Server の検証	129 ページの「Application Server 管理コンソールにアクセスする」
Web Server の検証	130 ページの「Web Server 管理コンソールにアクセスする」
Access Manager の検証	131 ページの「Access Manager 管理コンソールを開く」
Portal Server の検証	132 ページの「Portal Server デスクトップを表示する」
障害追跡	137 ページの「サーバー検証中の障害追跡」

▼ root 所有のサーバーを起動する

1. root でログインします
2. サーバー起動スクリプトが含まれているディレクトリに移動します。たとえば、デフォルトのインストールディレクトリを使用した場合は、以下のように入力します。

```
# cd /opt/SUNWjstudio04q4/bin
```

3. スクリプトを実行します。

```
# ./startservers
```

すべてのサーバーランタイムをインストールしていた場合、出力は次のようになります。

```
Following server product(s) can be started:
[1] Sun Java [tm] System Administration Server 5 2004Q2
[2] Sun Java [tm] System Directory Server 5 2004Q2
[3] Sun Java [tm] System Web Server 6 2004Q1 Update 1 SP2
[4] Sun Java [tm] System Application Server Standard Edition 7
2004Q2
[5] Sun Java [tm] System Access Manager 2004Q2

Servers to be started [1,2...,all,q] ?:
```

4. all と入力して、インストールされている root 所有のすべてのサーバーを起動します。

スクリプトの実行状況を示すメッセージが表示されます。

▼ root 以外の所有のサーバーを起動する

1. root 権限を終了し、通常の root 以外のユーザーアカウント情報でログインします。
2. 端末ウィンドウでサーバー起動スクリプトがあるディレクトリに移動し、root 以外のユーザーでスクリプトを実行します。

```
% ./startservers
```

次のような出力が表示されます。

```
Following server product(s) can be started:
[1] Sun Java [tm] System Web Server 6 2004Q1 Update 1 SP2
[4] Sun Java [tm] System Application Server Standard Edition 7
2004Q2

Servers to be started [1,2...,all,q] ?:
```

3. all と入力して、インストールされている root 以外の所有のすべてのサーバーを起動します。

これで管理コンソールにアクセスして、サーバーの状態を確認したり、その他の管理作業を行うことができます。インストールされている各サーバーのこの追加手順を完了すると、サーバーランタイムが正しくインストールされ、構成されていることが確認されます。

サーバーの管理コンソールへのアクセス

サーバー起動スクリプトを実行したら、この項の手順に従って、インストールされている各サーバーの管理コンソールに正しく接続して、アクセスできることを確認します。

▼ Application Server 管理コンソールにアクセスする

1. Web ブラウザを起動します。
2. プロキシサーバーを使用して Web にアクセスする場合は、プロキシサーバーの設定が、ローカルマシンからサーバーの URL にアクセスできる設定になっていることを確認します。
3. Web ブラウザで `Configuration_Data.html` ファイルを開きます。

このファイルはインストーラによって作成され、デフォルトのインストールディレクトリに保存されます。図 14-1 に示すようなレポートが表示されます。

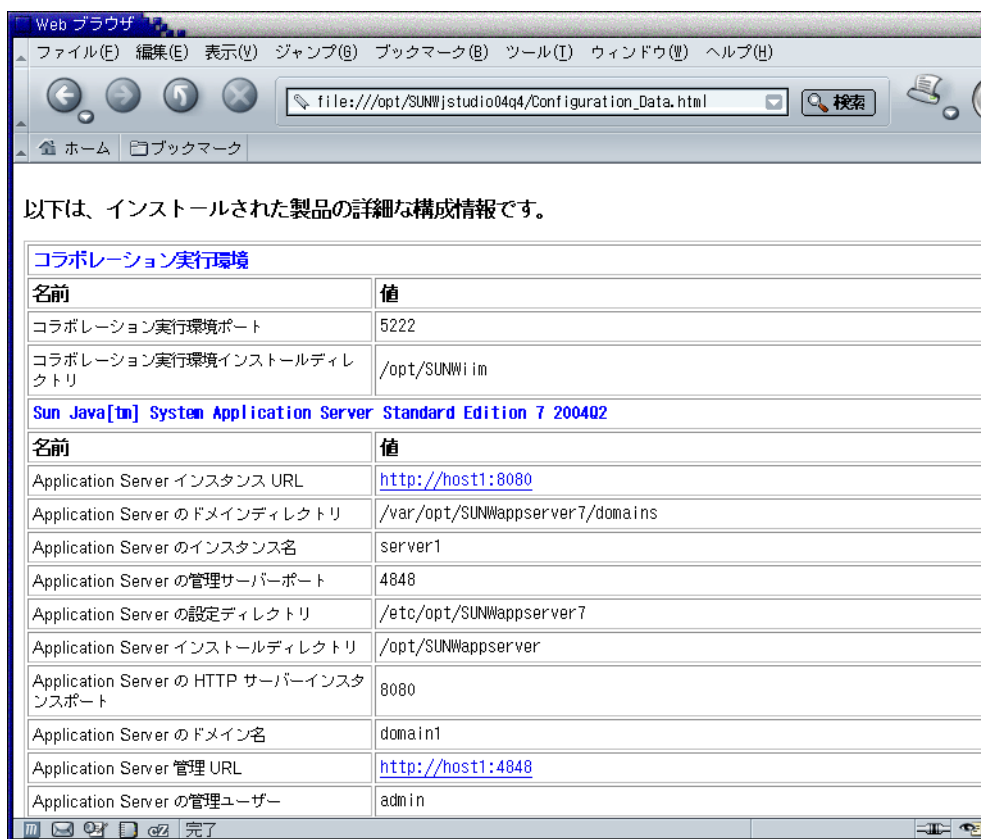


図 14-1 Configuration_Data.html のレポート例

4. 「Application Server 管理 URL」というエントリを探し、そのエントリのリンクをクリックします。

Application Server に対するユーザー名およびパスワードの入力が求められます。

5. Application Server の管理ユーザー ID およびパスワードを入力して、「了解」をクリックします。

ブラウザに Application Server 管理コンソールが表示されます。

▼ Web Server 管理コンソールにアクセスする

1. Web Server プロセスが動作していることを確認します。

```
# ps -ef | grep webservd
```


- 上記手順の手順 1 および 2 を繰り返して Configuration_Data.html ファイルを開くか、ブラウザの「戻る」ボタンを使用して、そのファイルに戻ります。
- 「Web Server 管理 URL」というエントリを探して、そのエントリのリンクをクリックします。

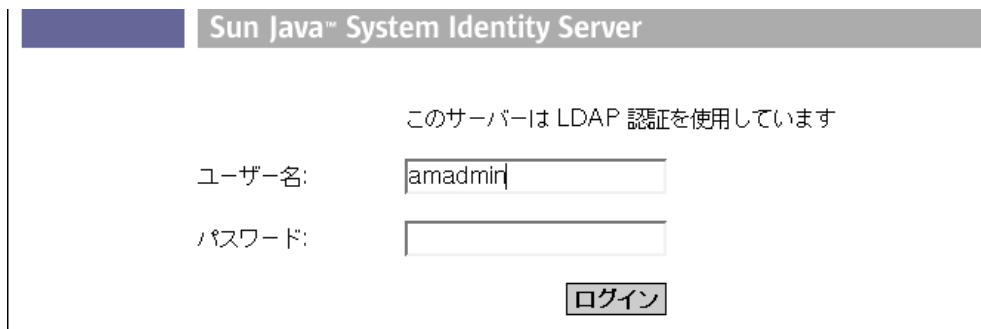
Web Server に対するユーザー名およびパスワードの入力が求められます。



- インストール中に設定した管理ユーザー ID およびパスワードを入力します。ブラウザに Web Server 管理コンソールが表示されます。

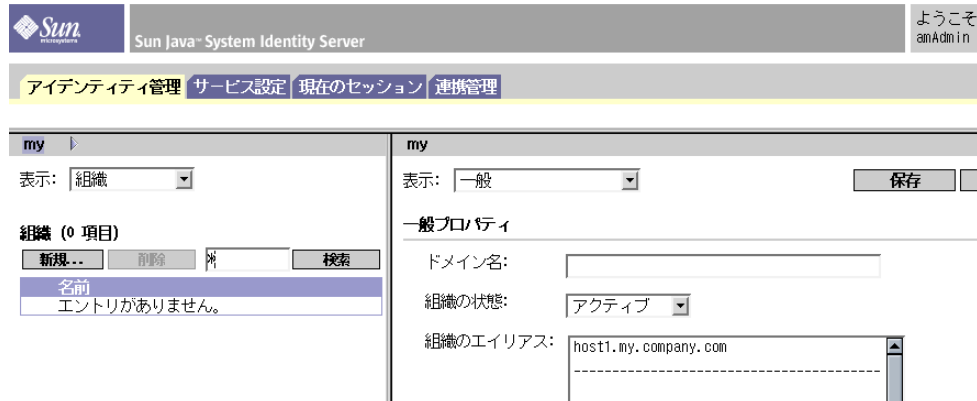
▼ Access Manager 管理コンソールを開く

- (省略可能) Access Manager をインストールしている場合は、ブラウザで「構成データ」レポートに戻り、「Sun Java System Access Manager 2004Q2」のセクションの「名前」列から「Access Manager コンソール URL」という行を探します。
- その行のリンクをクリックします。
「Sun Java System Identity Server (ログイン)」ページが表示されます。



3. ユーザー名 (amadmin) およびパスワードを入力して、「ログイン」をクリックします。

ブラウザのウィンドウに Access Manager 管理コンソールが表示されます。



▼ Portal Server デスクトップを表示する

1. Directory Server プロセスが動作していることを確認します。

```
% ps -ef | grep slapd
```

2. コンテナが Application Server の場合は appservd プロセス、コンテナが Web Server の場合は webservd プロセスを Grep 検索します。
3. Access Manager コンソールからログアウトして、新しいブラウザインスタンスを起動します。

4. Configuration_Data.html ファイルを開いて、Sun Java System Portal Server 2004Q2 のセクションを探します。

「名前」列から「Portal Server コンソール URL」という行を探します。

5. その行のリンクをクリックします。

ブラウザに Sun Java System Portal Server 2004Q2 のサンプルデスクトップが表示されます。



これで、サーバーが正しくインストール、構成されていることが確認できました。開発に取り組むことができます。

サーバーの停止

インストールされているすべてのサーバーを停止する最も簡単な方法は、`root` および `root` 以外のそれぞれでサーバー停止スクリプトを実行する方法です。コマンド行から個別にサーバーを停止することもできます。

▼ `root` 所有のすべてのサーバーを停止する

1. `root` ユーザーになります。
2. スクリプトが含まれているディレクトリに移動します。たとえば、デフォルトのインストールディレクトリを使用した場合は、以下のように入力します。

```
# cd /opt/SUNWjstudio04q4/bin
```

3. サーバー停止スクリプトを起動します。

```
# ./stopservers
```

`root` 以外のユーザーが所有するサーバーインスタンスを停止する必要がある場合、その `root` 以外のユーザーでサーバー停止スクリプトを実行します。

▼ Application Server を停止する

1. `root` でログインします
2. `java-studio-install-dir/AppServer7/bin` に移動します。たとえば次のように入力します。

```
# cd /opt/SUNWappserver/bin
```

3. Application Server インスタンスを停止します。

```
# ./asadmin stop-domain --domain domain1
```

次のような出力が表示されます。

```
Instance domain1:admin-server stopped
Instance domain1:server1 stopped
Domain domain1 stopped
```

4. (省略可能) Application Server が動作していないことを確認します。

```
# ps -ef | grep appservd
```

▼ Web Server を停止する

1. root でログインします
2. Web Server 管理サーバーのインストールディレクトリに移動します。以下はその例です。

```
# cd /opt/SUNWwbsvr/https-admserv
```

3. Web Server 管理プロセスを停止します。

```
# ./stop
```

4. Web Server インスタンスのインストールディレクトリに移動します。以下はその例です。

```
# cd /opt/SUNWwbsvr/https-machinename.domainname
```

5. Web Server インスタンスを停止します。

```
# ./stop
```

6. (省略可能) Web Server が動作していないことを確認します。

```
# ps -ef | grep webservd
```

▼ Directory Server を停止する

1. root でログインします
2. サーバーインスタンスの停止スクリプトが含まれているディレクトリに移動します。このディレクトリ名は `slapd-instancename` の形式で、通常 `instancename` はマシンのホスト名です。たとえば使用しているマシン名が `host1` の場合は、以下の例のようになります。

```
#cd /opt/SUNWdirserver/slapd-host1
```

3. Directory Server を停止します。

```
# ./stop-slapd
```

4. Directory Server 管理サーバーを停止します。

```
# ./stop-admin
```

5. (省略可能) Directory Server インスタンスが動作していないことを確認します。

```
# ps -ef | grep slapd
```

その他のマニュアルの入手方法

docs.sun.com からマニュアルを入手することができます。以下の表は、入手可能な各サーバー関係のマニュアルへのリンクの一部を示します。

表 14-2 サーバーランタイムのマニュアルへのリンク (Solaris OS 版)

コンポーネント製品の サーバーランタイム版	リンク
Sun Java System Application Server Standard Edition 7 2004Q2	http://docs.sun.com/db/coll/ ApplicationServer7_04q2_ja?l=ja
Sun Java System Web Server 6.1 2004Q2 SP2	http://docs.sun.com/db/coll/S1_websvr61sp2_ja?l=ja
Sun Java System Message Queue 3.5 SP 1	http://docs.sun.com/db/coll/MessageQueue_35_sp1_ja?l=ja
Sun Java System Directory Server 5 2004Q2	http://docs.sun.com/db/coll/ S1_DirectoryServer_04q2_ja?l=ja
Sun Java System Access Manager 6.1 (formerly Identity Server)	http://docs.sun.com/db/coll/IdentityServer_04q2_ja?l=ja
Sun Java System Portal Server 6 2004Q2	http://docs.sun.com/db/coll/PortalServer_04q2_ja?l=ja
Sun Java System Identity Server Policy Agent 2.1 for Sun Java System Application Server 7	http://docs.sun.com/db/coll/S1_IdServPolicyAgent_21

サーバー検証中の障害追跡

Java Studio Enterprise サーバーには特有の依存関係があり、適切な順序で起動する必要があります。Application Server または Web Server だけを使用する場合、起動順序要件はありません。サーバーランタイムを手動で起動する場合は、適切な起動順序に従ってください。startservers スクリプトは、サーバー間の依存関係に自動的に対処します。

Access Manager および Portal Server を使用する場合は、起動順序が重要になります。Access Manager および Portal Server は、Application Server (デフォルト) または Web Server のいずれかで動作する Web アプリケーションとして配備されます (サーバーの選択は、インストーラの「製品の選択」パネルで可能。22 ページの「コンテナの選択」を参照)。また、Access Manager および Portal Server は、Directory Server にも依存します。このため、Access Manager または Portal Server のどちらにアクセスする場合でも、事前に Directory Server と適切な Web コンテナの両方を起動しておく必要があります。サーバーの停止は、起動と逆の順序で行います。

注 – 提供されているサーバー起動スクリプトは、自動的に適切な順序ですべてのサーバーを起動します。このスクリプトは、コマンド行から実行します。

Access Manager および Portal Server の管理コンソールを正しく起動できない場合は、次のことを確認してください。

- Web ブラウザで正しくプロキシが設定されている (138 ページの「Web ブラウザのプロキシ設定を確認する」の手順を参照)。
- サーバーが正しい順序で起動されている (139 ページの「正しい順序でサーバーを起動する」の手順を参照)。
- Directory Server の接続 (139 ページの「Directory Server の接続を確認する」の手順を参照)。

▼ Web ブラウザのプロキシ設定を確認する

Access Manager の管理コンソールへのアクセス、あるいは Portal Server Desktop の表示で「Page Not Found」エラーが表示された場合は、Web ブラウザのプロキシ設定を調べてください。インストールされているサーバーにアクセスする場合、Web ブラウザがプロキシサーバーを使用して URL を解決するように設定されてはいけません。たとえば Mozilla1.4 の場合は、次の手順でプロキシ設定を変更します。

1. Web ブラウザのウィンドウで「編集」>「設定」を選択します。
2. 「詳細」ノードを展開して、「プロキシ」を選択します。
「プロキシ」ダイアログが表示されます。プロキシサーバーを使用している場合は、「手動でプロキシを設定する」オプションを選択します。
3. 「プロキシなし」というテキストボックスに自分のサーバードメインが含まれていることを確認します。

▼ 正しい順序でサーバーを起動する

1. Directory Server を起動します。
管理サーバーとサーバーインスタンスの両方を起動します。
2. Web コンテナとして Application Server (デフォルト) または Web Server のいずれかを起動します。
管理サーバーとサーバーインスタンスの両方を起動します。
3. Access Manager または Portal Server デスクトップへのアクセスを試みます。

▼ Directory Server の接続を確認する

1. root でログインします
2. サーバーインスタンスの起動スクリプトが含まれているディレクトリに移動します。
このディレクトリ名は `slapd-machinename` の形式で、*machinename* はマシンの名前です。たとえば使用しているマシン名が `host1` の場合は、以下のようにになります。

```
# cd /opt/SUNWdirserver/slapd-host1
```

3. Directory Server を起動します。

```
# ./start-slapd
```

4. (省略可能) Directory Server が動作していることを確認します。

```
ps -ef | grep slapd
```

次のような出力が表示されます。

```
# root 1297      1  0   Jul 01 ?                2:27 ./ns-slapd -D  
/opt/SUNWdirserver/slapd-host1 -i /opt/SUNWdirserver/slapd-host1
```

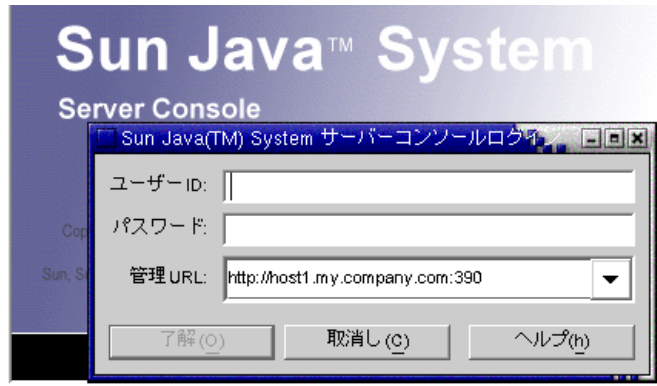
5. Directory Server 管理サーバーを起動します。

```
# cd /opt/SUNWdirserver  
# ./start-admin
```

6. Sun Java System Server コンソールを起動します。

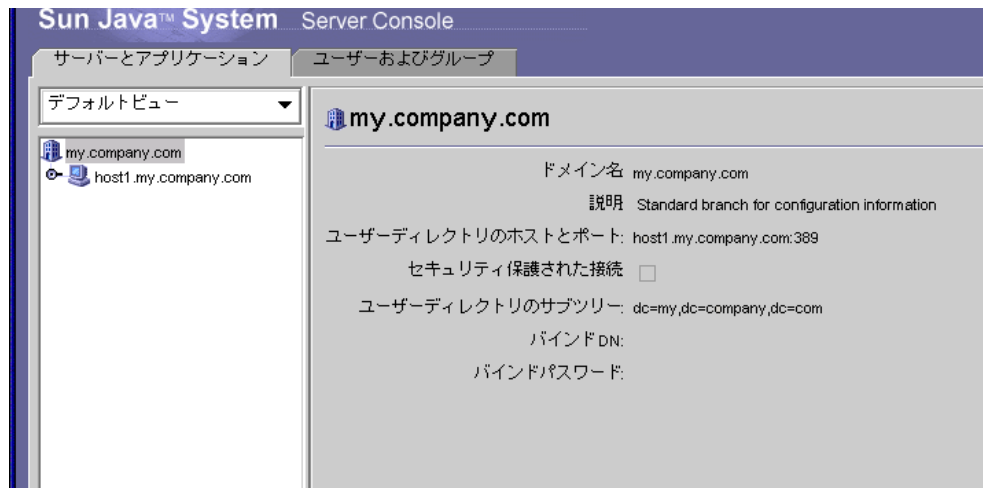
```
# ./startconsole
```

Java System コンソールのログインダイアログが表示されます。



7. ユーザー ID およびパスワードを入力して、「了解」をクリックします。

正常にインストールされていると、Sun Java System Server コンソールにログインできます。



8. (省略可能) 「サーバーとアプリケーション」タブでサーバーホストのノードを展開し、さらに「Server Group」ノードを展開します。

Administration Server のエン트리 1 つと Directory Server (*machinename*) の形式のサーバーのエン트리 1 つが現れます。



9. 「Directory Server (*host-name*)」ノードをダブルクリックします。

サーバーインスタンスの Sun Java System Directory Server コンソールが表示されます。このコンソールから、サーバーインスタンスの起動、停止、再起動を行うことができます。



よくあるエラーの診断

この節では、よくあるエラーの一部をまとめています。

1. Web ブラウザから Access Manager コンソールにアクセスしようとすると、次のエラーになる。

```
Server Error
This server has encountered an internal error which prevents it
from fulfilling your request.The most likely cause is a
misconfiguration.Please ask the administrator to look for messages
in the server's error log.
```

考えられる原因 : Access Manager は、Directory Server や Application Server などの他の Java Studio Enterprise サーバーに依存しています。サーバーが一部動作していない可能性があります。

対策 : 正しい順序でサーバーを起動してください。詳細は、139 ページの「正しい順序でサーバーを起動する」を参照してください。

2. コマンド行から Access Manager を起動しようとすると、次のエラーになる。

```
Directory Server was not installed as part of Identity Server.
Please start it manually.
starting web container instance ...
Sun ONE Web Server 6.1 B09/11/2003 19:00
info: CORE3016: daemon is running as super-user
...
info: WEB0100: Loading web module in virtual server [https-
machinename.domainname] at [/search]
failure: WebModule[/portal]: WEB2783: Servlet /portal threw load()
exception
javax.servlet.ServletException: WEB2778: Servlet.init() for servlet
RewriterServlet threw exception
...
----- Root Cause -----
Start of DataServiceException:
Message: LDAP authentication failed.
Cause:com.ipplanet.sso.SSOException: LDAP authentication failed.
...
com.sun.portal.desktop.context.ContextError:
DSAMEServiceAppContext.initAdminDSAMEConnection()com.ipplanet.sso.SSO
Exception:
LDAP authentication failed.
```

考えられる原因：Access Manager は、Directory Server や Web Server などの他の Java Studio Enterprise サーバーに依存しています。サーバーが一部動作していない可能性があります。

対策：正しい順序でサーバーを起動してください。詳細は、139 ページの「正しい順序でサーバーを起動する」を参照してください。

3. すべてのサーバーをインストールした後、`http://localhost/amserver` の形式の URL を使って `amserver` にアクセスしようとすると、「Page Not Found」エラーになる。

考えられる原因：Web ブラウザのプロキシサーバーの設定が不適切である可能性があります。プロキシサーバーが設定されている場合、ブラウザはそのプロキシサーバーを使用して URL を解決しようとする場合があります。

対策：Web ブラウザのプロキシ設定を直接接続に変更するか、使用しているサーバードメイン名にプロキシサーバーを使わない設定に変更してください。

4. Java Studio Enterprise をインストールすると Access Manager のインストールまたは構成に失敗する。

考えられる原因：システムの DNS サフィックスの設定が正しくない可能性があります。

対策：149 ページの「DNS サフィックスの確認」を参照してください。

5. Portal Server デスクトップにアクセスしようとすると、ブラウザのウィンドウに次のエラーが表示される。

デスクトップに重大なエラーが発生しました。原因は、サーバーの設定不良である可能性があります。
この問題を管理者に報告してください。
考えられる原因：
デスクトップにアクセスする権限がない

考えられる原因：Portal Server デスクトップにアクセスする前に Access Manager コンソールからログアウトしていません。

対策：Access Manager コンソールからログアウトして、ブラウザの新しいインスタンスを起動し、操作をやり直してください。

第15章

障害の追跡

この章では、次の分野で発生した障害の追跡方法に関するヒントを記載しています。

- 145 ページの「インストール時の障害の標準的な追跡方法」
- 150 ページの「Java Studio Enterprise の問題と対策」

インストール時の障害の標準的な追跡方法

この節では、標準的な障害追跡方法を説明します。このマニュアルの他の章でも、特定の作業に特有のよくあるエラーの障害追跡のヒントを提供しています。目次または索引を参照してください。

インストールログファイルの調査

インストールまたはアンインストール中に問題が発生した場合は、適切なログファイルを調べてください。インストーラとアンインストーラのログファイルおよびレポートは、次の場所にあります。

- (Solaris OS の場合) `/var/sadm/install/logs`
- (Microsoft Windows の場合) ユーザー環境変数 `%TEMP%` の値が示す場所 (C:\Documents and Settings\Administrator\Local Settings\Temp など)。
- どのプラットフォームでも、インストールの概要レポート (`Summary_Report.timestamp`) が `java-studio-install-dir` に保存されます。

次の表はログファイル名の形式を示しています。Aバージョンのログファイルは、インストールの完了を記録します。Bバージョンのログファイルには、ログメッセージが含まれます。ログファイルの内容は、Microsoft Windows ユーティリティのメモ帳で見ることができます。

表 15-1 ログファイル名の形式

ログの エンティティ	ログファイル名の形式
インストーラ :	Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4_install. <i>Atimestamp</i>
コンポーネント 製品	Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4_install. <i>Btimestamp</i>
アンインストー ラ	Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4_uninstall. <i>Atimestamp</i> Sun_Java_Studio_Enterprise_7_2004Q4_uninstall. <i>Btimestamp</i>
インストーラ :	例 :
コンポーネント 製品	Sun_ONE_Identity_Server_install. <i>Atimestamp</i> Sun_ONE_Identity_Server_install. <i>Btimestamp</i> Sun_ONE_Identity_Server_Policy_Agent_install. <i>Atimestamp</i> Sun_ONE_Identity_Server_Policy_Agent_install. <i>Btimestamp</i>
(Solaris のみ) インストーラ :	Shared_Component_Upgrade. <i>timestamp</i>
共有コンポーネ ントのアップグ レードレポート	
インストーラ :	SystemCheck_Report. <i>timestamp</i>
システム要件の レポート	
インストールの 概要	Summary_Report. <i>timestamp</i>
構成データ*	Configuration_Data.html
	* このファイルは、インストールディレクトリに保存されます。

timestamp 変数は、ログが作成された日時を表し、MMddhhmm の形式です。

MM 月を意味します

dd 日を意味します。

hh 時を意味します。

mm 分を意味します。

障害の追跡にログファイルを使用するには、最初に発生した問題を特定するようにしてください。最初に発生した問題が以降の問題の原因になっていることがよくあります。次の順序に従ってください。

1. インストールの概要ファイルを調べます。このファイルには、インストールおよび構成されたソフトウェアの全般的な説明が含まれています。

問題が発生した場合は、その問題を引き起こしたコンポーネントを特定してください。複数の問題が発生した場合は、最初に発生した問題を特定してください。

2. 詳細なログファイルを調べます。

- a. 最初に発生したエラーまたは警告を探して、解決を試みます。1つのエラーを解決すると、一見関係のない、その後のいくつかのエラーが解決されることがあります。

- b. 問題を引き起こしたコンポーネントまたはパッケージ名を調べます。

ログファイルによって、以下に示すように、次の手順を決定する手がかりが得られることがあります。

- 構成上の問題の場合は、構成の概要を見て、使用されている設定を調べる。

3. コンポーネント製品のログファイルを調べます。

コンポーネント製品の起動時に問題が発生した場合は、そのログファイルを調べます。Administration Server や Application Server、Directory Server、Portal Server、Access Manager など、コンポーネント製品の中には、インストーラのログファイルと同じディレクトリにログファイルを書き込むものがあります。コンポーネント製品のログファイルの詳細は、使用プラットフォーム別の適切な付録を参照してください。

- (Microsoft Windows の場合) 付録 C を参照。
- (Solaris OS の場合) 付録 D を参照。

リソースと設定の確認

インストール中、次のホストレベルの事柄が原因で問題が発生することがあります。

- (Solaris OS の場合) アップデート：推奨アップデート (パッチ) を適用済みであることを確認します。
- ディスク容量：ディスクパーティションの作成方法とインストールディレクトリがあるパーティションを確認します。
 - (Solaris OS の場合) デフォルトのインストールディレクトリの /var/sadm と /etc/opt、あるいは指定するデフォルト以外のディレクトリに、十分なディスク容量が必要です。
 - (Windows OS の場合) デフォルトのインストールディレクトリ C:\Sun\jstudio、あるいは指定するデフォルト以外のディレクトリに、十分なディスク容量が必要です。
- DNS サフィックス：DNS サフィックスが正しく設定されていることを確認します。149 ページの「DNS サフィックスの確認」を参照してください。

- (Microsoft Windows の場合) %TEMP% 変数：ユーザー環境変数の %TEMP% を定義していることを確認します。

検証手順の実施

コンポーネント製品の起動時の障害を追跡する場合は、コンポーネントのプロセスが動作していることを確認し、問題に応じて適切と思われる次の章の検証手順を実施します。

- 61 ページの「IDE の起動」
- 73 ページの「IDE における Sun Java System Application Server インスタンスの利用」
- Windows - 108 ページの「インストールされたサーバーの検証」
- Solaris OS システム - 126 ページの「インストールされたサーバーの検証」

提供媒体の確認

DVD または CD-ROM からインストールする場合は、その媒体が汚れていないか確認します。汚れていると、読み取りエラーのためにインストールで問題が発生することがあります。

Directory Server の接続確認

Directory Server に依存するコンポーネントをインストールする場合は、次のことが原因で問題が発生することがあります。

- Directory Server に対するユーザー ID またはパスワードの指定に誤りがある。
- LDAP ポートの指定に誤りがある。
- Directory Server が起動していない。
- サイレントモードでのインストールで Directory Server が動作していなかった。

対話形式のモードの場合、インストーラは、インストール中に Directory Server の接続を検査しますが、サイレントモードではこの検査は行われません。サイレントインストールで、Directory Server が使用できない場合は、インストール中に Access Manager または Portal Server で問題が発生することがあります。

パスワードの確認

インストールでは、ユーザー名とパスワードを指定します。インストーラは、指定されたそのユーザー名とパスワードを使用して、サーバーコンポーネント製品を構成します。すなわち、Application Server と Directory Server、Web Server に使用されま

す。Access Manager および Portal Server は、これとは異なるユーザー名とパスワードを使用します。Access Manager Administrative コンソールにアクセスするには、ユーザー名として amadmin を入力します。パスワードは、インストール中に使用した値です。Summary_Report.timestamp を調べて、各サーバープロセスに適切なログイン情報を使用していることを確認してください。

DNS サフィックスの確認

Directory Server、Access Manager、Portal Server および Web Server をインストールして構成するには、有効なドメイン名が必要です。Microsoft Windows マシンの場合は、「DNS サフィックス」プロパティに適切な値を設定する必要があります。

使用プラットフォームに従い、適切な手順で、DNS サフィックスが正しくマシンに設定されていることを確認してください。マシンの正しい DNS サフィックスまたはドメイン名に不明な点がある場合は、ネットワーク管理者にお尋ねください。

▼ DNS サフィックスを確認する (Microsoft Windows XP Professional システムの場合)

4. 「マイコンピュータ」を右クリックして「プロパティ」を選択します。
「システムのプロパティ」ダイアログが表示されます。
5. 「コンピュータ名」タブを選択します。
「フル コンピュータ名」フィールドの値を確認します。
machinename.my.company.com というような形式で、コンピュータの完全なドメイン名がフィールドに含まれている場合、設定は完全です。フィールドが空白か不完全な場合は、次の手順に進んでください。
6. 「変更」(表示されているタブの最下部近くにあるボタン) をクリックします。
「コンピュータ名の変更」ダイアログが表示されます。
7. 「詳細」をクリックします。
「DNS サフィックスと NetBIOS コンピュータ名」ダイアログが表示されます。
8. 「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」フィールドに適切な DNS サフィックスを入力し、「ドメインのメンバシップが変更されるときにプライマリ DNS サフィックスを変更する」チェックボックスが選択されていることを確認します。
9. マシンを再起動し、手順 1 ~ 3 に従って変更されていることを確認します。

▼ DNS サフィックスを確認する (Microsoft Windows 2000 Professional システムの場合)

1. デスクトップ上の「マイコンピュータ」アイコンを右クリックします。
2. コンテキストメニューから「プロパティ」を選択します。
3. 「ネットワーク ID」タブを選択して、「プロパティ」をクリックします。
「識別の変更」ダイアログが表示されます。
4. 「詳細」をクリックします。
「DNS サフィックスと NetBIOS コンピュータ名」ダイアログが表示されます。
5. 「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」フィールドに適切な DNS サフィックスを入力し、「ドメインのメンバシップが変更されるときにプライマリ DNS サフィックスを変更する」チェックボックスが選択されていることを確認します。
6. マシンを再起動し、手順 1 ~ 3 に従って変更されていることを確認します。

▼ ドメイン名を確認する (Solaris OS の場合)

1. `/etc` ディレクトリに移動します。
2. `resolv.conf` ファイルを表示し、マシンのドメイン名エントリが適切で、組織またはネットワークの DNS ネームサーバーエントリが含まれていることを確認します。

注 - `resolv.conf` ファイルが存在しない場合は、エンタープライズネットワークに適切なドメイン名を設定するようネットワーク管理者に依頼してください。

Java Studio Enterprise の問題と対策

この節では、よく起きるエラーと、推奨するそれらエラーの解決策を説明します。

Java Studio Enterprise ソフトウェアのインストール時の問題

1. ダウンロードファイルをダウンロードし、圧縮解除してから Java Studio Enterprise 7 の installer.bat をダブルクリックしても何も起こらない。

考えられる原因：Microsoft Windows の場合は、installer.bat がある場所のパス名に空白またはその他特殊文字が含まれている可能性があります。この問題かどうかを確認するには、コマンドプロンプトウィンドウを開いて、このウィンドウからインストーラを起動し、コマンド行のエラーメッセージで確認します。

対策：ダウンロードしたファイルを、パス名に空白および特殊文字が含まれないディレクトリに圧縮解除してください。Windows システムへのインストール手順の詳細は、18 ページの「Java Studio Enterprise ソフトウェアをインストールする」を参照してください。

2. Java Studio Enterprise をアンインストールした後で再インストールしようとする時、インストーラから次のメッセージが返される。

```
Corrupt Serial Number: Installation Cannot Proceed
<html><body> A serial number that was installed on the machine
appears to have been corrupted.
```

考えられる原因：前のアンインストールセッションで、いくつかのファイルが正しくアンインストールされていなかったことが原因です。通常、このメッセージは、インストールとアンインストールを繰り返さない限り、現れません。

対策：次のファイルがアンインストーラによって削除されていない場合は、手動でこれらファイルを削除してください。

- Solaris OS の場合 - /var/sadm/install/.JavaStudio
- Microsoft Windows の場合 - レジストリキーの HKEY_LOCAL_MACHINE > SOFTWARE > Sun Microsystems > JavaStudio を削除します。

サーバーの起動時の問題

Java Studio Enterprise サーバーには特有の依存関係があり、適切な順序で起動する必要があります。Microsoft Windows の場合の詳細は、第 13 章を参照してください。Solaris OS の場合の詳細は、第 14 章を参照してください。

注 – 通常、プロキシサーバーを使用してインターネットに接続する環境で、マシン名 (ホスト名) として localhost を使用して **Java Studio Enterprise** をインストールした場合は、インストールしたサーバーの管理コンソールにアクセスするときに直接接続するように、または DNS プロキシサーバーを使わないように、Web ブラウザでプロキシ構成を変更する必要があります。Windows マシンの場合は 119 ページの「Web ブラウザのプロキシ設定を確認する」、Solaris OS マシンの場合は 138 ページの「Web ブラウザのプロキシ設定を確認する」を参照してください。

Directory Server 管理コンソールへのアクセスで、ログインダイアログに不正な URL が表示され、ログインに失敗することがあります。その場合は URL を訂正して、ログインし直してください。139 ページの「Directory Server の接続を確認する」の手順に従ってください。

不完全なアンインストールの発見と解決

アンインストーラが途中で終了した場合は、一部のファイルやディレクトリ、その他システムエントリが正しく削除されていない可能性があります。また、以降のアンインストールまたはインストールが失敗するという意味で、コンポーネント製品のインストールや構成、あるいはアンインストールが失敗する可能性もあります。

アンインストールが失敗すると、以下のようなことが起こります。

- **Java Studio Enterprise** をアンインストールした後、削除されているはずのファイルが残っている。すなわち、正しく削除されていないファイルがある。アンインストールで削除されないファイルについては、プラットフォーム別のアンインストールの章を参照してください。
- 製品のアンインストール後、別のインストールディレクトリを使用するか、古いインストールディレクトリを削除しても、同じまたは新しいバージョンを再インストールできない。この場合は、製品のレジストリが壊れている可能性があります。
- アンインストール中にエラーメッセージが表示されたり、アンインストールで問題が発生したりする。あるいは、アンインストールが失敗したことを示すメッセージがログファイルに含まれていたりする。

アンインストールが失敗していると、同じまたは別のバージョンを再インストールしようとしたとき、あるいはスタンドアロンの **Java Studio Enterprise** コンポーネント製品をインストールしようとしたときに、問題が発生することがあります。

提供されているアンインストーラウィザードを使わずにアンインストールを行った場合は、アンインストールが不完全であったり、アンインストール情報が壊れていたりすることがあります。アンインストールが不完全と判断した場合は、以下の手順を実施してシステムを修復してください。

▼ アンインストールに失敗したシステムを修復する (Microsoft Windows)

1. 管理者 (administrator) 権限を持つユーザーとしてログインしていることを確認します。
2. Java Studio Enterprise アンインストーラの実行可能ファイル (uninstall.bat) を探します。

このファイルは、*java-studio-install-dir* にあります。デフォルトのインストールディレクトリは、`%SystemDrive%\Sun\jstudio_04Q4` です。上記の実行可能ファイルが存在しない場合は、手順 4 に進みます。

3. アンインストーラを実行して、手順 4 に進みます。

```
C:\> java-studio-install-dir\uninstall.bat
```

4. すべてのサーバーが停止していることを確認します。

「スタート」メニューまたはコマンド行からすべてのサーバーを停止してください。確認する手順は次のとおりです。

- a. 「スタート」>「設定」>「コントロールパネル」を選択します。

「コントロールパネル」ダイアログが表示されます。

- b. 「管理ツール」をダブルクリックします。

「管理ツール」ダイアログが表示されます。

- c. 「サービス」をダブルクリックします。

- d. Sun ONE サーバーのエントリが見える位置までサービスの一覧を下方向にスクロールします。

一部エントリは、アンインストーラによって削除されていることがあります。インストーラを使用してインストールした Sun ONE サーバーのエントリがある場合は、それらサーバーが停止していることを確認します。

5. `%SystemRoot%\system32\` にある `productregistry` ファイルから Java Studio Enterprise のエントリを削除します。

サン以外のソフトウェアをインストールしている場合は、安全を期すため、エントリを編集する前にこのファイルのバックアップを取っておいてください。Microsoft Windows 2000 システムの場合、`%SystemRoot%` 変数は `C:\WINNT` になっています。Microsoft Windows XP Professional システムの場合、この変数は `C:\WINDOWS` です。162 ページの「製品レジストリファイルを手動で編集する」を参照してください。

6. Windows のレジストリエディタを使用し、Windows レジストリから次のフォルダとその内容を削除します。

サンの他のソフトウェア製品をインストールしている場合は、このフォルダ全体ではなく、Java Studio Enterprise のエントリだけを削除します。Java Studio Enterprise によってインストールされたエントリであるかどうかは、レジストリキー属性の ImagePath を調べることによって確認できます。この値はインストールディレクトリを示し、この値が *java-studio-install-dir* のインストールディレクトリの下にある場合は、Java Studio Enterprise インストーラによってインストールされたものであることを示します。

Java Studio Enterprise のエントリは次のとおりです。

- HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sun\
 - Administration\5.2
 - Directory\5\slapd-*machinename*
 - Directory\5\SNMP\CurrentVersion
- HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sun Microsystems\
 - Application Server\7 2004Q2
 - IdentityServer\6.1
 - JavaStudio\2004Q4
 - PortalServer\6.2
 - studio_ee\7
 - Sun ONE Message Queue\3.0.1
 - WebServer\6.1

7. Windows のレジストリエディタを使用し、次のフォルダから Sun ONE サーバーのレジストリキーを削除します。

- HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\Eventlog\Application\
 - admin52-serv
 - c_sun_jstudio_04q4_webserver6_2004q1_https-admserv_config
 - c_sun_jstudio_04q4_webserver6_2004q1_https-*hostname.domainname_config*
 - slapd-*hostname*
 - SunAppServer7 2004Q2UR1ER1-domain1_admin-server
 - SunAppServer7 2004Q2UR1ER1-domain1_server1
 - SunAppServer7 2004Q2UR1ER1-jstudio-domain_admin-server
 - SunAppServer7 2004Q2UR1ER1-jstudio-domain_<asserver>

また、次の Java Studio Enterprise Services のエントリも削除します。

- HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\
 - admin52-serv
 - https-admserv61
 - https-*machinename.domainname*
 - slapd-*machinename*
 - SunAppServer7 2004Q2UR1ER1-domain1_admin-server

- SunAppServer7 2004Q2UR1ER1-domain1_server1
- SunAppServer7 2004Q2UR1ER1-jstudio-domain_admin-server
- SunAppServer7 2004Q2UR1ER1-jstudio-domain_jstudio-server

8. 「Sun Microsystems」 > 「Sun Java Studio Enterprise 7」という「スタート」メニューのプログラムグループとその内容(プログラム項目)を削除します。

9. *java-studio-install-dir* から製品ファイルをすべて削除します。

これらのディレクトリの削除で問題が発生した場合は、タスクマネージャで、*java.exe* プロセスが実行中でないか調べてください。*java.exe* プロセスが実行中の場合は終了して、再度、*java-studio-install-dir* とそのサブディレクトリの削除を試みます

10. (省略可能) レジストリを整理した状態でシステムが起動するには、システムを再起動します。

Java Studio Enterprise のすべてのサービスを削除したことを確認します。

a. 「コントロールパネル」ダイアログを開きます。

- (Windows 2000 の場合) 「スタート」 > 「コントロールパネル」 > 「設定」を選択します。
- (Windows XP の場合) 「スタート」 > 「コントロールパネル」を選択します。

b. 「管理ツール」をダブルクリックします。

「管理ツール」ダイアログが表示されます。

c. 「サービス」をダブルクリックします。

「サービス」ダイアログが表示されます。

d. Sun Java Studio Enterprise 7 のエントリがある位置まで、サービスの一覧を下方方向にスクロールします。

Java Studio Enterprise 製品全体をアンインストールした場合、関係するエントリはありません。

▼ アンインストールに失敗したシステムを修復する (Solaris OS)

以下の手順は、Java Studio Enterprise に用意されているアンインストーラを実行したことを確認してから行ってください。通常、アンインストーラは、選択された製品を完全にアンインストールします。

1. X サーバーへのクライアントアクセスを許可します。

```
% xhost + your-local-machine
```

- ローカルシステムに表示が行われるように `DISPLAY` 環境変数を設定します。
たとえば C シェルを使用している場合は、以下のように入力します。

```
% setenv DISPLAY your-local-machine:0.0
```

- スーパーユーザーになります。
- すべての Java Studio Enterprise サーバーが停止していることを確認します。
 - `stopservers` スクリプトがまだ使用できる場合は、そのスクリプトを実行します。以下はその例です。

```
# /opt/SUNWjstudio/bin/stopservers.sh
```

`stopservers` スクリプトが使用できない場合は、各サーバーのプロセス ID を調べて、個々に停止する必要があります。
以下はその例です。

```
% ps -ef | grep appservd
```

サーバーが動作中の場合は、そのプロセスを終了します。サーバープロセスごとにこの手順を繰り返します。インストールしたサーバーに対応する Solaris プロセス名については、付録 D を参照してください。

- Java Studio Enterprise のすべてコンポーネント製品パッケージを削除したことを確認します。

```
# pkginfo | egrep -i "Sun ONE|Sun Java"
```

パッケージがまだ表示される場合は、161 ページの「パッケージを手動で削除する」を参照してください。

注 – 以降のインストールセッションで `SUNWasvc` および `SUNWjato` パッケージが問題になることはなく、システムに残しておいてかまいません。

- アンインストーラパッケージが削除されていることを確認します。

```
# pkginfo | grep -i "SUNWjstudio"
```

7. `/var/sadm/install/productregistry` をエディタで開いて、Java Studio Enterprise のエントリを削除します。
手動編集を行う前にファイルのバックアップを取ってください。162 ページの「製品レジストリファイルを手動で編集する」も参照してください。
8. `/var/sadm/install/.JavaStudio` がある場合は削除します。
9. Application Server をインストールした場合は、`/var/opt/SUNWappserver7` および `/etc/opt/SUNWappserver7` を削除します。
10. Access Manager をインストールした場合は、`/var/opt/SUNWam` および `/etc/opt/SUNWam` を削除します。
11. Portal Server をインストールした場合は、`/var/opt/SUNWps` および `/etc/opt/SUNWps` を削除します。
12. Web Server をインストールした場合は、`java-studio-install-dir/SUNWwbsvr` を削除します。
13. `java-studio-install-dir` から残りのファイルをすべて削除します。

```
# rm -r java-studio-install-dir
```

注 – この手順の最終ステップとしてプログラムファイルとディレクトリを削除します。

14. X サーバーへのクライアントアクセスを禁止し、スーパーユーザー権限を終了します。

```
# xhost - your-local-machine  
# exit
```

Java Studio Enterprise パッケージの手動削除

表 15-2 は、Java Studio Enterprise のインストールでインストールされるパッケージを示しています。この表を参考に、必ずすべてのパッケージを削除していることを確認してください。パッケージの手動削除は、アンインストーラウィザードが削除に失敗した場合にのみ行うことを推奨します。

注 – 161 ページの「パッケージを手動で削除する」の手順に従い、この表に示されている順にパッケージを削除してください。

Java Studio Enterprise コンポーネント製品を表に示しているのはあくまで参考であり、ソフトウェアパッケージには Sun ONE 名が使用されています。

表 15-2 Java Studio Enterprise パッケージ (Solaris OS 版)

コンポーネント製品	パッケージ名
Sun Java System Portal Server	SUNWps
	SUNWpsap
	SUNWpsc
	SUNWpscfg
	SUNWpscp
	SUNWpsdis
	SUNWpsdt
	SUNWpsdta
	SUNWpsdtc
	SUNWpsdtm
	SUNWpsdtp
	SUNWpsdtx
	SUNWpsgw
	SUNWpsgwa
	SUNWpsgwm
	SUNWpsgws
	SUNWpsks
	SUNWpslcfg
	SUNWpsma
	SUNWpsmad
	SUNWpsmai
	SUNWpsmas
	SUNWpsmig
	SUNWpsmp
	SUNWpsnf
	SUNWpsnl
SUNWpsnlp	
SUNWpsnm	

表 15-2 Java Studio Enterprise パッケージ (Solaris OS 版) (続き)

コンポーネント製品	パッケージ名
	SUNWpsoh
	SUNWpsp
	SUNWpsplt
	SUNWpsps
	SUNWpsrw
	SUNWpsrwa
	SUNWpsrwp
	SUNWpssdk
	SUNWpsse
	SUNWpssea
	SUNWpssep
	SUNWpssp
	SUNWpsss
	SUNWpssso
	SUNWpsssoa
	SUNWpssub
	SUNWpstlj
	SUNWiimps
	SUNWebnfs
Sun Java System Access Manager	SUNWamcon
	SUNWamdsc
	SUNWamext
	SUNWamfcd
	SUNWamjwsdp
	SUNWamma
	SUNWammae
	SUNWampwd
	SUNWamrsa
	SUNWamsam

表 15-2 Java Studio Enterprise パッケージ (Solaris OS 版) (続き)

コンポーネント製品	パッケージ名
	SUNWamsci
	SUNWamsdk
	SUNWamsdkconfig
	SUNWamsvc
	SUNWamsvcconfig
	SUNWamsws
	SUNWamutl
	SUNWcomic
	SUNWcomis
Sun Java System Administration Server (Sun Java System Directory Server のサポート用)	SUNWasvc
	SUNWasvcp
	SUNWasvr
	SUNWasvu
Sun Java System Directory Server	SUNWdsvcp
	SUNWdsvh
	SUNWdsvhx
	SUNWdsvpl
	SUNWdsvr
	SUNWdsvu
	SUNWdsvx
Sun ONE Web Server	SUNWawbsvr
	SUNWwbsvr
Sun ONE Application Server 7	SUNWasaco
	SUNWascmo
	SUNWasdbo
	SUNWasdmo

表 15-2 Java Studio Enterprise パッケージ (Solaris OS 版) (続き)

コンポーネント製品	パッケージ名
	SUNWasmano
	SUNWaso
	SUNWascmlo
	SUNWasro
Sun Java System Access Manager Sun ONE Application Server 7 用 Policy Agent	SUNWamas
Sun Java System Message Queue	SUNWiqcdv
	SUNWiqcrt
	SUNWiqdoc
	SUNWiqfs
	SUNWiqjx
	SUNWiqlen
	SUNWiqlpl
	SUNWiqr
	SUNWiqu
	SUNWiquc
	SUNWiqum
Sun Java Studio Enterprise 7	SUNWjstudio

▼ パッケージを手動で削除する

1. (Directory Server の場合) Directory Server 用のパッケージを手動で削除する場合は、先ず次の手順を実施してください。
 - a. Directory Server インスタンスを起動します。以下はその例です。

```
# cd /opt/SUNWdirserver/slapd-instance-name
# ./start-slapd
```

b. Directory Server を構成解除します。

```
# /usr/sbin/directoryserver unconfigure
```

c. Directory Server Administration Console を構成解除します。

```
# /usr/sbin/directoryserver unconfigure
```

2. pkgrm コマンドを使用して、削除されていない Java Studio Enterprise コンポーネント製品パッケージを削除します。

この作業は、表 15-2 に示している順序で注意しながら行ってください。順序通りにパッケージを削除しないと、パッケージの依存関係のための予期しない問題が発生することがあります。この方法について不明な点がある場合は、システム管理者にお尋ねください。

▼ 製品レジストリファイルを手動で編集する

Java Studio Enterprise は、インストールされているすべてのパッケージおよび zip ユニットのメタデータレコードを保持します。この情報は、productregistry というファイルに記録されます。この productregistry ファイルは XML マークアップ規格に従っており、プラットフォーム別の違いはありません。このファイルがある場所は、以下のとおりです。

- (Solaris OS の場合) /var/sadm/install
- (Microsoft Windows 2000 の場合) - %SystemDrive%/WINNT/system32
- (Microsoft Windows XP Professional の場合) - %SystemDrive%/WINDOWS/system32

以下は、代表的な製品レジストリの内容例です。

コード例 15-1 XML エントリ例

```
<productregistry>
  <version>0.6</version>
  <components>
    <compid>Looking Glass
      <compversion>1.0
        <uniquename>Project Looking Glass</uniquename>
        <compinstance>
          <parent>Java Desktop System
            <instance>1
              <version>1.0</version>
            </instance>
          </parent>
          <children>
            <compref>Java 3D API
              <instance>1
                <version>1.0</version>
              </instance>
            </compref>
          </children>
          <comptype>FEATURE</comptype>
          <location>/opt/lookingglass</location>
          <dependent>
            <compref>Java Desktop System
              <instance>1
                <version>1.0</version>
              </instance>
            </compref>
          </dependent>
          <required>
            <compref>Java 3D API
              <instance>1
                <version>1.0</version>
              </instance>
            </compref>
          </required>
        </compinstance>
      </compversion>
    </compid>
  </components>
</prodregistry>
```

例にあるように、各製品は、compid タグで識別されます。compid には 1 つまたは複数のバージョンがあり、バージョンには 1 つまたは複数のインスタスがあります。各インスタスには、comptype タグが 1 つあり、これは component か feature、product のいずれかです。compinstance には、必須コンポーネントまたは子コンポーネントに関する 1 つまたは複数のエントリがあります。

製品レジストリの手動編集は推奨できる方法ではありませんが、インストールしたものが壊れたり、アンインストールに失敗したりしたシステムを修復する必要がある場合は、以下の手順で編集できます。

1. **安全のために productregistry ファイルのバックアップコピーを作成します。**
2. **不要な compid のエントリ全体を削除します。**
このためには、<compid> タグから対応する </compid> タグまでを削除します。慎重に行ってください。
3. **そのエントリの必須または子パッケージすべてを削除します。**
compid が示す製品に、複数のバージョンが存在することがあります。エントリを削除するバージョンを間違いないよう注意する必要があります。

表 15-3 は compid エントリをまとめたもので、実際に表示される compid エントリ数は、インストールされているコンポーネント製品によって異なります。

表 15-3 製品レジストリファイルの Compid (Microsoft Windows)

コンポーネント製品	Compid
Sun Java Studio Enterprise 7 2004Q4	ApplicationServer SUNWasaco.zip SUNWascmlo.zip SUNWascmo.zip SUNWasdbo.zip SUNWasdmo.zip SUNWaso.zip SUNWaspx.zip SUNWasro.zip SUNWaclg.zip SUNWicu.zip SUNWjaf.zip SUNWjhrt.zip SUNWjmail.zip SUNWpr.zip SUNWtls.zip SUNWxrgrt.zip SUNWxrpert.zip SUNWxsrt.zip ant.zip SUNWjaxp.zip CollabServer CollabServer

表 15-3 製品レジストリファイルの Compid (Microsoft Windows) (続き)

コンポーネント製品	Compid
	DirectoryServer
	Sun ONE Server Basic System Libraries
	basesys
	Sun ONE Server Basic Libraries
	base
	Sun ONE Directory Suite
	Sun ONE Directory Console Support
	slapd-client
	Sun ONE Directory Server
	slapd
	nsperl553
	perldap
	Sun ONE Administration Services
	Sun ONE Administration Server
	admin
	Sun ONE Administration Console
	admin-client
	Sun ONE Server Console
	Sun ONE Server Console Core
	base-client
	Java Runtime Environment
	IdentityServer
	PolicyAgent
	PortalServer
	SUNWpscore
	SUNWpsEtcOptCore
	SUNWpsIdentityCore
	SUNWpsc
	SUNWpsp
	SUNWpspEtcOpt.zip
	SUNWpsps
	SUNWpspsEtcOpt
	MessageQueue
	MessageQueue
	OrionDevComponents
	SUNWjstudio
	WhatsNext.zip
	locale.zip

表 15-3 製品レジストリファイルの Compid (Microsoft Windows) (続き)

コンポーネント製品	Compid
	Studio Studio.Core Studio.UML
	WebServer
Sun ONE Identity Server	CommonDomainServices Web server silent install template Introduction War File ConfigureExistingDirectoryServer locale DS Config file Password Dll LDAPTools DS Config utils SunONEIdentityServerAdminConsole Console War File SunONEIdentityServerManagementandPolicyServices services zip file common zip file Services War File migration SunONEWebServerPasswordServiceDeployment Password Services War file
Sun ONE Identity Server Policy Agent for Sun ONE Application Server	Sun ONE Identity Server Policy Agent for Sun ONE Application Server 7.0 Sun(tm) ONE Identity Server Policy Agent for Sun ONE Application Server 7.0 Agent uninstall script Agent Admin script Agent Resource Bundle Agent Installer Toolkit

次の表は、Solaris OS マシンでの Sun Java Studio Enterprise 7 製品レジストリの compid をまとめています。

表 15-4 製品レジストリファイルの Compid (Solaris OS)

製品	Compid
Administration Server	Sun Java(TM) System Server Console Java Runtime Environment Sun Java(TM) System Server Console Core Sun Java(TM) System Server Suite Sun Java(TM) System Administration Console Sun Java(TM) System Administration Server
Directory Server	Sun Java(TM) System Directory Suite Sun Java(TM) System Directory Console Support Sun Java(TM) System Directory Server Sun Java(TM) System Server Basic Libraries
Sun ONE Identity Server Policy Agent for Sun ONE Application Server	Sun ONE Application Server 7.0 用 Sun ONE Identity Server Policy Agent Agent Admin script Agent Installer Toolkit Agent Resource Bundle Agent uninstall script SUNWamas
Sun Java Studio Enterprise 7 2004Q4	ApplicationServer SUNWasaco SUNWascml0 SUNWascmo SUNWasdbo SUNWasdmo SUNWasmano SUNWaso SUNWasro CollabServer SUNWiimdv

表 15-4 製品レジストリファイルの Compid (Solaris OS) (続き)

製品	Compid
	DirectoryServer
	SUNWasvcp
	SUNWasvr
	SUNWasvu
	SUNWdsvcp
	SUNWdsvh
	SUNWdsvhx
	SUNWdsvpl
	SUNWdsvr
	SUNWdsvu
	SUNWdsvx
	IdentityServer
	SUNWamcon
	SUNWamconsdk
	SUNWamext
	SUNWamfcd
	SUNWamjwsdp
	SUNWamma
	SUNWammae
	SUNWampwd
	SUNWamrsa
	SUNWamsam
	SUNWamsci
	SUNWamsdk
	SUNWamsdkconfig
	SUNWamsvc
	SUNWamsvcconfig
	SUNWamutl
	JSEDocs
	locale.zip
	WhatsNext.zip

表 15-4 製品レジストリファイルの Compid (Solaris OS) (続き)

製品	Compid
	MessageQueue
	SUNWiqdoc
	SUNWiqfs
	SUNWiqjx
	SUNWiqlpl
	SUNWiqr
	SUNWiqu
	SUNWiquc
	SUNWiqum
	PolicyAgent
	PortalServer
	SUNWiimps
	SUNWps
	SUNWpsap
	SUNWpsc
	SUNWpscfg
	SUNWpscp
	SUNWpsdis
	SUNWpsdt
	SUNWpsdta
	SUNWpsdte
	SUNWpsdtm
	SUNWpsdtp
	SUNWpsdtx
	SUNWpsma
	SUNWpsmad
	SUNWpsmai
	SUNWpsmas
	SUNWpsmig
	SUNWpsmp
	SUNWpsnm
	SUNWpsoh
	SUNWpsp
	SUNWpsps
	SUNWpsrw

表 15-4 製品レジストリファイルの Compid (Solaris OS) (続き)

製品	Compid
	SUNWpsrwa
	SUNWpssdk
	SUNWpsse
	SUNWpssea
	SUNWpssep
	SUNWpssp
	SUNWpssso
	SUNWpsssoa
	SUNWpssub
	SUNWpstlj
	SUNWpswsrpcommon
	SUNWpswsrpconsumer
	SUNWpswsrpconsumerconfig
	SUNWpswsrpconsumersample
	SUNWpswsrpproducer
	SUNWpswsrpproducer-sample
	Studio
	SUNWjse
	SUNWjseuml
	WebServer
	SUNWwbsvr
	SUNWawbsvr

付録 A

Solaris OS 用パッチのパッチ番号と説明

この付録の各表は、Java Studio Enterprise コンポーネント製品が必要とする Solaris OS 用パッチのパッチ番号と説明です。これらのパッチは、SunSolve Patch Support ポータルサイト (<http://sunsolve.sun.com>) にあります。必要なパッチについての最新情報は、『Sun Java Studio Enterprise 7 2004Q4 リリースノート』を参照してください。システム要件検査のところまで Java Studio Enterprise インストーラを実行すると、選択されたインストール方法およびコンポーネント製品に従って必要なパッチの一覧が作成されます。

表に示されている Java Studio Enterprise コンポーネント製品名は、単なる参照用です。

注 – 表はいずれも、最低限必要なパッチレベルの一覧です。SunSolve の Web ページに新しいパッチレベルがある場合は、そのレベルを利用できます。

表 A-1 x86 版 Solaris 9 OS 用パッチのパッチ番号と説明

コンポーネント製品	パッチ識別番号 - 最低限必要なパッチレベル	パッチの説明
インストーラ	115755-02	zlib セキュリティパッチ
J2SE, version 1.4.2_05 platform	112786-32	X11 6.6.1_x86: Xsun patch

表 A-2 SPARC 版 Solaris 9 OS 用パッチのパッチ番号と説明

コンポーネント製品	パッチ識別番号 - 最低限必要なパッチレベル	パッチの説明
Solaris 9 SPARC 用 SUNWlib	115754-02	SunOS 5.9: zlib セキュリティパッチ
J2SE, version 1.4.2_05 platform	113886-23	OpenGL 1.3: Solaris (32) ビット用 OpenGL パッチ
	113096-03	X11 6.6.1: OWconfig パッチ
	112785-43	X11 6.6.1: Xsun パッチ

表 A-3 SPARC 版 Solaris 8 OS 用パッチのパッチ番号と説明

コンポーネント製品	パッチ識別番号 - 最低限必要なパッチレベル	パッチの説明
インストーラ	110380-04	ufssnapshots サポート、libadm
	110934-13	pkgtrans、pkgadd、pkgchk、pkgmk、 libpkg.a
Application Server	109326-06	libresolv.so.2、in.named
	108993-26 (108827 廃止)	LDAP2 クライアント、libc、libthread、 libnsl ライブラリ
Directory Server	108434-13	C++ 用 32 ビット共有ライブラリのパッチ
	108528-24	カーネルアップデート
	108989-02	/usr/kernel/sys/acctctl and /usr/kernel/sys/exacctsys
	108993-26	LDAP2 クライアント、libc、libthread、 libnsl ライブラリ
	109147-27	リンカー
	109326-10	libresolv.so.2、in.named パッチ
	108435-12	C++ 用 64 ビット共有ライブラリのパッチ
Access Manager	112611	/usr/lib/libz.so.1
	110380-04	ufssnapshots サポート、libadm
	110934-13	pkgtrans、pkgadd、pkgchk、pkgmk、 libpkg.a
Message Queue	J2SE 用のパッチ	
Web Server	J2SE 用のパッチ	

表 A-3 SPARC 版 Solaris 8 OS 用パッチのパッチ番号と説明 (続き)

コンポーネント製品	パッチ識別番号 - 最低限必要なパッチ レベル	パッチの説明
	112611	/usr/lib/libz.so.1
Portal Server	J2SE 用のパッチ	
Java Studio Enterprise IDE	J2SE 用のパッチ	
J2SE version 1.4.2_05 platform	108434-17	C++ 用 32 ビット共有ライブラリのパッチ
	108435-13	64 ビット共有ライブラリ
	108528-29	カーネルアップデート用パッチ
	108652-83	X11 6.4.1: Xsun
	108773-18	IIIM および X の入出力メソッド
	108921-21	CDE 1.4: dtwm
	108940-64	Motif 1.2.7 および 2.1.1: 実行時ライブラリ
	108987-13	patchadd および patchrm 用のパッチ
	108989-02	/usr/kernel/sys/acctctl and /usr/kernel/sys/exacctsy
	108993-37	LDAP2 クライアント、libc、libthread、 libnsl ライブラリのパッチ
	109147-30	リンカーのパッチ
	109326-16	libresolv.so.2、in.named
	110386-03	RBAC 機能のパッチ
	110615-12	sendmail
	111023-03	/kernel/fs/mntfs、 /kernel/fs/sparcv9/mntfs のパッチ
	111111-04	/usr/bin/nawk のパッチ
	111308-05	/usr/lib/libmtmalloc.so.1 のパッチ
	111310-01	/usr/lib/libdhcpagent.so.1
	111317-05	/sbin/init and /usr/sbin/init
	112003-03	64 ビット Solaris 8 ISO-1 または ISO-15 の フォントセット
	112396-02	/usr/bin/fgrep のパッチ
	112438-03	/kernel/drv/random のパッチ

表 A-3 SPARC 版 Solaris 8 OS 用パッチのパッチ番号と説明 (続き)

コンポーネント製品	パッチ識別番号 - 最低限必要なパッチレベル	パッチの説明
	112472-01	Lucinda Sans Thai Typewriter が選択されたときの Font2DTest の異常終了
	113648-03	/usr/sbin/mount のパッチ
	113886-23	Solaris (32 ビット) 用の OpenGL 1.3 パッチ
	115827-01	/sbin/sulogin and /sbin/netstrategy
	116602-01	/sbin/uadmin and /sbin/hostconfig

SunSolve Patch Support ポータルサイト (<http://sunsolve.sun.com>) では、これらのパッチに関する追加情報を提供しています。このパッチポータルサイトのリンクをクリックしてください。

付録 B

インストールした Java Studio Enterprise のディレクトリ構造

この付録では、Sun Java Studio Enterprise 7 のツールコンポーネントおよびオプションサーバー両方を完全インストールした場合のディレクトリ構造を説明しています。次の表は、ディレクトリまたはフォルダ名とその内容の全般的な説明です。

表 B-1 ツールコンポーネントおよびオプションサーバーのインストールフォルダ (Microsoft Windows)

フォルダ名と説明	内容
<p>%Drive%\java-studio-install-dir</p> <p>デフォルトの最上位インストールディレクトリ = Sun\jstudio_04q4</p>	<p>ファイル :</p> <ul style="list-style-type: none"> • Configuration_Data.html • LICENSE.txt - ライセンス契約書のテキスト • Summary_Report.timestamp • uninstall.bat • uninstall_Sun_Java_tm_Studio_Enterprise.class <p>ディレクトリ :</p> <ul style="list-style-type: none"> • AppServer7- Application Server ファイル • bin - サーバーの起動および停止スクリプトなどのユーティリティの実行可能ファイルとライセンスマネージャツールの実行可能ファイル。これらスクリプトを使用したときのログファイルも含まれます。 • CollabRuntime - IDE のコラボレーション機能を有効にします。 • DirectoryServer5.2 - Directory Server ファイル • Docs - 一部マニュアルファイル • Ent_04Q4 - Studio 製品のファイル • .private - 隠しディレクトリ • IS6.1 - Access Manager ファイル • MessageQueue3.5 - Message Queue ファイル • PolicyAgent - Policy Agent ファイル • PortalServer6.2 - Portal Server ファイル • system - ライセンスファイル • WebServer6_2004Q1 - Web Server ファイル

表 B-2 ツールコンポーネントおよびオプションサーバーのインストールフォルダ (Solaris OS)

ディレクトリ名と説明	内容 - ファイル、ディレクトリ、シンボリックリンク
<p><i>java-studio-install-dir</i> デフォルトの最上位インストールディレクトリは = /opt/SUNWjstudio</p>	<p>ファイル :</p> <ul style="list-style-type: none"> • Configuration_Data.html • LICENSE.txt - ライセンス契約書のテキスト • Summary_Report.timestamp • uninstall • uninstall_Sun_Java_tm_Studio_Enterprise.class <p>ディレクトリ :</p> <ul style="list-style-type: none"> • Ent_04Q4 - Studio 製品のファイル • bin - サーバーの起動および停止スクリプトなどのユーティリティの実行可能ファイルとライセンスマネージャツールの実行可能ファイル。 • Docs - 一部マニュアルファイル • .private - 隠しディレクトリ • etc - 不使用、無視 <p>シンボリックリンク :</p> <ul style="list-style-type: none"> • AppServer7 -> Application Server ファイル • CollabRuntime -> コラボレーション実行環境ファイル • DirectoryServer5_2004Q2 -> Directory Server ファイル • IS6_2004Q2 -> Access Manager ファイル • PolicyAgent -> Policy Agent ファイル • PortalServer6_2004Q2 -> Portal Server ファイル • WebServer6_2004Q1 -> Web Server ファイル
/opt/SUNWappserver	Sun Java System Application Server インストールディレクトリ
/opt/SUNWdirserver	Sun Java System Directory Server インストールディレクトリ
/opt/SUNWam	Sun Java System Access Manager インストールディレクトリおよび Sun Java System Identity Server Policy Agent インストールディレクトリ
/opt/SUNWiim	コラボレーション実行環境 - IDE のコラボレーション機能を有効にします。
/opt/SUNWps	Sun Java System Portal Server インストールディレクトリ
/opt/SUNWwbsvr	Sun Java System Web Server インストールディレクトリ

初めて IDE を起動すると、ユーザーディレクトリが作成されます。詳細は、69 ページの「Java Studio Enterprise IDE のユーザーディレクトリ」を参照してください。

付録 C

Java Studio Enterprise サーバーの リファレンス (Microsoft Windows)

この付録は、Microsoft Windows システムにインストールされる Java Studio Enterprise サーバーの詳細なリファレンスです。

Microsoft Windows システムの場合、Java Studio Enterprise のデフォルトの最上位インストールディレクトリは、C:\Sun\jstudio_04Q4 です。ただし、インストール中に別のインストールディレクトリを指定することができます。次の表では、最上位インストールディレクトリを変数 *java-studio-install-dir* で表しています。

ポート番号の割り当て

Java Studio Enterprise インストーラは、デフォルトのポート番号を使用してサーバーを構成します。ただし、他のアプリケーションが同じポート番号を使用していることを検出した場合は、ポート番号 59152 ~ 65534 の専用の範囲からポート番号を自動的に割り当てます。

各サーバーの実際のポート番号は、インストールの最後の構成の概要で確認できません。この情報の表示に関する詳細は、108 ページの「構成情報の確認」を参照してください。

コマンド行の使用法

次のインストールディレクトリには、コマンド行からすべてのサーバーを起動または停止するためのスクリプトが含まれています。

- *java-studio-install-dir*\bin

サーバーの詳細リファレンス

次の表に示すログファイルは、Windows ユーティリティのメモ帳を使って見ることができます。

注 - 変数 *server-name* の形式は、*machinename* または *machinename.domainname* のいずれかです。

表 C-1 Sun Java System Directory Server 詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
製品の依存関係	なし
デフォルトのディレクトリ	<code>java-studio-install-dir\DirectoryServer5.2</code>
Windows サービスおよびプロセス名	Sun ONE Directory Server (<i>server-name</i>) <code>ns-slapd slap-d</code>
起動および停止スクリプト	<code>java-studio-install-dir\DirectoryServer5.2\slapd-server-name\start-slapd.bat</code> <code>java-studio-install-dir\DirectoryServer5.2\slapd-server-name\stop-slapd.bat</code>
ログファイル	<code>java-studio-install-dir\DirectoryServer5.2\slapd-server-name\logs\access</code> <code>java-studio-install-dir\DirectoryServer5.2\slapd-server-name\logs\errors</code> * これらのファイルはメモ帳で見ることが可能
管理ツール	表 C-2 Sun ONE Directory Server 管理サーバーを参照。 管理クライアント： <code>http://machinename:admin-port-number</code> (<code>port-number</code> は、インストール中に Directory Server 管理サーバーに割り当てられたポート番号)
構成ファイル	<code>java-studio-install-dir\DirectoryServer5.2\slapd-server-name\config\dse.ldif</code>
デフォルトのサーバーポート番号	389

表 C-2 Sun Java System Directory Server 管理サーバーの詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
製品の依存関係	Sun Java System Directory Server
インストールディレクトリ	<code>java-studio-install-dir\DirectoryServer5.2</code>
Windows サービス名	Sun ONE Administration Server 5.2

表 C-2 Sun Java System Directory Server 管理サーバーの詳細リファレンス (続き)

サーバーの詳細	説明
起動および停止スクリプト	<i>java-studio-install-dir</i> \DirectoryServer5.2\start-admin.cmd <i>java-studio-install-dir</i> \DirectoryServer5.2\stop-admin.cmd
ログファイル	<i>java-studio-install-dir</i> \DirectoryServer5.2\admin-serv\logs
管理ツール	<i>java-studio-install-dir</i> \DirectoryServer5.2\startconsole.exe
構成ファイル	<i>java-studio-install-dir</i> \DirectoryServer5.2\admin-serv\config <i>java-studio-install-dir</i> \DirectoryServer5.2\shared\config
デフォルトのポート番号	390

表 C-3 Sun Java System Web Server 詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
製品の依存関係	なし
インストールディレクトリ	<i>java-studio-install-dir</i> \WebServer6.1
Windows サービス名 プロセス名	Sun Java System Web Server (<i>https-server-name</i>) webservd; webservd-wdog
起動および停止スクリプト	<i>java-studio-install-dir</i> \WebServer6.1\https-server-name\startsvr.bat <i>java-studio-install-dir</i> \WebServer6.1\https-server-name\stopsvr.bat
ログファイル	<i>java-studio-install-dir</i> \WebServer6.1\https-server-name\logs\access <i>java-studio-install-dir</i> \WebServer6.1\https-server-name\logs\error
管理ツール	管理サーバー : <i>java-studio-install-dir</i> \WebServer6.1\https-admserv\startsvr.bat stopsvr.bat 管理クライアント : 「スタート」メニュー>「プログラム」>「Sun Microsystems」>「Java Studio Enterprise 7 2004Q4」>「サーバー管理」>「Web Server」 または <code>http://machinename:admin-port-number</code>
構成ファイル	<i>java-studio-install-dir</i> \WebServer6.1\https-server-name\config 下にあるすべてのファイル
デフォルトの HTTP サーバーポート番号	80
デフォルトの管理ポート番号	8888

表 C-4 Sun Java System Application Server 詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
製品の依存関係	Sun Java System Message Queue
インストールディレクトリ	<code>java-studio-install-dir\AppServer7</code>
Windows サービスおよびプロセス名	Sun App Server 7 (domain1:server1) Sun App Server 7 Admin Server (domain1:admin-server) appservd; appservd-wdog
起動および停止スクリプト	<code>java-studio-install-dir\AppServer7\bin\asadmin.bat start-instance server-name</code> <code>java-studio-install-dir\AppServer7\bin\asadmin.bat stop-instance server-name</code> または <ul style="list-style-type: none"> すべての Application Server インスタンスの起動 <code>java-studio-install-dir\AppServer7\bin\asadmin.bat start-appserv</code> すべての Application Server インスタンスの停止 <code>java-studio-install-dir\AppServer7\bin\asadmin.bat stop-appserv</code>
ログファイル	<code>java-studio-install-dir\AppServer7\domains\domain1\admin-server\logs</code> <code>java-studio-install-dir\AppServer7\domains\domain1\server1\logs</code>
管理ツール	管理サーバー : <code>java-studio-install-dir\AppServer7\bin\asadmin.bat start-instance admin-server</code> 管理クライアント : <code>http://machinename:admin-port-number</code>
構成ファイル	<code>AppServer7\domains\domain1\admin-server\config</code> <code>AppServer7\domains\domain1\server1\config</code>
デフォルトの HTTP サーバーポート番号	8080
デフォルトの管理ポート番号	4848

表 C-5 Sun Java System Access Manager 詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
製品の依存関係	Sun Java System Directory Server Web コンテナ。Application Server (デフォルト) または Web Server のいずれか
デフォルトの <i>java-studio-install-dir</i>	<i>java-studio-install-dir</i> \IS6.1
Windows サービスプロセス	Web コンテナに依存： webservd、Web Server がホストの場合 appservd、Application Server がホストの場合
起動および停止スクリプト	なし - Directory Server を起動してから、Web コンテナを起動。 停止 - Web コンテナを停止。
ログファイル	次のディレクトリ下において、名前が am または sso で始まるファイル。 <i>java-studio-install-dir</i> \IS6.1\debug - For example: amAuth, amXMLHandler <i>java-studio-install-dir</i> \IS6.1\logs
管理ツール	管理クライアント: http://server-name:port-number/amconsole
構成ファイル	<i>java-studio-install-dir</i> \IS6.1\config
デフォルトのポート番号	専用のポート番号なし。Web コンテナ (Application Server または Web Server) 内で動作。

表 C-6 Sun Java System Portal Server 詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
製品の依存関係	Directory Server Access Manager Web コンテナ。Application Server (デフォルト) または Web Server のいずれか
デフォルトの <i>java-studio-install-dir</i>	<i>java-studio-install-dir</i> \PortalServer6.2
Windows プロセス名	webservd、Web Server がホスト appservd、Application Server がホスト
起動および停止スクリプト	なし - Directory Server を起動してから、Web コンテナを起動。 停止 - Web コンテナを停止。
ログファイル	<i>java-studio-install-dir</i> \IS6.1\debug

表 C-6 Sun Java System Portal Server 詳細リファレンス (続き)

サーバーの詳細	説明
管理ツール	管理クライアント: <code>http://server-name:port-number/amconsole</code>
構成ファイル	<code>java-studio-install-dir\PortalServer6.2\Config\PSConfig.properties</code>
デフォルトのポート番号	専用のポート番号なし。Application Server または Web Server がホスト。

Web コンテナが Application Server の場合

次の表は、Sun Java Studio Enterprise 7 をデフォルトインストールした場合の構成の詳細をまとめています。デフォルトのインストールでは、Application Server が Web アプリケーション、Access Manager、および Portal Server の Web コンテナになります。

表 C-7 Sun Java System Application Server が Web コンテナの場合の詳細リファレンス

ドメイン	所有者	サーバー名	デフォルト ポート	サーバーの場所
domain1	管理者 (administrator) または標準ユーザー: IDE で設定可能で、「サーバーレジストリ」で表示	admin-server	4848	<code>java-studio-install-dir\AppServer7\domains\domain1\admin-server</code>
		server1	8080	<code>java-studio-install-dir\AppServer7\domains\domain1\server1</code>
jstudio-domain	管理者 (administrator) のみ、Access Manager および Portal Server 用の Web コンテナ	admin-server	90	<code>java-studio-install-dir\AppServer7\domains\jstudio-domain\admin-server</code>
		jstudio-server	81	<code>java-studio-install-dir\AppServer7\domains\jstudio-domain\jstudio-server</code>

Web コンテナが Web Server の場合

次の表は、Web アプリケーション、Access Manager、および Portal Server 用の Web コンテナとして Web Server を選択した場合の Sun Java Studio Enterprise 7 構成の詳細をまとめています。インストール中にこの選択を行う方法の詳細は、22 ページの「コンテナの選択」を参照してください。

表 C-8 Sun Java System Web Server が Web コンテナの場合の詳細リファレンス

所有者	サーバー名	デフォルト ポート	用途
管理者 (administrator)	https-admserv	8888	admin server
管理者 (administrator)	https-server-name	80	デフォルトインスタンスサーバー、 Access Manager および Portal Server 用の Web コンテナ

付録 D

Java Studio Enterprise サーバーの リファレンス (Solaris OS)

この付録は、Solaris OS マシンにインストールされる Java Studio Enterprise サーバーのリファレンスです。

Sun Java Studio Enterprise 7 のデフォルトの最上位インストールディレクトリは、`/opt/SUNWjstudio` です。ただし、インストール中に別のインストールディレクトリを指定することができます。インストールディレクトリとして指定可能な場所の詳細は、36 ページの「インストールディレクトリ」を参照してください。

次の表では、最上位インストールディレクトリを変数 `java-studio-install-dir` で表しています。デフォルトのインストールディレクトリには、コンポーネント製品サーバーの実際のインストールディレクトリへのシンボリックリンクが含まれます。

ポート番号の割り当て

Java Studio Enterprise インストーラは、デフォルトのポート番号を使用してサーバーを構成します。以降の表では、それらデフォルトのポート番号だけを示します。ただし、他のアプリケーションが同じポート番号を使用していることを検出した場合は、ポート番号 59152 ~ 65534 の専用の範囲からポート番号を自動的に割り当てます。各サーバーの実際のポート番号は、インストールの最後の概要レポートで確認できます。

この付録は、次のコンポーネント製品の詳細リファレンスです。

- Sun Java System Application Server。表 D-5 を参照。
- Sun Java System Directory Server。表 D-1 を参照。
- Sun Java System Directory Server 管理サーバー。表 D-2 を参照。
- Sun Java System Access Manager。表 D-6 を参照。
- Sun Java System Portal Server。表 D-7 を参照。
- Sun Java System Web Server。表 D-3 を参照。

Web コンテナが Application Server の場合

Application Server が Web コンテナの場合に作成されるドメインの詳細は、75 ページの「Application Server のインスタンス (Solaris OS)」で説明しています。

Web コンテナが Web Server の場合

Web Server が Web コンテナの場合に作成されるドメインの詳細は、91 ページの「適切な Web Server インスタンスの使用 (Solaris OS)」で説明しています。

注 – この後の表で使用されている変数 *server-name* は、*machinename* または *machinename.domainname* の形式です。各サーバーの実際の URL は、*Configuration_Data.html* ファイルを参照することによって確認できます。

表 D-1 Sun Java System Directory Server 詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
製品の依存関係	なし
インストールディレクトリ	<code>java-studio-install-dir/DirectoryServer5_2004Q2 -> /opt/SUNWdirserver</code>
Solaris プロセス名	<code>ns-slapd</code>
起動および停止スクリプト	<code>/opt/SUNWdirserver/slapd-server-name/start-slapd</code> <code>/opt/SUNWdirserver/slapd-server-name/stop-slapd</code>
ログファイル	<code>/opt/SUNWdirserver/slapd-server-name/logs/access</code> <code>/opt/SUNWdirserver/slapd-server-name/logs/errors</code>
管理ツール	表 D-2 を参照。
構成ファイル	<code>/opt/SUNWdirserver/slapd-server-name/config/dse.ldif</code>
デフォルトのサーバーポート番号	389
デフォルトの管理サーバーポート番号	390

表 D-2 Sun Java System Directory Server 管理サーバーの詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
製品の依存関係	Sun Java System Directory Server
インストールディレクトリ	<i>java-studio-install-dir</i> /DirectoryServer5_2004Q2 -> /opt/SUNWdirserver
Solaris プロセス名	ns-httpd; uxwdog
起動および停止スクリプト	/opt/SUNWdirserver/start-admin /opt/SUNWdirserver/stop-admin
ログファイル	/opt/SUNWdirserver/admin-serv/logs/
管理ツール	/opt/SUNWdirserver/startconsole
構成ファイル	/opt/SUNWdirserver/admin-serv/config /opt/SUNWdirserver/shared/config
デフォルトのポート番号	390

表 D-3 Sun Java System Web Server 詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
製品の依存関係	なし
インストールディレクトリ	<i>java-studio-install-dir</i> /WebServer6.1 -> /opt/SUNWwbsvr
Solaris プロセス名	webservd; webservd-wdog
起動および停止スクリプト	/opt/SUNWwbsvr/https-server-name/start /opt/SUNWwbsvr/https-server-name/stop
ログファイル	/opt/SUNWwbsvr/https-server-name/logs/access /opt/SUNWwbsvr/https-server-name/logs/error
管理ツール	管理サーバー: /opt/SUNWwbsvr/https-admserv/start stop 管理クライアント: http://hostname:admin-port-number
構成ファイル	/opt/SUNWwbsvr/https-server-name/config 下にあるすべてのファイル
デフォルトの HTTP サーバー ポート番号	80
デフォルトの管理ポート番号	8888

表 D-4 は、インストール中に root 以外のユーザー用に作成される 2 つ目の Web Server インスタンスを表しています。この表にない項目は、表 D-4 で示されている内容と同じです。表 D-3 インストール中の root 以外のインスタンスの作成についての詳細は、37 ページの「root 以外のユーザーによる製品の使用」を参照してください。

表 D-4 Sun Java System Web Server root 以外のインスタンスの詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
インスタンス名	https-jstudio
デフォルトの HTTP サーバーポート番号	8000
デフォルトの管理ポート番号	8888
起動および停止スクリプト	/opt/SUNWwbsvr/https-jstudio/start /opt/SUNWwbsvr/https-jstudio/stop
ログファイル	/opt/SUNWwbsvr/https-jstudio/logs/access /opt/SUNWwbsvr/https-jstudio/logs/error
構成ファイル	/opt/SUNWwbsvr/https-jstudio/config 下にあるすべてのファイル

表 D-5 Sun Java System Application Server 詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
製品の依存関係	Sun Java System Message Queue
インストールディレクトリ	<i>java-studio-install-dir</i> /AppServer7 -> /opt/SUNWappserver
Solaris プロセス名	appservd; appservd-wdog
起動および停止スクリプト	/opt/SUNWappserver/bin/asadmin/start-instance <i>server-name</i> /opt/SUNWappserver/bin/asadmin/stop-instance <i>server-name</i> または <ul style="list-style-type: none"> すべてのインスタンスの起動 /opt/SUNWappserver/bin/asadmin/start-appserv
ログファイル	/var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/admin-server/logs/access /var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/server1/logs/server.log
管理ツール	管理サーバー： /opt/SUNWappserver/bin/asadmin start-instance admin-server 管理クライアント： http://machinename:admin-port-number

表 D-5 Sun Java System Application Server 詳細リファレンス (続き)

サーバーの詳細	説明
構成ファイル	<code>var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/admin-server/config</code>
デフォルトの HTTP サーバーポート番号	8080
デフォルトの管理ポート番号	4848
ドメイン	<code>/var/opt/SUNWappserver7/domains</code>

表 D-6 Sun Java System Access Manager 詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
製品の依存関係	Directory Server Web コンテナ。Application Server (デフォルト) または Web Server のいずれか
インストールディレクトリ	<code>java-studio-install-dir/IS6_2004Q2 -> /opt/SUNWam</code>
Solaris プロセス名	<code>appservd</code> 、Application Server がホスト <code>webservd</code> 、Web Server がホスト
起動および停止スクリプト	<code>/etc/init.d/amserver start</code> <code>/etc/init.d/amserver stop</code>
ログファイル	次のディレクトリ下にあつて、名前が <code>am</code> または <code>sso</code> で始まるファイル。 <code>/var/opt/SUNWam/debug</code> - 例 : <code>amAuth</code> 、 <code>amXMLHandler</code> <code>/var/opt/SUNWam/logs</code>
管理ツール	管理クライアント : <code>http://hostname:port-number/amserver</code>
構成ファイル	<code>/etc/opt/SUNWam/config</code>
デフォルトのポート番号	専用のポート番号なし。Application Server (デフォルト) または Web Server がホスト。

表 D-7 Sun Java System Portal Server 詳細リファレンス

サーバーの詳細	説明
製品の依存関係	Directory Server Access Manager Web コンテナ。Application Server (デフォルト) または Web Server のいずれか
インストールディレクトリ	<code>java-studio-install-dir/PortalServer6_2004Q2 -> /opt/SUNWps</code>
Solaris プロセス名	<code>appservd</code> 、Application Server がホスト <code>webservd</code> 、Web Server がホスト
起動および停止スクリプト	<code>/etc/init.d/amserver start</code> <code>/etc/init.d/amserver stop</code> または <code>/opt/SUNWps/bin/amserver start stop</code>
ログファイル	<code>/var/opt/SUNWam/debug</code>
管理ツール	管理クライアント： <code>http://hostname:port-number/amserver</code>
構成ファイル	<code>/etc/opt/SUNWps/PSConfig.properties</code>
デフォルトのポート番号	専用のポート番号なし。Application Server (デフォルト) または Web Server がホスト。

付録 E

Java Studio Enterprise における ポートの使用

表 E-1 は、Java Studio Enterprise IDE が使用するポートの一覧です。この一覧には、IDE モジュールとサン以外のコンポーネントが使用するポートが含まれています。また、デフォルトのポート割り当てを変更可能かどうかの情報も含まれています。Java Studio Enterprise サーバーが使用するデフォルトのポート番号については、使用プラットフォームに従って付録 C (Microsoft Windows)、または付録 D (Solaris OS) のいずれかを参照してください。

複数のアプリケーションサーバーを使用するか、マルチユーザー環境で IDE を使用する場合は、ポートの衝突が発生する可能性があります。ポートの衝突が発生し、ポートの割り当てを変更する必要がある場合は、この表を参考に變更してください。

表 E-1 Java Studio Enterprise におけるポートの使用

モジュール、サーバー、サン以外のコンポーネント	デフォルトのポート番号割り当て	説明	デフォルトのポート割り当ての変更方法
NetBeans 内部 HTTP サーバーモジュール	8082	内部サーバー HTTP	衝突が検出されると、デフォルトのポート番号割り当てが自動的に変更されます。
PointBase Restricted Edition	9092		IDE で「ツール」>「PointBase Network Server」>「設定」を選択し、ポート番号を設定します。

表 E-1 Java Studio Enterprise におけるポートの使用 (続き)

モジュール、サーバー、サン以外のコンポーネント	デフォルトのポート番号割り当て	説明	デフォルトのポート割り当ての変更方法
内部 JWSDP Tomcat	8015	サーバー管理	<ol style="list-style-type: none"> 1. IDE の「実行時」ウィンドウで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。 2. 「Tomcat」ノードを展開して、「付属 Tomcat (4.1)」ノードを右クリックし、コンテキストメニューから「プロパティ」を選択します。 3. 「サーバーポート」プロパティを選択し、適切なポート番号を入力します。
	8081	サーバー HTTP	<ol style="list-style-type: none"> 1. IDE の「実行時」ウィンドウで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。 2. 「Tomcat」ノードを展開して、「付属 Tomcat (4.1)」などの関係するサーバーノードを展開します。 3. 編集するホストを表すノードを右クリックし、コンテキストメニューから「プロパティ」を選択します。 4. 「HTTP Connector」プロパティを探して、そのフィールドに適切なポート番号を入力します。
	8443	リダイレクト	<p><code>s1studio-user-dir/JWSDP_base/conf/server.xml</code> を変更します。</p> <p><code>server.xml</code> ファイルの編集は自身の責任で行うことを忘れないでください。編集を始める前に、必ず、使用されている <code>server.xml</code> ファイルのバックアップを取ってください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. IDE の「実行時」ウィンドウで「Tomcat」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。 2. 編集する Tomcat のインストール先のノードを右クリックし、コンテキストメニューから「構成する (server.xml)」を選択します。 <p>ソースエディタに <code>server.xml</code> ファイルが表示されません。これで、<code>server.xml</code> を編集して、デフォルトのポート番号を変更できます。</p>
	11555	IDE デバッガ 接続	<ol style="list-style-type: none"> 1. IDE の「実行時」ウィンドウで「サーバーレジストリ」ノードを展開し、「インストールされているサーバー」ノードを展開します。 2. 「Tomcat」ノードを展開して、「付属 Tomcat (4.1)」ノードを右クリックし、コンテキストメニューから「プロパティ」を選択します。 3. デバッガプロパティのセクションで「デバッガポート」プロパティを探し、そのフィールドに適切なポート番号を入力します。

表 E-1 Java Studio Enterprise におけるポートの使用 (続き)

モジュール、サーバー、 サン以外のコンポーネント	デフォルト のポート番 号割り当て	説明	デフォルトのポート割り当ての変更方法
Java Web Services Developer Pack UDDI サーバー (IDE に付属)	8095	レジストリ サーバー用の Tomcat サー バーポート	<ol style="list-style-type: none"> 1. テキストエディタで <i>java-studio-install-dir/Ent_04Q4/jwsdp/uddi_base/conf/server.xml</i> ファイルを開きます。 2. ポート番号を変更します。 3. IDE を再起動します。
	8089	レジストリ サーバー用の Tomcat HTTP ポート	<ol style="list-style-type: none"> 1. テキストエディタで <i>java-studio-install-dir/Ent_04Q4/jwsdp/uddi_base/conf/server.xml</i> ファイルを開きます。 2. ポート番号を変更します。 3. IDE を再起動します。
	4080	Xindice HTTP	<ol style="list-style-type: none"> 1. テキストエディタで <i>java-studio-install-dir/Ent_04Q4/jwsdp/tools/xindice/config/system.xml</i> ファイルを開きます。 2. ポート番号を変更します。 3. IDE を再起動します。
WebLogic 7.0 または 8.1	7001	サーバー HTTP	デフォルトのポート割り当ては、WebLogic サーバーのインストール中に変更できます。WebLogic を使用する場合は、IDE の「実行時」ウィンドウにある WebLogic サーバーインスタンスの「ポート」プロパティに適切な値が設定されていることを確認してください。
	7002	サーバー HTTPS	デフォルトのポート割り当ては、WebLogic サーバーのインストール中に変更できます。WebLogic を使用する場合は、IDE の「実行時」ウィンドウにある WebLogic サーバーインスタンスの「ポート」プロパティに適切な値が設定されていることを確認してください。

付録 F

Java Studio Enterprise 共有コンポーネント (Solaris OS のみ)

この付録では、Java Studio Enterprise インストーラが Solaris OS マシンにインストールする、またはアップグレードする共有コンポーネントを説明します。サーバー名の列の「○」は、そのサーバー製品によってその共有コンポーネントが使用されることを意味します。

表 F-1 共有コンポーネント

共通テクノロジーコンポーネント	パッケージ名	Directory Server	Web Server	Access Manager	Portal Server	Application Server	Message Queue
Ant	SUNWant					○	
Apache 共通ログ	SUNWaclg					○	
ICU	SUNWicu SUNWicux	○	○			○	
JAF	SUNWjaf				○	○	
JATO	SUNWjato			○	○		
Java ヘルプランタイム	SUNWjhrt					○	○
JavaMail	SUNWjmail			○	○	○	
JAXP	SUNWjaxp			○	○	○	
JAXR	SUNWxrgrt					○	
JAX-RPC	SUNWxrpcrt			○		○	
JSS	SUNWjss	○		○	○		
LDAP C 言語 SDK	SUNWldk SUNWldkx	○	○				

表 F-1 共有コンポーネント (続き)

共通テクノロジーコンポーネント	パッケージ名	Directory Server	Web Server	Access Manager	Portal Server	Application Server	Message Queue
NSPR	SUNWpr SUNWprx	○	○	○	○	○	
NSS	SUNWt1s SUNWt1sx	○	○	○	○	○	
Perl	SUNWp15u					○	
SASL	SUNWsas1 SUNWsas1x	○					
Nova 検索エンジン	SUNWktse		○		○		
SOAP	SUNWxsrt				○	○	○
J2SE	SUNWj3rt SUNWj3dev SUNWj3dmo SUNWj3man	○	○	○	○	○	○
共通モバイルアクセス	SUNWma SUNWmae			○	○		

索引

A

Access Manager

- Web コンテナ, 22
- 検証 (Windows), 114
- 構成の失敗, 148
- 障害追跡, 124, 143, 148
- 詳細リファレンス (Solaris), 193
- 詳細リファレンス (Windows), 185
- バインドユーザーのパスワード, 116

Application Server

- root 以外の使用, 34
- 外部 PointBase への接続, 100
- 互換性の問題, 12
- 詳細リファレンス (Solaris), 192
- 詳細リファレンス (Windows), 184
- 制限事項, 25
- 停止、Solaris コマンド行, 134
- ドメイン, 186

B

- BEA WebLogic サーバー
有効化, 64

C

- CD-ROM
内容, 6
- classpath

- IDE の起動オプション, 68

D

Directory Server

- 検証 (Solaris), 139
- 検証 (Windows), 120
- 障害追跡, 148
- 詳細リファレンス (Solaris), 190
- 詳細リファレンス (Windows), 182

DNS サフィックス

- 設定, 149

DVD

- 内容, 6

I

IDE

- 設定、Look & Feel, 69
- 設定のインポート, 63
- 設定、フォントサイズ, 69
- モジュールの更新, 103
- モジュールの有効化, 64

Identity Server 「Access Manager」も参照

IDE の起動

- Solaris OS, 62
- Windows, 61

- ## J
- J2SE のバージョン, 15
 - Java SDK のバージョン, 15
 - JDBC ドライバ
 - URL の書式, 101
 - インストール済み, 101
 - JRE のバージョン, 15
- ## P
- PointBase, 97 ~ 101
 - 自動起動, 98
 - 障害追跡, 98
 - ユーザーデータの場所, 69
 - 例での利用, 99
 - Portal Server
 - 検証 (Windows), 116
 - 構成の失敗, 148
 - 障害追跡, 148
 - 詳細リファレンス (Solaris), 194
 - 詳細リファレンス (Windows), 185
- ## R
- root 以外の使用
 - Application Server, 37, 77
 - Web Server, 37, 92
 - インストーラのオプション, 37
- ## S
- Solaris OS
 - サポートされているプラットフォーム, 5
 - 状態ファイル ID, 52
 - パッチ, 173
 - パッチ要件, 31
- ## W
- WebLogic サーバー
 - 有効化, 64
- ## Web Server
- root 以外の使用, 34, 92
 - root 以外の使用インスタンス, 192
 - Web コンテナ, 22
 - 検証 (Windows), 111
 - 詳細リファレンス (Solaris), 191
 - 詳細リファレンス (Windows), 183
 - Web コンテナ
 - 選択, 23
 - Web ブラウザ, 63
 - Web プロキシ構成, 63
- ## Windows
- サポートされているプラットフォーム, 5
- ## あ
- アップグレード
 - 共有コンポーネント, 15
 - サーバー, 15
 - 正規ライセンスへの, 105
 - アップデートセンター, 64
 - アプリケーションサーバー
 - デフォルト, 73
 - ドメイン, 79
 - アンインストール
 - Solaris, 43
 - Windows, 27
 - 警告 (Solaris), 43
 - 警告 (Windows), 27
 - コマンドオプション, 57
 - サイレントモードの利用, 45, 56
- ## い
- 依存関係
 - インストールされている製品, 11
 - コンポーネント製品, 10 ~ 14
 - インストーラのパネル
 - root 以外の製品の使用, 37
 - システム要件 (Solaris), 36
 - 製品のシリアル番号, 21
 - 製品の選択 (Windows), 22

- リモートサーバー, 36
- インストール
 - Solaris, 31 ~ 40
 - Windows, 18
 - 言語サポート, 4
 - サイレントモード, 47 ~ 55
 - ラップトップへの, 25
- インストールディレクトリ
 - 指定 (Solaris), 36
 - 指定 (Windows), 23
- インストール前の作業
 - 概要, 4
 - サイレントインストール, 48
- インストール前のシステムの確認, 7, 8, 20

う

- ウィザード
 - 設定, 63
 - 設定インポート, 63
 - 登録, 64

お

- オプションサーバー
 - 説明, 5

か

- 概要レポート, 146
- 管理ドメイン
 - IDE への追加, 83
 - root 以外 (Solaris), 37 ~ 39
 - 起動, 78
 - 作成, 80
 - 説明, 79

き

- 起動オプション, 68
- 共有コンポーネント

- 依存関係 (Solaris OS のみ), 15
- 共通コンポーネント
 - アップグレード, 35
 - 互換性, 15
- 共有コンポーネント, 10
 - アップグレード, 35
 - 互換性, 15

け

- 言語サポート
 - インストール, 4

こ

- 構成情報, 108, 126
 - 確認 (Solaris), 37
 - 確認 (Windows), 24
- 構成データ
 - 表示, 19
- 互換性のない製品, 11, 15
- 互換性の問題, 10 ~ 13
- コマンド行オプション
 - IDE の起動, 67
- コラボレーション実行環境
 - Windows サービスの設定, 66
 - 起動, 65
 - 構成ファイル, 66
 - 停止, 67
 - デバッグ, 66
 - マニュアルの参照, 67
 - ログオプション, 66
- コンポーネント製品
 - 依存関係, 10 ~ 14
 - バージョン, 1

さ

- サーバー
 - root 以外の使用, 34
 - マニュアル (Solaris OS), 137
 - マニュアル (Windows), 118

サーバーの起動
Solaris OS, 127
Windows, 109
障害追跡, 118, 137

サイレントアンインストール, 56

サイレントインストール
インストール前の作業, 48
「第7章」を参照, 47
パラメータ, 52

削除
「アンインストール」を参照, 27

サポートされているプラットフォーム, 5

サンプルアプリケーション
PointBase リソース, 99

し

システム要件, 5
システム要件のレポート, 146
障害追跡, 145 ~ 168

IDE 設定, 70
Solaris OS のインストール, 40
サーバーの検証 (Solaris), 137
サーバーの検証 (Windows), 118
シリアル番号が壊れているエラー, 151
プロキシエラー, 112

詳細リファレンス (Solaris)
Access Manager, 193
Application Server, 192
Directory Server, 190
Portal Server, 194
root 以外の Web Server インスタンス, 192
Web Server, 191

詳細リファレンス (Windows)
Access Manager, 185
Application Server, 184
Directory Server, 182
Portal Server, 185
Web Server, 183

状態ファイル
生成, 40, 47
パラメータ, 52
プラットフォーム ID, 52

編集, 51
状態ファイルのパラメータ, 52
試用ライセンス, 104
初期システム検査レポート, 8, 20
シリアル番号
ライセンスのアップグレード, 105
ライセンスの表示, 104

せ

製品レジストリ
古いエントリの削除, 153, 157
定義, 162
編集, 162
設定インポートウィザード, 63
設定ウィザード, 63
選択
Web コンテナ, 23

そ

ソフトウェアの競合, 10

た

ダウンロードファイル
内容, 7
名前, 7

ち

チュートリアル
PointBase リソースの有効化, 99

つ

ツールコンポーネント
説明, 5

て

停止

- コラボレーション実行環境, 67
- サーバー, 107 ~ 135

ディスク 1 の内容, 6

ディスク 2 の内容, 6

ディスク容量

- 要件, 9

ディスク容量要件

- パフォーマンスの改善, 70
- ユーザーディレクトリ, 69

ディレクトリ

- IDE ユーザー, 68
- インストール先の指定 (Solaris), 36
- インストール先の指定 (Windows), 23
- ダウンロード (Solaris OS), 33
- ダウンロード (Windows のみ), 18

データベース

- IDE における使用, 97
- 外部 PointBase への接続, 100
- 接続, 101

デフォルトのアプリケーションサーバー, 73

と

登録ウィザード, 64

ドメイン名

- DNS サフィックスの設定, 149

は

バージョン

- コンポーネント製品, 1

バインドユーザー

- パスワード, 116

パスワード

- amldapuser, 116
- Identity Server, 115
- 管理ユーザー, 24, 37

ふ

不完全なアンインストール, 7, 19

古いレジストリエントリ, 19

プロキシ構成, 63, 103

- エラーメッセージ, 112

ほ

ポート番号

- IDE における使用, 195
- 確認, 108, 126
- デフォルト (Solaris), 190 ~ 194
- デフォルト (Windows), 182 ~ 186
- 割り当て (Solaris), 189
- 割り当て (Windows), 181

ま

マニュアル

- Application Server, 80, 81
- コンポーネント製品サーバー (Solaris OS), 137
- コンポーネント製品サーバー (Windows), 118

め

メモリー要件, 9

も

モジュール

- IDE の更新, 103

ゆ

ユーザーID 「ユーザー名」を参照

ユーザーディレクトリ, 69

- 指定, 68

ユーザー名

- サーバーアクセス用, 24, 37

よ

要件

- システム, 5
- ディスク容量, 9
- ドメイン名, 149

ら

ライセンス

- アップグレード, 105
- インストーラのパネル, 21
- 試用, 104
- 表示, 104

ラップトップ

- インストール, 25
- 制限事項, 25

れ

例外

- 外部ブラウザ, 70

レジストリキー

- Windows, 154

レポート

- インストーラのログファイル (Solaris), 35
- インストーラ/アンインストーラログ, 146
- インストーラのログファイル (Windows), 19
- インストールの概要 (Windows), 19
- システム要件, 146
- 初期システム検査レポート, 8

ろ

ログファイル

- ide.log, 69
- アンインストール (Solaris), 45
- アンインストール (Windows), 28
- 障害追跡, 145 ~ 147
- 場所, 145
- 表示, 146